

立川文庫  
多廿六編

武士  
大石内藏助東下り

特266

460

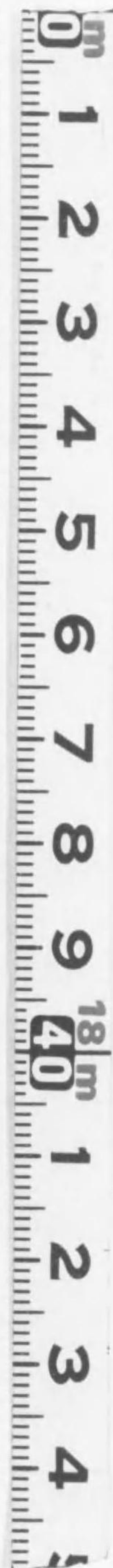
特266-460



1200501125589

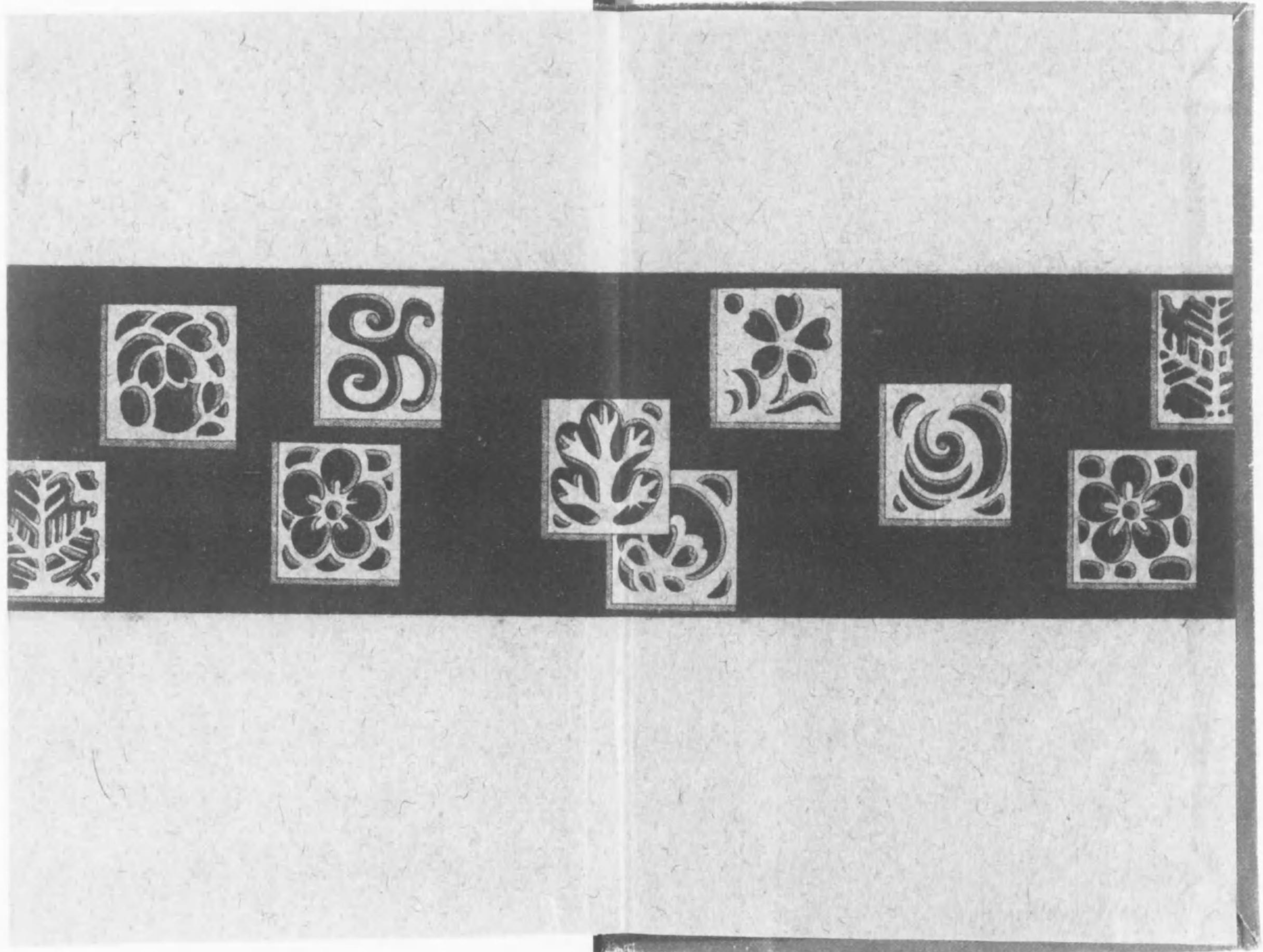
270

14



始





時 266  
460



精武  
道華

大石内藏助



45. 3. 29

内藏



もくろく

▲實じつの所ところ當時とうじは二百石……………一

▲千坂ちさか兵部へいぶが千慮りよの一失……………八

▲間ま十次じゅうじ郎らう光與みつよの逸傳……………二七

▲内儀かみさんより餘程よほど宜よしい女をんなだ……………二四

▲ヤイ〜泣なき聲こゑを出だすな……………三一

▲親おや子の奇遇きぐう・雪中せつちゆうの悲劇……………三九

▲貞婦ていふと孝子こうし、悲惨ひさんの最期……………四七

▲武たけ林はやし唯七ただしち隆重たかしげの逸傳……………五三

目次

▲一飯のお振舞を頂戴したい……………六〇

▲杜若の懸望、粗忽の使者……………六七

▲矢田五郎左衛門助武の逸傳……………七四

▲中の橋上の野猿斬り……………八二

▲濁酒三升・持ち寄りの酒宴……………八九

▲因縁の茅屋、露參の喜悅……………九七

▲神崎與五郎則休の逸傳……………一〇四

▲濱松驛馬喰ひの丑五郎……………一一三

▲假名書きの證文……………一二九

▲堪忍の徳、悪漢の改心……………一二八

目次

▲岡野金右衛門包季の逸傳……………一三五

▲水清ければ魚すます……………一四二

▲吉良邸内繪圖面取り……………一四九

▲少女貞操を全くして自害……………一五六

▲薩摩隼人の典型村上喜劍……………一六三

▲懺悔自ら盡す泉岳寺墓畔……………一七二

▲機は漸く熟す東下り……………一七八

▲麻布南部坂雪の別れ……………一八六

▲寺坂吉右衛門信清の注進……………一九四

▲大高源吾忠雄の逸傳……………二〇一

大石内藏之助東下り

十八ヶ條の申開キ

雪花山人著

○實の所當時は二百石

一樹の蔭に舍り、同じ流れを掬ぶさへ、離別は悲しき涙ぞ進む例ひ、況して  
 や今日は親子夫婦が生別、又死別を兼ね、一世の別れと思はれて、流石石心鐵  
 鷹の大石内藏之助良雄も、胸に萬斛の血涙を湛へながら、表面を飾る喜悅の顔  
 色、其儘坐敷へ立ち戻り、悲痛を紛らす爲めか、有り合したる大盃を取り上げ  
 満みく、酒を注がせて三四杯續けさまに煽り付けた内「サア皆の者、モウ是

目次

▲兩國橋 上千葉其角の出會……………二〇八

▲討入前 最後の句合せ……………二一七

▲壯氣忠烈義士の討入……………二二五

▲芽出度く本懐を達す……………二三三

▲龍の口評 定所十八ヶ條申開……………二四三

▲芳哉 義士の最後、大團圓……………二五〇

目次終

れで邪覺じやまに成なる女房にようぼうとお阿母あははが出て行いつて仕舞しまつたから、是これより後のちは俺おれの家いへは極樂世界ごくらくせかい、毎日まいにち來きて遊あそんで騒さわいで笑わらい、皆みな「夫おれア宜いい、那あんな婆ばアさん、氣きが詰つまつて面白おもしろくありません、サア騒さわげ〜ツ」さ又またもや變かはる酒池肉林しゅちにくりん、高たか躍やく亂舞らんぶの馬鹿ばか騒さわぎ、是これを此方床こなたどこの間の柱はしらを背後うしろにして、始しじう終じゆうの様よう子すを眺ながめて居ゐたる木田善右衛門きだぜんゑもん事こと、猿橋さるはし右閉みぎしめは流石りうせき心中しんちゆうに驚おどろいた、右みぎ「ア、途頭とどう義理ぎりある母親ははや、可愛かわいき女房にようぼう子こ供たご迄まで追おひ出だして仕舞しまつた、老母らうぼは氣丈きぢゆうの性せい質しつ故なま源みなは見みせぬが、妻つまのお關せまはまだ幼おさなき二人ふたりの子こを連つれて、夫おつとの放蕩ほうとうを恨うらみながら此山科このやましかの宅たくを出いで、行ゆく、ア、實じつに大石おおいしと云いふ男おとこは亂暴らんぼうな男おとこだ、此様このやう子すにはモウ仇討あだうちの本心ほんしんのあらう氣遣きづかひは無い、然しからば此由このよし江戸えど表おもてへ申もうし送おくらんと其日そのひは宜いい加減かげんに切り上あげて猿橋さるはし右門みぎもん旅宿りよしゆくへ歸かへつて既に大石おおいしが此この頃ころの舉動きようどう、始はじめ終はりを書かき認したため、仇討あだうちの本心ほんしんのあらざることを申もうし送おくらんさ、早はや中央なつかまで書かき始はじめたが、ヒョイツひょういつと不意ふいに執とつたる筆ふでを投なげ出だして右みぎ「イヤ

待まちて〜、拙者せつしやが江戸えどを出立しゆつの時とき、千坂刑部ちさかけいぶ殿どのより吳々くれくれと申もうし聞きかされし事ことがある、まだ〜此處こゝ等らで大石おおいしの本心ほんしんを見届みとけたと云いふ處ところでは無ないか知らん、總すべて器量きりやうの勝すぐれたる者ものは、百斗ひやくと盡つくきると離はなれ業わざを行なふと申もうす事こと、唐土たうどに於おいては孔明こうめい眼めひに破やぶれて魏城ぎじゆうに籠こもり琴ことを彈たん、仲達ちゆうたつ孔明こうめいの偽いつわり多おほきを恐おそれ、勝かつべき戦いくさひに陣じんを引ひく、死しせる孔明こうめい生いける仲達ちゆうたつを走はしらす杯さか、皆みな是こゝれ意外いはいの謀はかり斗ことである、まだ〜此處こゝ等らで彼かれが胸中けうちゆうを明あらかに見抜みぬいた處ところでは無ない、ドツコイ此處こゝが辛抱しんぼう處ところだ〜又またもや土俵どへう際ぎはで足あしを踏ふみ止どめ、尙なほも以前いぜんの如ごとく大石おおいしに附くついて居ゐるから、折角せつかく大石おおいし内蔵ないざう之助のすけが反問はんもん苦肉くにくの計略けいりやくも、何どうやら畫餅えわへいに終おひりそな様よう子す、流石りうせきの内蔵ないざう之助のすけも是これにはホト〜困こうじ果はて内うち扱さて〜強こゝろ情じゆうな問者もんしやがあればあるものだ、併しかわ吾われが計略けいりやくが餘あまり皮肉ひにくすぎるのかも知しれない、諺ことわざにも擬なつては思案しりあんに能あたはずと云いふから、今度こんどはツアツと笑わらひながらに計はかつて見様みよう〜と思おもひ付ついた、其内日そのうちひならず内蔵ないざう之助のすけは二百五十兩ひゃくごじゅうりゆうと云いふ大金たいきんを出だし



て、馴染の遊女 柏木太夫を身受を成し山科の浪宅へ引揚げて来た、又彼の原惣右衛門の敵女 花園太夫と云ふのも、大石の手から九十兩出して同じく浪宅へ引取つて遣りましたから、大石の家は一時に女郎が二人轉げ込んで来た、唯柏木太夫を落籍してから、内蔵之助は遊廓通ひをせんか云ふと却々然うぢや無い、相變らず交際さ號して、ドン／＼他の遊女に現を抜かして居るから、柏木太夫は格氣を起して、殆ど毎日の如く喧嘩口論、其れが高じて打つ叩く武者振付く噛み付くと云ふ大亂痴き、イヤモウ其不品行と云つたら、殆どお話しに成らない狂態を盡して居る、然るに或日の事、今日は内蔵之助の誕生日だ云ふので、彼の木田善右衛門事猿橋右門を正客として、陽氣の酒宴が始まつて居るが、木田善右衛門も此處で飲む酒は更に面白い様にも見へない、と云ふのは少時く對手をして居る、内蔵之助は柏木太夫を奥の間へ連れ込んで寢込んで仕舞ふ、又原惣右衛門は年甲斐もなく花園太夫と痴話付いて居るけれ

ども、善右衛門の敵女 花照太夫と云ふ女は、相變らず麻勤めをして此處に居ないから、誠に詰らなさそうな顔をして、鬱ぎ込んで居るのを大石が見て取つて、まだ充分酒も廻らない内に内蔵之助は、内「扱て木田氏、斯く其許と御懸意になつて見ると、大石と木田氏杯と云つて居ては、何うも打ち解けたお話しが出来ない、善ハエ内、依つて是れから互に俳名交際をいたそうではござらんか、其許は俳名を蕉嘉と仰せられるそうだが、是れから蕉嘉先生と御呼び申そう、拙者は又俳名を千山と申す故、何うか拙者は千山とお呼び下さい、右「イヤ其れは何うでも宜敷い、内「其處で早速お伺いをするが、其許は久留米の御藩で御知行は何程御取り成さる、右「左様知行は五百石でござる、内「何に五百石、其リア嘘でござらう、貴殿の御顔は失禮ながら五百石と云ふ見識は無い、右「是れは何うも大石氏失禮の御言葉、武士は顔容で食祿は頂きません、彼の豊臣天下の時分に、大谷刑部は癩病で二目と見られぬ男であつたが、彼は五奉行

の一人で、六万石の大名……内「イヤ蕉嘉先生、大谷刑部を此處へ引き合ひに出して比較杯せられては、刑部は草葉の影で嘸残念に思ふでござらう、併し拙者の申するのは決して美男醜男を論ずる譯では無い、食祿の方はチヤンと其人の顔に供はつて居る、尊公は何うしても五百石の見識は無い、サア嘘言を云はすに眞實の事を云ひ給へ、右「是れは何うも困りますなア、實は五百石であつたのだが、親父の代に少々賤きがあつて、當時は四百石……内「役目は……、右「エ……役は番頭で、内「又嘘言だ、何うも番頭と云ふ顔では無い、右「能く其許は虚言と仰せられるが、是れは眞實の事で、内「イヤ虚言だ、其許が此大石を偽はらうと成さるのは大膽だ、今は拙者も斯く見る影もない瘦浪人ではあるが、世に出でし時は打ち出し千五百石、役目は秀穂の城代家老、不時災難に其前に悟り、人の眉毛の動くのを見て其人の善悪を知り、朝鷹の鳴くを聞いて夜雨の降るを辨まへて居る、拙者も一時は諸藩に其名を知られたる大石

内蔵之助、失禮ながら決して凡眼ではござらぬ、何うも尊公は四百石と見えへない、モウ少しお下げ成さい、右「困りますなア、實は四百石であつたが、兄の代に又候賤きがあつて、當時は三百石、内「イヤ三百石と未だ見えぬ、右「見へても見へいでも、其んなことは何うでも宜いではござらぬか、内「イヤ決して宜敷く無い、其許は拙者が悪意に成つた最初は何うだ、祇園一方の樓上で拙者が借りて居る座敷、隣りは御自分がお借り成すつた座敷、双方共藝者、幫間を澤山に呼んで、ソレ隣りに敗けるナ、ソレ向ふに敗けるナと互ひに競争で騒いで居る内に、其許の方から拙者の座敷へ、鼓持が唐紙を外して轉がり込み、一時口論を始めたが扱て仲直りをして見るさ、誠に氣象が面白く合つて、斯く兄弟の如く交際をして居ながら、内幕を話さぬと云ふのは誠に水臭ひ、モウ少し本當の處を云ひ成さい、右「イヤ何うも困りますなア、三百石の處實は又少々賤きがありました、内「オヤ、能く其許のお家には賤きがあ



氣を成すつて、吉良殿へ僅かの擦り傷を負はした斗りで、御主人は切腹、五萬三千石は斷絶、拙者は城代家老を勤めて居つたから、配當のお金も幸ひに澤山頂戴をいたしたが、今では其金子を人に貸して世渡りをして居るが、前に比較るに誠氣樂だ、是れは蕉嘉先生、拙者が假りに定めるのだから、決して御立腹を成されちや困るが、萬一其許の主人に凶變があつて、家名斷絶、金子御配分と相成つた處で、其許の如き小身者は如何程も頂戴は出来ずまい、又無事に勤めて居た處で寒中暑中共に身体も心も粉の如くユギ使はれ、一つ事が間違つてお暇さ成れば其日から派人で喰ふにも困る云ふは、誠にくだらないでござらんか、拙者も一人の實兄があるが、備前の岡山に居つて手紙の取り遣りにも向ふは氣兼ねらしく書いてある、只頼むは此處に居る原惣右衛門に寺四彌太夫の兩人だが、併し是れとても原氏はモウ五十四才に成る人で、拙者はまだ本年四十一才、十年も年が違つては扱て話しも合ひにくひ、時代が違ふから何

うも面白くは無い、其處で今の處相談對手、遊び對手は寺四唯一人である故其許が幸ひに拙者の言を容れて、隠居をして世を遊んで送らうと云ふ望みならば、彌太夫と其許と拙者と、彼の桃園に義を結んだ扇羽、張飛、玄徳と云ふ様な案梅に苦樂を共にして、互ひに楽しく世を送らうではござらんか、何うだ其んな氣はござらぬか、其處で拙者の事を豫て世間では吝嗇だ〜と噂をする様だが、金と云ふものは然うチビ〜遣つては人の爲めに成らぬ、改ためて自分の相談對手にでも成らうと云ふ者へ、固めた金子を出せば其人の身も立つと云ふものでござる……、ア、寺四彌「へい内、ウラム那の奥藏へ行つて千兩箱を一つ擔ぎ出して來て呉れる様に彌「へい、承知いたしました」と寺四彌太夫は、其處を立つて暫らくすると、重もそうに千兩箱を其處へ一つ擔ぎ出して來た内「サア蕉嘉先生、只今拙者の言葉を御承知ならば此千兩を進ぜ、丁度先日も其許の敵敵、花照太夫が拙者への話しに、朋輩が身受けに成つて自分一

人斯んな處へ殘されたのは辛い事だと思ふを云つて居たから、此の金子で在照太夫を身受けをするが宜い、先づ此の内身受金か二百兩、又二百兩で何處かへ家を買ひ、百兩で諸道具を調へ、殘つた五百兩を確かな處へ貸し付け、其時先方から千兩貸して呉れ、三千兩貸して呉れと申して來たら、借主さへ確かな者なら、拙者が幾何でも金主に成つて金を出さう、七十兩一步で拙者が出す金を、其許が五十兩一步で貸し付けて利を取り上げて居つたなら、五十年は南柯の夢、面白く送るこゝが出来たのだ、何うでござる、不承知かな」云けて此方の猿橋右門、不思議そうな顔をして「右へエー、何うも御冗談、私しの氣をお引き成さるのだらう内、イヤイヤ馬鹿な事を、千兩の金を冗談に進げる人があるものか、是れが慥かな證據ではござらんか右エツ、では本當の事でござるか内」ハテ扱て疑ひ深ひ、今は斯く見る隆も無き浪々の身ながら、拙者も素は武士、しかし赤穂の城代家老、口へ出して云つた事は決して跡

へは引き申さぬ右ウーム、其れでは暫らく御待ち下さい」と腕を組んで木田善右衛門の猿橋右門は考へ始めた、是れを後の世に至つて或る識者が、上杉の家老千坂兵部が大石の間者に貧窮者を使つたのは、千坂の千慮の一失である云つた人があつた云ふ、成る程此猿橋右門と云ふ人に、五百石も與へて居たものであれば、千兩位ひの金子に本心を動かさなかつたかも知れぬ、三百石の人も時々千兩の金を見る事はあるが、悲しいかな此猿橋右門は吉良左兵衛佐の祐筆で、給金は僅か三兩と三人扶持、是れが方今では到底活計は立たないけれども、其當時種々な役徳杯があつて、漸々一年に十兩と三人扶持却々百兩の金を見る事杯は無い、處へ持つて來て今千兩と云ふ大金を鼻の先きに突き付けられたから、ツイフラー／＼と本心が動き始めた、右ハテナ、待てよ、此處で俺れが此大石の本心を確かに見届けて歸つた處で、非常に出世をして先づ用人にでも成れば宜いのだ、其用人に成つた處で僅か給料は二十五

兩五人扶持、一日に割り當てれば幾何にも付かぬ、切めて御本家上杉家にでも  
在れば又出世をする云ふ望みもあるが、吉良家をスツカリ貰つた處が四千五  
百石、其れでも毎日に割つて見れば誠に僅かな物、是れは千兩貰つて後の樂  
しみをする方が宜い」さヒヨイツと心が變つたから右「ア、其れでは御城代、  
何分宜敷く願ひます」と切り出して仕舞つた、ホツと胸を撫で下した一坐の銘  
々、中にも原惣右衛門は惣「ヤレ、大石と云ふ人は危ない處から吊り込むも  
のだ」と思ひながら、心中の喜悦を押しかくし惣「何しろ其れは恐悦でござる  
然らば是れは着荒れて居る故、臺所へ駈け付けお看を改めて兄弟分の  
盃の取り遣りを遊ばしては……内「ウム宜い處へ氣が注いた、早速看を改  
ためて下さい」其内に酒肴を改めて其處へ持ち出して來た内「サア木田氏、  
イヤ蕉嘉先生、其れでは此處で兄弟分の盃、サアお受け下さい」右門は何か  
顔りに考へて居りましたが右「イヤ大石氏、お盃は暫らくお見合せ下さい、

お盃の前に一寸貴殿に承わつて置くことがござる、其れでは其許は愈々仇  
討ちの御本心はござらんのか、其の邊を一つ承知いたし度い内「是れは何うも  
妙な事を其許は聞かつしやるナ、其リア拙者の口からは何とも申しにくひが、  
拙者も實は立派に仇討ちを仕て見度いと云ふ望みはある、併し考へて見ればヨ  
シ上野介様を討ち取つて、其首を頂戴した處で五萬三千石の家が素の通りに  
立ち、拙者も千五百石城代家老と成れるのでもござらん、今に於いては拙者  
共、只吾が君の御短氣をお怨み申す斗りのこと、殊に仇討ちは天下の禁する處  
にして上野介様を討ち奉つれば、拙者共死罪は決して逃れぬ、モウ斯う世の  
中を悟つてしまへば、荒氣は出さぬ考へてござる右「ウム成る程、拙者も多分  
然うさは存したが、何がはぬ内は確かな處は相判りません、然らば拙者も實の  
處をお話し申すが、拙者久留米有馬の家來とば全くの偽りにして、實は吉良  
殿の祐筆役、本名猿橋右門と申する者でござるが、上杉家の老臣千坂兵部

に頼まれて、其許が仇討をするか或は成さらぬか、其御心を探りに這入つて居る實は間者だ」さ遂頭茲で白状して仕舞つた、人々は驚いた様な顔をいたしなから内、オヤ／＼怖い／＼、然らば拙者さ其許さは敵同志だが、其敵同志が今日改ためて義兄弟の契りを結ぶ、昨日の敵は今日の味方、輪會の絆一度切れれば一蓮托生、ア、人間の世界は面白いものだ」さ云ひながら、前なる盃を取り上げて、グイツさ一息に飲み干した、是れに依つて何うやら猿橋石門は大石が自分の方へ抱き込んで仕舞つたから、先づ此の者丈は大丈夫ださは思つたが、まだ／＼心を許すのは早い、殊に江戸表には千坂兵部さ云ふ恐ろしい敵が控へて居るから、却々急に事を擧げると云ふ譯には行かないさ、其後益々狂態を盡して居る、然るに此の間は少々暇があります故、忠臣義士四十七人の内、二三有名な面白き傳記を申し上げて、愈々大石江戸表乗出しの大快談に移りませう。

○間十次郎光興の逸傳

杉は直ぐ松は曲折りて面白し、人の心もきなり／＼にさか云つて、四十七義士の内、皆誠忠義心、何れ勝り劣りはありませんが、彼の先年大石内蔵之助長雄が、赤穂城での最後の評定、即ち愈々城と共に殉死を仕様と云ふ時に、親子三人で其席に運なつたのは、間喜兵衛光延、同じく忰十次郎光興、其弟新六郎光風でございます、然るに此十次郎光興は淺野家御盛人の時は妻子と共に江戸表に在つて、御作事を勤めて居たか、御出入りの職人共他の者から何か進物用の物を持つて参りますさ、十次郎は決して是れを受けない、十一然う云ふことは拙者、其だ迷惑、御上から御祿を頂戴して、お眼識に依つてお作事を勤める拙者、各々は御當家へ出入りをいたすをありがたく心得るならば仕事さへ親切にいたせば其れで宜敷いので、斯様な物を持参いたさされては大き

に迷惑をいたすから、止めて呉れる様」をキツパリ謝絶る、持つて来た者は其  
 潔白に驚ろいて、「〇へエ、左様なれば折角の思召し召してございますから、頂戴  
 いたして参ります、ありがたう存じます、十」ナニ御自分が持つて来たのだから  
 頂戴も何も無い、持ち歸つて呉れる様に」萬事が斯う云ふ俱合であるから、自  
 然重役の耳にも這入り、年は若い志しの正しい感心な男だ、賞め者に成つ  
 て居る、其れ故御主君内匠頭様の御意にも至極叶つて居て、何が出入りの町人  
 杯で不行届なことがあつても、此十次郎が執成しなしたせば其れで相済む様な  
 譯、處が此淺野一家へお出入りをして居る植木屋の頭領と云ふのが、小梅七軒  
 町に住つて名を六三郎と申し、却々大層なもので、御本家様から御分家様へ  
 皆一手で職人を入れ、大層御墨負を蒙つて居る、然るに植木屋に拘はらず職  
 人でも頭領株に成つて、多くの職人を使ふ様に成る、却々大きなもので、其當  
 時上野山内の御用を勤めて居りますのが根岸の徳右衛門と云ふ植木屋で、又芝

山内の御用を勤めたのが青山の源八と云ふ、年中何れも毎日職人の百四五  
 十人位ひは使つて居たと云ふ、其れは其苦でございませぬ、上野は三十六坊、芝  
 の方も山内一帯と云つては容易なものではございませぬ、お大名方でも淺野家  
 に藝州家杯は御有福ですから、御出入りの植木屋と來たら大した暮しをして居  
 る、處が其植木屋六三郎の甥に吉藏と云ふのがあつて是れが却々仕事の宜く出  
 来る所から、始終淺野家へ御出入りを仰せ付けられて居ります、スルと或日の  
 事丁度お庭の御手入れの時に、松の古葉をかり込んで居たが、實に是れは輕業  
 の様な仕事で、楷子を唐人と云ふ物に拵らへ、細引で松の幹へ結び付け其上に  
 上つて腰の調干で葉摘りをする、熟練とは云ひながら却々難ツかしいもので、  
 頻りに葉を摘つて居る、何う誤まつたか確かりと結んで置いた細引が次第に  
 解けたと見へて、楷子がズル／＼バタツと打つ倒れたから堪らない、其上で葉  
 摘りをして居た吉藏は、ハツと驚きながら其處は練れたもので、ヒヨイツと



身みをかげたには違ちがひないが、向むふに結むすばな松まつの盆ぼん裁ざいが置おいてあつた、思おもはず其その上うへへ飛とび降おりたから堪たまらない、ガラク／＼ガチャーンと南なん京きやう古こ渡わたりの植う木ま鉢ばちを毀こし、其その身みは石いしの角かどで頭あたまを打うち、顔かほをズル／＼ツと擦すり割わいた、併しし是これは大たいした怪け我がでは無ない、ソレ今いま植う木ま屋やが仕し事じ中ちゆうに松まつの枝えだから落おちた云いふので、御お庭にわは大おほ騒さわぎをして居ゐたが、然しかるに此この鉢ばち植うへの松まつ云いふのが豫かねて内たくみ匠の頭かぶ様さまの御お本ほん家けから頂てう戴たいをして居ゐたが、大たい層そうお愛あいしに成なつて居ゐる松まつで、成なるべく損そんじない様やうに云いふので始し終しゆう心こころを付つけ、朝あさ夕ゆふ御お手てづから御お指さし圖ずを遊あそばし、水みづ杯なぐさを怠おこらず遣やつて居ゐられる、其そのれを今いま毀こして仕し舞まつた譯わけですから、御ご家け來らいの人ひと々々は大おほいに驚おどろき皆みな「是これは植う木ま屋や飛とんだこをいたした、貴ま様さまの身み体たいは何なにうでも宜よろしいが、此この松まつは大たい切きである」と其そのんなこも云いはないが、何なんしろ殿どの様さまが御ご秘ひ藏ざうの松まつである、其その鉢ばちを損そんじたのでございますから、定さだめてお叱しかりがあらうと心しん配ぱいをして居ゐる、取とり分わけ吉きち藏ざうは眞ま蒼そうに成なつて吉きち「何なんうか御ご勘かん辨べんを願ねがひます」と平ひら蜘蛛くもの

様やうに大だい地ちへ手てを突ついて謝あやまつて居ゐる、足あし輕かる拵ぐさは其そのれへ出でて参まゐり、足あし「植う木ま屋や吉きちへエ、足あし「貴き様さま何なんうして落おちた足あしへエ何なんうして云いつて、故わざ意いと落おちた譯わけではございませんが、足あし「何なんしろ飛とんだ事ことをした、事ことに依よるこお手て討うちに成なるかも知しれないぞ、コレ見みる、此この通とほり松まつの枝えだも折をれ、鉢ばちも粉こな々に割われて仕し舞まつた吉きちへエ、何なんうも大たい變へんなこをいたしたと云いつてオド／＼慄おそへて居ゐる、其その間まに間ま十じゅう次じ郎らうは御ご前ぜんへ出でて参まゐり、モウ此この事ことはお側そばの人ひとから御ご主しゆ君くんへ申まし上あげてあるから十じゅう「ハッ今こん日にち私わたしし出い仕しの遅おそくなりました爲ために、斯こ様やうな疎そ勿ぶつをいたし何なんとも申まし譯わけがございません、是これは出で入いり町ちゆう人じんの不行ふ届とどきにあらずして取とりも直なさず私わたしの落お度どにございますれば、何なん卒そつ私わたしへ御ご叱しかりの程ほどを願ねがひまする」と身みに引ひ受うけて御ご詫わびをした、スルま其その時ときに内たくみ匠の頭かぶ様さまが殿だん「イヤ、生せいあるものは必かならず滅めつし、形かたちある物ものは必かならず碎くだくるの習なつひ、時とき來きたつて鉢ばちは割われ松まつの枝えだも損そんじたのである、決けつして心しん配ぱいをするには及およばぬ、併し其その職しやく人じんは怪け我が

をいたしはせぬか、能く手當てをいたして取らせる様、今日の事は忘れ遣はず  
 十「ハ、ハ、有難き仕合せにございまする、定めし植木屋吉藏へ此の事を申し  
 聞かせましたならば、上の思召しを有り難く心得るでございませう」と涙を  
 流して十次郎は此處を下り、吉藏の控へて居る處へ来て「コレ吉藏如何いた  
 した吉、へい是れば間様、何うも飛んだ事に成りました、私しは何う成りまし  
 ても決して介意ひませんが、伯父を始め一同の者が、萬一御當家様のお出入り  
 をお差止めになる様なことがあつては成らぬさ、其れ斗りを心配いたして居り  
 ます、何うぞ貴郎様より宜敷く御執成しを願ひ度う存じます 十「コレ、決し  
 て心配をするナ、只今お上へ御詔びを申し上げた處、是れは其方が悪いのでは  
 無い、此儀は忘れ遣はずに依つて、能く手當てをして取らせうと云ふ有難き仰  
 せであつた、安神いたす様に」と聞いて吉藏蘇生の思ひをいたし、内匠頭様  
 の御仁心を感じて居る、處へ植木屋六三郎此事を聞いて飛んで参り、お作事方

の間十次郎に就いて御詔びを申し上げて下さる様にと頼み込みまするさ 十「お  
 上は格別の思召しを以つて御許しに相成つたから、左のみ心配をするには及ば  
 ぬ、拙者が能く執成しなしたして置いた六「左様でございまするか、其れは何  
 うも有難きことで……」と六三郎の悦び一方ならず、厚く禮を述べて立ち歸  
 つたが、固より此間十次郎、何の禮を持つて行つても決して取る人では無い  
 植木屋六三郎も其後何か事があつたら此恩に酬ひ度いと思つて居る内に、時は  
 元祿の十四年三月十五日、殿中松の御廊下に於いて、御師匠番吉良上野介に  
 對して又傷に及び、内匠頭様は即日田村邸に於いて御切腹、江戸邸は是れ  
 が爲め三日の間に大公儀へ御召し上げと云ふ事に成る、サア斯く成るさ家申一  
 同は縁に離れ、チリ／＼バラ／＼離散をする様な事に成つて、皆此の後何うし  
 たら宜からうと、殆ど途方に暮れて居る内に、心ある武士は皆國許播州赤  
 穂へ出張をして、御城代の指圖に任せ様と云ふ、江戸國表の騒ぎは實に一通

りならん事ことで、其中そのうちに彼の間十次郎あそとじじ郎は、父喜兵衛ちんさへへ、弟新六郎せんとろが當時たうじく國表くにのへに居つたのを幸さいわいひ、吾わがれも一つ是れより國表くにのへへ參つて萬事相談ばんじそうだんをいたし、大石殿おほいしどのの指圖さしづを受け様ようと云ふ覺悟かくごをいたしたが、何なんしろ妻子さいしを連れて道中どうちゆうをしては手間てまが掛つて成ならない、何なんとしたり宜よからうかき、流石さすがの間十次郎あそとじじ郎も是れにはハタさ當惑あうわくをいたす。

○内儀おかみさんより餘程よつほど宜よい女をんなだ

處ところへ思おもひ掛かけなくも彼の植木屋うゑぎや六三郎むつざ郎が出て參りまして六は間ま様さま、承うけわりますれば何なんともはや申もうし上げ様ようも無い御當家ごとうけの大變たいへん、定めし何か御用ごようがあらうと存ぞんじ、先年せんねんの御恩返ごおんげんしもいたし度たいと思つて參りました、私わたくしのお役やくに立つことならば何なんなりと苦くるしうございませぬから、仰おほせ付けを願ねがひます」十次郎ちじう郎はア、宜よい處ところへ來きて呉くれれたと思おもひながら十そ左さ様さまか、其それは能よく深切しんせつに來きて呉くれ

た、然しからば六三郎むつざ郎、其方そのほうを見掛みかけて茲こゝに一つ頼たのみがあるが聞いて呉くれれるか何なんうぢや六む「エイ、身みに叶かなひまする事ことならば何なんなりとも仰おほせ下さいまし十じ「其それでは話はなすが、實じつは拙者せつしやこれより國表くにのへへ參り、御城代ごじやうだいの御意見ごいけんを伺うかまたち、又また父弟ちやうてい杯さかさも萬事ばんじの相談さうだんをいたし度たいと思ふが、其それに就ついて斯かゝる場合に、妻つまのてい又また悴せがれ十太郎じちう郎を引連ひきつれて參つては、却なか々く道中どうちゆうも手間取てまどり難義なんぎをいたす、何なんうか然そう長ながい事ことでは無いが、其方そのほうの宅たくへ暫しばらくの間妻子あひださいしの者を預あづかつては呉くれれまいか六む「エ、宜よしうございませぬ、確たしかかに私わたくしがお預あづかり申もうします故ゆゑ、決して御心配しんぱいはいりませぬ、只今ただいまにも職人しやくにん共どもを連れて荷物にもつや何かを密ひそかに、御家中方ごちゆうかたの目に付つかぬ様ように私わたくしが引取ひきとりに參ります、幸さいわいひ向島牛むかしまうしの御前ごぜんの片邊かたはたりに、一寸ちよつとした明あき家やがございませぬから、一時じせ其れへお移うつし申もうします、手前方てまへかたへ御案ごあん内申ないもうしても決して差支さしつかへはありませぬが、併し其れでは多く職人しやくにんが出入でいりをして居ゐります故ゆゑ、又また長ながい内に御無禮ごぶれいでもあつては相成あひなりませぬ、然そう云いふこと

にいたします十「ウム、イヤ何うか何分宜敷く頼む、ア、コリヤてい、其方は  
 俸十太郎を連れて、當分植六の厄介に成つて居て呉れる様、貞「ハイ畏、こまり  
 ました、其れでは妾しは六三郎方へ参りまして、俸と共にお國表のお音信をお  
 待ち受けいたしまする故、何事も御心配なく、お安く在つしやいまする様、  
 十「ウム、其れでは六三郎、何分頼む」此處で此植六が問十次郎の妻子の着  
 を引取り、米から味噌醬油、炭薪にいたるまで何不自由の無い様にして、小僧  
 の銀藏と云ふのをチョイ／＼使ひに通はして用を足して居るから、此十次郎が  
 江戸を出立をいたして後も、妻子は何の不自由なく日を送つて居る、スルと丁  
 度其年の夏でございます、植木屋六三郎が御本家の安藝様の、藝州、廣島御城  
 中に大仕事があつたので、多くの職人を連れて行かれは成らぬ事に相成つた、  
 處が今迄彼の間の御新造やお子様を、女房にも多くの職人にも話しをし  
 ないで置いた、と云ふのは女房は元勤め上りの者ではあり、又職人は口が

五月蠅い、敷ある御家中の間に、間様の御新造と坊さま丈けを世話をして居る  
 と云つては、他の聞へも宜く無いと思ふから、其れで何にも話しをせず、自  
 分が一人で取り切つて世話をして居た、處が今度自分が廣島へ行くのに、何う  
 しても女房に打ち明けられ成らない、六「ア、おさら、女、何だい頭領、六「マア  
 愈々俺リア今度廣島へ出掛けなければ成ら無エが、何うか留守は何分頼むぞ、  
 女「ア、宜いよ、留守の事は決して心配をおしてないよ、何しろお前さんは遠  
 い處へ行くのだから、身体を大事にしてお呉れよ、六「ウム、其れはモウ云ふ迄  
 もなく俺れも氣を付けて行くが、此方のお出入り先きを何うか失策ら無エ様に  
 お前が能く氣を注げて呉れなくちや不可ねエ、女「ア、宜いさも、頭領が留守な  
 ら妾しが能く職人にも氣を注げて、間違ひの無い様にするから安神をして行つ  
 てお呉んなさいよ、六「其れを聞いて俺れも留守を任して行ける、就いてはれエ  
 おさら、手前エに始めて話しをするが、ナゼ今迄で話しを仕無エと云はれるさ

俺れも少し極りが悪いけれど、實はアノ間の御新造と坊ちやんのお二人を、豫ての御恩があるから御屋敷の騒動の時に御引取り申して、牛の御前の横町へ家を借りて御世話をいたして居るのだ、是れが餘り世間へ知れると、同じ御家中の方に何だか面白く無エと思ふから、マア成る丈け人の耳に入れない様にして居たのだ女「オヤマア然うかい、其んなこさなら前もつて妾しに話して呉れ、ば、妾しだつて御機嫌何がひにも行つたものを六「イヤお前に話しななかつたのは、誠に俺れも今更に成つて面白無エ女「其んなら頭領、寧その事お前の留守中は、家の方へ引取らうぢや無いか六「其れも結構だが、職人も何しろ多く出入するから、口も五月蠅いし失禮でもあると不可無エ、マア當分那處へお置き申した方が宜からう、デアノ小僧の銀藏をチヨイ／＼使ひに遣つてあるから、那奴ツに案内をさせて、お前一寸顔を出して置いて呉んねエ、然うして留守中は何分お世話の處を頼むぞ女「ア、宜いさも、其んなこさ、知らないか

ら、近い處に居ながらお尋れもしないで、誠に申し譯けが無い、ア、銀藏や、お前、間の御新造様の在つしやる所を知つて居るかい銀「エ、知つて居ます、宜い御新造ですせ、お内儀さんより餘程宜い女だ女「何んだツて……六「コラ銀藏餘斗な事を云ふナ、下られエ事を云やアがつて、俺れが立つた跡でお内儀さんを案内をして行けよ銀「へエ畏こまりました」頭領の六三郎は後を頼んで多くの職人を引連れ、遂に此江戸表を出立をした、其頭領の立つた日から間一日置いて女「コレ銀藏や、間の御新造の處へ案内をしてお呉れ、サア是れを持つて行くのだ」とお内儀さんは小ザツパリした扮装をいたし、何か手土産を銀藏に持たせて、牛の御前の片邊り、間十次郎の妻子が住居へ歩つて來た女「ア、此處かい銀「へエ、此の格子を親方が買つて來たんで、古道具屋で一分二朱と二百……女「ナせ其んな餘斗な事を云ふのだ……エ、御免下さい」ガラガラツミ格子を開ける、中からは上り口の隙子を開けて、貞「入らつしやいまし、

……オヤ是れば銀藏さんでございませうか、銀「エ、御新造さん、家の親方のお内儀さんでございませう、真「オヤ然うでございませうか、サア何うぞ此方へお上り遊ばす様に、女「マア御免下さいませ、お初にお目に掛りますが、妾は植木屋六三郎の家内でございます、真「ハイ、是れば申し遅れました、妾は間十郎の妻、此の程は種々頭領の御世話に相成りまして、ありがたう存じます、女「イエ何ういたしましたして、誠に届かぬ勝ちでございます、是れまで妾は一向真人から話しがございませぬので、御機嫌伺がひにも出ませず、定めて御心の中で何ぞか思召したでせうが、何うぞお許し下さいませ、真「イエ何ういたしました、却々其れどころではございませぬ、挨拶が終つて茶を出し、真「サア十太郎や、お前も伯母さんに御挨拶をなさい」と云はれて、俸の十太郎も其處へ可愛らしき手を仕へ、十「伯母さん今日は、能く入らつしやいます、女「オ、坊ちやんでございませうか、オヤ、お行儀の宜いこと」と始めは至極宜かつたが、此

十次郎の妻おていの顔を見るさ、心の中に、女「ア、宜い縹緞だ、美くしいばかりで無く品の宜い結構な御新造さんだ」と思ひながら、ヒヨイツと俸十太郎の顔を見るさ、是れが妙なことに他人の空似で、良人六三郎に面影が能く似て居る、オヤ、と思つた此の女、素より教育のある者では無し、根が吉原で勤めをして、花魁なら宜い何うやら胸亂に近い方で、生れが生れたから極下等な奴ツ、常に職人杯を捉まへて怒鳴つて居る時には、チヨイとお内儀さんで役に立つが、何しろ思慮も分別も無い、腹の薄ツペらな女ですから、子供の顔が自分の良人に似て居るのさ、御新造が縹緞の宜い顔を見るさ、グワツと逆上上つて仕舞つたので、然う成ると一時が萬事、何も彼も訝しい事だらけさ成つて来た。

○ヤイ、泣き聲を出さない

心の中に植六の妻おさらは女ア、是れは良人の六三郎が、疾うから此の女を妾にして、斯んな子供まで出来て居る仲だ、今度お國表へ仕事に行くに付いて、何も彼も話して行かなければ都合が悪いので、間様だま云へば此方に恩のある御方だから、叮嚀に世話をするだらうと思つて妾に、間様の御新造坊ちやんだま云つて聞かしたに相違無い、ア、口惜しいと思ひ出すまアツとして前後も判らなくなつて仕舞つた良サア何うぞ粗茶ではございませうが召し上つて下さる様女、イエ決して介意つて下さるナ、妾はお茶を飲まないから、毒が這入つて居るか何だか判りアしない、十「伯母さん、お茶をお飲んなさい、女、餘斗なことをお言ひで無い此小兒は、お前なぞは妾しに物を云ふよりは、お父さんがお仕事から歸つて來たら、何でも宜い物を買つてお貰ひいよ、本當に馬鹿にして居るヤアがる、サア銀藏歸らう、斯んな處に永居をして居るご何んなごに成るかア知りアしない、貞「マア貴女、何んでございますか、今暫

らくお留まり下さる様」と驚きながら止めるのも聞き入れず、突然庭に飛び下りて下駄を突掛けるご、ガラ／＼／＼ピシリツ表へ飛び出して仕舞つた、ハツと思ふご間の御新造、何か何うした譯か判らない、此方も又幾何か世の中に、出て苦勞をして居る女ならば、ハア何か感違ひをしたナ位ひの事は察しが付くが、何しろ堅い屋敷内に育つて世の風に餘り當らない方だから、然う云ふごにはあまり氣が付きません、何うしたのかご只心配をして居る斗り、サア其れから後ま云ふものは嫉妬の念があるから植木屋六三郎の女房は、良人の頼んで行つたごを少しも行はないで、何一つ間母子の所へ送らない、其内坐して食へば山も空して、今は聊かの貯へも遣ひ果たし、手許にある物も大方は賣り拂ひ、元禄十五年の九月に相成つたが、良人は昨年から何の音信も無く、ハテ是れから何うしたら宜からうご、心配が積つて果ては病氣となり、十月の末からドツと枕に就いて仕舞つた、當年七歳に成る俸の十太郎が母の傍らにあつ

て、子供ながらも手を盡して介抱をなし、種々慰さめて居るから母のおていも貞モウ妾しも直きに快くなるから、お前は溫和しくしてお父様から音信のあるのを待つて居てお呉れ」と慰さめ返す、其内夜も碌々寝ないで十太郎が心配をして居る様子故、是れを見て母親は堪りません、貞「其んなにして呉れると却つて妾しが心苦しいから、落着いて寝てお呉れ」と云つても孝心深き十太郎、却々夜も油断をして眠入らない、母が「……ッ云へば直ぐ飛び起きて背中を撫でる様にするから、貞「ア、可愛そうに、まだ年端も行かぬ十太郎が、妾しの爲めに斯うも心を碎いて呉れるか」と思ふと最ま不慰がいやまし、心の切なさは又一層てございます、其内モハヤ賣り拂ふ物も無い様な始末、十月の末に成つて薄い袴のボロ／＼して居るのを一枚着て、孝子十太郎は何思つたか日暮れ方にアラリと表へ立ち出で、隅田川の堤まで参つて河向ひの樹木の間に、雲衝く斗りに登へて居る淺草寺觀世音の五重の塔の方に向つて手を合せ

寒風の中に佇むで、十「南無觀世音様、お慈悲を以つて母様の病氣の一日も早く治りまする様、又お父様から御音信のあります様、御利益を下さいますし」と、一心込めて禮拜して居りましたが、只杖柱ごも思ふ母が那の病氣、お國表へ行つた父の許よりは何の音信も無し、何うしたら宜からうと小さい胸を苦しめて居ると、何時しか悲しさをやるせなくホロ／＼涙を流して泣いて居る、處へ向ふの方より大紋付の絆纏に川波の股引、白足袋に麻裏の突掛けと云ふ職人風の男二人、高聲に嘶しながら此方へ向つて足早やに歩つて来る、甲「オイ何うしたい、早く來れエか、竹屋を向ふへ越して廊へ繰り込んで、何うか能い女に出會ひ度エものだ、乙「其リア當然エだ、ア、宜い心持ちに成つた、那處の家は可なり宜い物を食べせるナ、是れから廊へ繰り込んで遊ぶにア丁度宜い時刻だ、甲「然うよ、渡船の無くなられエ内に行かうぢや無エか」スタ／＼歩つて來たが、ヒョイツと十太郎の姿を見るより、甲「何だ／＼其處に立つて居るのは……



何か悪い了簡を出して河へ飛び込んぢやア無エか、オイ熊ア、櫻の木の方  
 年の行か無エ子供がクシ／＼泣いて居るせ、オウ何うしたんだ、何うやら乞食  
 でも無エ様だ、品の良い子ぢや無エか、オイ坊や、何を泣いて居るんだ、エ、  
 父に叱言を云はれたのが阿母に叱られたのか、泣いぢや不可れエ、エ、男の  
 子と云ふものは泣くものぢや無エ、なア泣くなら鱈丸ア切つちまへ、サア坊や  
 伯父さんがお錢を遣るから何か宜い物を買つて食ひれエ、ヨウ泣くなてこそよ  
 江戸ッ兒は五月の鯉の吹き流し、口さきばかり腸はなしで、口には恐ろしくホ  
 ン／＼云ふ様だけれども、腸の中は又情にもろいもので、腹掛けの井りへ手を  
 差し入れて幾何かの錢を掴み出し、甲「サア手を出しれエ、遠慮をしちや不可れ  
 エ、伯父さんがお錢を遣るんだ」世に在る時は淺野内匠頭様の御作事を勤  
 めた、間十次郎光興の、伴十太郎、他人から金を貰ふさ云ふ様なことは曾て無  
 い事であるから、耻かしそうに手を出し兼ねたが又思ひ直し、今観音様に

願つて居る時に此の御方が来てお金を下さるのは、定めて観音様の御利益で  
 あらう、此鳥目で薬を買つて阿母様へ上げ様と思つたから「十」ハイ、有難う  
 存じます、甲「サア／＼遠慮をするにア及ば無エ、オイ熊、手前エも幾何が遣れ  
 熊「ウム、俺リア相憎く細けエのが無エ、二朱金ばかりだ、甲「大きな事を云や  
 アがるナ、二朱金だつて宜いや、遣つちまへ、此の野郎相變らず吝なこそばか  
 リ云やアかる、熊「吝さ云ふ譯ぢや無エけれども、是れを遣るさ……、ア、痛エ  
 打た無エたつて宜いぢや無エか、遣るから宜いよ、サア坊や、此の野郎がお前  
 に遣らなければ殴るさ云ふから、是ッ切りしきや無エんだけれども遣るよ、甲「  
 ヤイ／＼泣き聲を出さない、意氣地の無エ、サア行かう／＼、熊「兄弟エ、此の  
 先きにモウ泣いてる子ばありア仕めエナ、又手前エにこづかれるさ不可れエ、  
 甲「此野郎、吝な事を云ふない、其んなに幾人もあるものか、併し今のは品の  
 良子だつたナ、大方、浪人者が何かの子供だらう」と職人二人は話しながら

向ふへ行つて仕舞ふ。此方十太郎は喜んで、途中で薬を買ひ求め、家へ駆け戻つて来た十母様。只今、貞、オ、十太郎、お前今頃まで何處へ行つて居た十「ハイお薬を買つて参りました。貞、オヤお薬を買なうと云つて、お金がありませんか。十「イエお錢は私しが持つて居ました。貞「ナニお錢を持つて居た……コレ十太郎や、お前は母が病氣で何も彼も不自由であると思ひ、さもない心を出して人様の物に手でも掛け、阿父様のお名前のお出でが、サア其お金不孝なり又殿様へは大の不忠、ヨモヤ然う云ふことはあるまいが、サア其お金と云ふのは何うしたのだ。十「母様、私しが只今堤へ出て、淺草の觀音様を拜んで居ましたら、お職人衆の様な人が来て、私しにお錢を呉れて行きましたので、貞、エツ、其れでは見ず知らずのお方がお金をお前に下された。十「ハイ聞いておいては十太郎を膝に抱き上げ、確固と抱へて吾が子の顔に自分の頬をヒタリと押し宛てが、貞「ア、世に在る時は小身ながら立派な武士、間十次郎

光興の悴、十太郎、お家の不祥が身の不祥と成り、年端も行かぬ身を以つて、袖乞ひしても此母を養ひ呉れると云ふは、何たるいぢらしい事であらう」とワアツ、とさばかりに泣き沈み、少時は言葉もございません。

○親子の奇遇、雪中の悲劇

サア是れに味を覺へた悴十太郎は、御鳥目さへあれば母様のお世話が出来ると一圖に思ひ込み、其れから毎日隅田の堤へ出ては袖乞ひをする様に成つたが、寒い日杯はモウ夕暮れ方は人通りも途絶へたので、遠く吾妻橋の方まで出て参り、僅かの錢を買つて其れで辛くも其日を凌いで居る、母のおても其れが爲めに、何うやら斯うやら其日を暮して居るものゝ、實に身を切られるより辛いおもひでございませぬ。其内に早や十二月と成つて、寒さの爲めか母の病ひは一層重く成つたけれども、何を云ふにも僅かの袖乞ひをして貰ふ錢では、生計を

した上で母に薬を與へるご云ふ事は充分にも出來ないが、日増しに寒氣は募り着て寝るものさではなく、此上は母子共餓死するより外はございませぬ、スルさ十二月十三日の美から十四日は大雪に成り、堤は一面の銀世界、人通りも途絶へたが、其れかご云つて一日でも袖乞ひを怠れば、母に與へる糊口の代も無い始末、切て橋向ふへ出て何程でも頂戴をして來様さ、孝子十太郎は寒さも厭はず藁草履を穿いて、雪の中をトボトボと出て來たのは丁度夕暮れの事、スルさ向ふの方より堤傳ひに身には兩合羽を纏ひ蛇の目の傘を肩にして、雪をザクザク踏みながら出て來た二人の武士、何やら頻りに話をいたして居る、是れを眺めて十太郎、バラバラとツツと其側に駆け寄り「ハイ、何うぞお手の内を願ひます、甲「ア、是れはく不慮の小供、待てく……ア、相憎く小錢が無いが、尊公小錢のお持ち合せはござるまいか、乙「左様……、拙者も折り悪しく其通り持ち合して居ない、甲「ア、可愛そうな、コレく小供、折角ではあるが

今遣はすべき小錢が無いから、跡より又一人參る武士がある、其の人は吾々の朋友だから其れに願つて申し受けたら宜いぞ「ハイ、何うぞお手の内を……、甲「イヤ遣り度いさ心得るが、遣はすべき小錢が無い、今後から一人參るから其人に貰へさ申すのだ、ア、氣の毒だナ」さ不慮に思つたが二人の武士、見返り勝ちに向ふへ行つて仕舞ふ、十太郎は又後より來るご云はれたので、其れを樂しみに相待つて居る處へ、程無く又一人同じ姿の武士、蛇の目の傘を差して雪を踏み分けて出て參つた、是れだナと思つたから十太郎はバラバラとツツと側へ駆け寄つて「ハイ恐れ入りますがお手の内を頂かして下さいまし、武「ヤレく、年端も行かぬ小兒、此の大雪の中に袖乞ひをいたして居るご云ふは氣の毒千萬、サアく遣すぞよ」ご云ひながら、幸ひ雪も小風みになつたから、傘を片側の櫻の木に立て掛け、懐中より紙入れを出して小錢小粒を取り交ぜ一掴み、武「サア是れを遣はすから早く歸れよ、十「ハイありがたう存じます」ご手を

出しながら十太郎、思はずヒヨイツと其武士の顔を見上げる、途端に見下す彼の武士武「ヤツ、其方は十太郎では無いが十「アレお父様ツ 武」オツ、其方は何うした十「お父様……」と只一言、跡は何にも云はずヒツタリかじり付いて仕舞つた、是れぞ十太郎の父間、十次郎光興でございます、十次「オ、嘘かし寒いであらう、コレ其方は何うして斯様な姿に成つて居る、何れ仔細もあるであらう、併し只今是れを通り合はした二人の武士があつたであらう十「ハイ、お通行に成りましたでございます十「然うか、其れは拙者の友であるから、一寸お跡を追つ駆けて先きへ行つて貰ふ様に申した上、又引返して来るから何處へも行かず、其方は此處に居て待つて居れ、倅「ハイ、畏こまりました」と其れから十次郎光興は、枕橋の方を指して急いで参り、十「オ、武林、矢田、一寸ご待つて呉れ、武「ア、間、何うして大層遅いぢや無いか十「ウム、拙者一寸ご失念物をいたして参つたから、今から引返して取つて参る、何うか一足お先きへ

行つて貰ひ度い、武「然うか、其れでは吾々お先きへ御免蒙むるが、豫ての場所へ時刻を違へずお出である様十「ウム、委細心得た」と其處で二人に別れて十次郎は、下駄を脱ぐと雪を蹴立て、元の處へ取つて返し、着て居りました合羽を脱いで倅十太郎に是れを着せ十「サア十太郎、其方の家へ案内をいたせ倅「ハイ」と十太郎は寒さも忘れてイソ／＼と吾家を差して父十次郎を連れて戻つた、倅「母様、只今立歸りましてございます、真「オ、十太郎戻つたか、寒かつたであらう、サア／＼早く此方へ上つて下さい、倅「ハイ阿母様、お客様をお連れ申しました、真「ナニお客様……十「ウム拙者だ、許せよ」と云ふ良人の聲が耳に入つたから、思はずおていは其れへ起き上る、破れ障子を開いて十次郎中へ這入つて見るさ、疊の表はスツカリ切れ、破れ蒲團にくるまつた妻のあり様、頬骨は高く両眼くぼんで色蒼ざめ、此の世の人さと思はれぬやつれ果てし姿に、ヒツタリ驚ろいた十次郎光興十「コレてい、如何いたした真「ハイ、

是れは旦那様でございますか、御機嫌宜敷く「ウム、是れは全体何ういたした、其方等母子は植木屋六郎に依頼いたし置いた故、安全に月日を送つて居るござ、今日が日まで思つて居た、然るに只今此堤を通行いたせし所雪中にて袖乞ひの小兒に出遇ひ、不愆と思ひ手の内を遣はさんさいたしたる處何ぞ斗らん其袖乞ひが倅十太郎、是れには何か深き仔細のあること、思ひながら参つたが、如何いたして斯様な境界に陥つたか、貞「ハイ旦那様、御無事のお顔を拜しまして、誠に嬉しうは存じまするが、此の姿にてお目通りをいたすのはお耻かしう存じます、十「イヤ、耻かしい事のあるべき道理は無いが、何ういたして斯様な事に相成つたか、其仔細を語つて聞かせ、貞「ハイ、エ、何でございまする、植木屋六郎が藝州廣島へ参りまして一兩日経ちまする、六三郎の家内さ云ふのが此處へ参り、初めの間は一通りの挨拶をいたして居りましたが、何うした事か中途からガラリ様子が變り、何やら悪口雑言を吐き、其

儘立ち歸つて翌日から、全然何一品送つても呉れませす、其れが爲めに妾は手許の物を賣り拂ひ、漸々其日くを凌いで居りましたが、折り悪しく妾が病氣に罹り起居も自由ならず、年端も行かぬ十太郎が介抱をいたし呉れながら、毎日の如く戸外へ立ち出で、袖乞ひをして妾を今日迄養つて呉れました旦那様、妾は斯様な羞かしい思ひをいたすより、寧ろ死なうと思つたことも幾度かございましたが、兎も角も一変貴郎にお目通りをいたすまで、氣を取り直して今日まで漸々浚いで居りました、處へ圖らず今日斯くお目通りをいたし、御無事の体を拜して誠に嬉しう存じます、何うぞ倅十太郎をお賞め遊ばして下さいますし「ウム、其れは合点の行かぬ事である、六三郎はまだ廣島から立歸つて参らぬのか、貞「何ういたしましたやら、其れツ切り何の音沙汰もございませす……、十「ウム、其れは誠に不都合千萬の事、併し十太郎、能く其方は母へ對し孝の道を盡して呉れた、左様に難義をいたして居るさば知らず、何

の便りもいたさず捨て置いたは拙者の誤まり、併し楠木屋六三郎が居らば然う云ふ不都合なこともあるまいが、また立歸らるのであらう、豫て承われば六三郎の妻と云ふは、何か賤しき勤めをせしものさ云へば、大方何ぞ感違ひでして、左様な扱がいたした事と相見へる、併して喜んで呉れ、此方も漸やくの事と佐賀鍋島家へ二百石でお抱へに成る約束が整なつたから、明春に到れば其方等親子を引取り、元に優つた安樂をさせるであらう、先づ其れまでは此處へ金子を置いて参るから醫者にも掛り、温かな物でも着て身体を治し、迎への参る時を待つて居て呉れ、鍋島家と云へば御大家、奉公振りに依つては又随分出世も出来様と思ふ貞「ハイ……、其れでは旦那様は肥前佐賀鍋島家へ御奉公を遊ばすことに成りましたか」十「サム然うだ貞「エーお情けないことでございませう」とヨ、と斗りに泣き伏した。

○貞婦と孝子、悲惨の最期

十「コリヤてい、何が其方情けない、貞其れでは貴郎様はお主の仇討を遊ばすのではございませんか、十「イヤ仇討と云ふことは……實は思ひ留まつたのぢや其れよりは存命して永く冷光院様へ香華を手向け、御菩提を吊らふ方が増しと云ふことに一同決心をいたした、何にいたせ對手は上杉と云ふ後楯もあり却々以つて小人数の浪人が手の附け様も無い、慰いな事を仕出して萬一仕損じては却つて亡君の御耻辱、其れよりは長く主取り仕官をいたし、淺野家の浪人が零落をした杯と、悪い噂を残さぬ方が却つてお主の爲めと思ひ、其れ／＼諸方の大名へ奉公をいたすことに相成つたのぢや貞其れは／＼思ひの外のことと承わります、何故貴郎は仇討を遊ばしては下さいません、嘸マア冥途に在つしやるお主様がお恨みでございませう、貴郎が然う云ふお心で在つしやる

ならば、此の悴の十太郎にも斯様な辛い思ひもさせず、妾しは疾くに自害をして此の世を去つたのでございます。斯様に淺蕨しき生計をいたし、近處の者にも蔑まれ、残念ながらも心の中には今に見よ、良人がお主の仇討ちをなされた其の時今の耻を雪いで呉れるぞと思つて、今日まで其れを只一つの樂しみとしてお待申して居りました甲斐も無く、それに何んぞや、忠臣は二君に仕へず云ふ武士の道に背き、鍋島家へ御奉公を成さることは、何んたるお情けないお心にお成り遊ばした、サア旦那様、何うぞ主取り仕官の義を思ひ止まつて、外に志しある者がなければ、貴郎お一人で仇討ちを遊ばして下さいませる様、假令本懐をお逃げ遊ばさずとも、淺野内匠頭の家來間十次郎が吉良家へ斬り込んだと云へば、貴郎様の忠義の名前は末世に残ります、何うぞお心を取り直し、主取りの義は思ひ止まり下さる様、今まで艱難辛苦をしてお待ち受けいたした母子の者を、不慮と思し召したならば、何卒妾しの願ひを叶へて下さいませ

し十、コレ〜てい、其方が如何様に申しても、最早や約束の届いた上は仕方が無い、何事も良人の心に従ひ、お前は早く醫者に掛り身体を丈夫にいたして呉れれば相成らぬ、お主の仇を討つても討たぬも、御城代始め御一同相談の上のこそ、決して名前に瑕瑾の付く様なことはせぬ故に安心をいたせ……ア、コリヤ十太郎、是れへお金を置いて参るから、母様を良き醫者に掛け、温かい物を着せ身体を早く治す様にいたして呉れ、真、イヤ十太郎や、然う云ふお父様の思し召しなれば、お金杯を決して頂いては成らない、是れまで斯く辛い思ひをいたして居つたも、皆お主の仇討ちをおさせ申さんと思へばこそ、情けないことでございます「さ母の健氣な此言葉に、十太郎も共に父の心を恨み、ワツさ斗りに右さ左りから十次郎の膝に取り付き泣き出された時には、流石忠義に擬つたる間十次郎も、五臟六腑を絞らるゝ思ひ、是れ程に心の固き母子なれば、間十次郎も心中には十、ア、今宵討ち入ることを申し聞かせた處が大丈夫で

あらう、心配いたすな實は是れくく」云はんこしたか十「イヤくく然うでない、骨肉同胞たりと雖も、一切他言すまじき事と、誓紙誓文に血判なしたる上は、大事の前の小事、妻子の情に迷つて今宵の討ち入りを物語り、萬一手違ひに成つた時には一大事、ア可愛そうだが是れは云ふまい」胸に問ひ腹に答へた十次郎「コレでい、其恨みは決して無理ならん事ではあるが、死も角と再び出直して参り、疾と相談もいたそう、今宵は鍋島家御家老の處へ参る約束がいたしてある、其時刻が移つては相成らぬから是れにて今日は暇を告げる故、能くく療養を加へ、身体を治して呉れんでは困る、ア十太郎、此上にも能くく孝行をいたす様に」光興は涙を呑んで妻子に別れを告げ、向島の茅屋を立ち出する、今は是非に及ばず妻のおていは、出て行く良人十次郎の後姿を見送りながら、ハラ／＼ツと熱き涙を流して 貞御機嫌宜敷う…… 陸「お父様、御機嫌宜敷う……」と暫し母子は伸び上つて見て居たが、屹

度覺悟を定めたる妻のおてい、破れ障子をヒツタリ、静かに其れへ坐を占めて貞、コレ十太郎、今お前も聞く通り、阿父様は御殿様の仇討ちを遊ばす心も無く、二度の主取りをいたすと云ふ御決心、今は何と申し上げても御聞き入れも無い御様子、此上は誠にお前は不惑であるが、何うぞ此の母に命を呉れまする様、忤「阿母様、私しが命を差し上げたら何う成ります 貞母が今是れへ書置きをいたして、お前と共に自害をする、其書置きが阿父様の手に這入つたら是れほどの思ひをして母子の者が諫めるか、心を取り直して鍋島様へ御奉公の儀を思ひ止まり、吉夏様の御屋敷へ討ち入つて、お殿様の仇討ちをして下さるであらう、然うするとお前も妾しが死んだ爲めに、阿父様の忠義の道が立ちます、何うぞ後生だからお前の命を妾しに下さい 忤「其れでは阿母様、私しが死ねば阿父様が忠義の道を立てる事が出来ずなら、何うぞ母様殺して下さいまし 貞「し、其んなら母に命を呉れますか 忤「ハイ何うぞ阿父様が忠義を遊ば



す様にして下さいまし真「オ、能く云つて呉れました、其れでこそお前は武士の伴である」其れより硯取り出し細々と一通の書状を書き残し、良人十次郎光興の名宛てにいたして「サア十太郎や、覺悟は宜いか 十母様、お日様は此方からお出遊ばしますから、此方の方へ向いて死ねば宜うございますね 真「オ、何でお前は然う云ふ事を云ひなさるか 伴「ハイ、人間は死にます時には、西に向つて手を合すさか申しますから」云はれておいては堪り兼ね 真「オ、三ッ」愛らしき手を合せて西の方に向ひたる孝千太郎の頭に手を掛け、顔を見詰めて胸は張りさくばかり、けれども良人に忠義を立てさせ度い一心に、まだ七才の實子を手に掛け、己れも俱に自害をなさんと云ふ貞女の鑑、心を鬼にして懐劍の鞘を拂ひ、十太郎の胸板を押へて既に突かんと成したる時に、怯れもせず手を合せ、笑を含んだ吾が子の顔を見て、ア、是れ程孝行を盡す伴を自から手に掛け殺すかと思へば情けないさ、手先さも鈍つて突兼ねるな

伴「母様、早く殺して下さらねば、阿父様の忠義の道を立てるここが出来ません 真「エイ、宜う云つてお呉れだ」心と共に取り直したる懐劍を、伴十太郎の胸板に押し當て、眼を閉じてガザリと斗りに突込めば伴「ウムツ」と一撃十太郎は、二ツ三ツ聞いた其儘、ガツクリ息は絶へ果てた、遅ればせじと母親おいて 真「南無阿彌陀佛、彌陀佛ッ」と稱名を唱へつゝ、闇にきらめく白刃の電光、ウムツ……ツと斗りに咽喉に迸ばしつたる鮮血、此時 淺草金龍山淺草寺より撞き出したる夕暮の鐘の音、隅田の川面に響いて憐れにも聞へ渡つた

○武林唯七隆重の逸傳

此此時 枕橋の邊りまで引返したる間十次郎光興は、虫が知らずか何となく胸騒ぎがいたして参つたから 光「ハテナ、是れば何うしたのであらう、萬一や女房子供が吾が心を知らず……一思ひ出しては一刻も猶豫することが出来

無い、雪を踏立て、駈け戻つたる妻子の住居十「コレでい、十太郎、てい……コレ燈火も点けずに如何いたした」心も心ならず手に當つたる行燈に火を点じ、見れば道は抑も如何に四邊は一面の唐紅ひ、母子二人は折り重なつて死んで居る、アツと驚く十次郎十「ヤ、てい、是れは大變なことをいたした、最早や締は切れて居るが、斯様立派な覺悟があつたなれば、今宵の討入りの事を一言申し聞かせるのであつたに、ア、不愍なことをいたした」云ひながらヒヨイツと見ると行燈の下に書置きが敷いてあつたので、其れを開いて讀んで見れば、何うか鍋島家へ主取りをするこは思ひ止まり、亡君の仇討ちを遂げ忠義の道をお立て下さる様に云ふことが、細々と認めてある、涙を拂つた十次郎、死骸に向つて十「コレでい、死して良人に忠義を立てさせんぞ云ふ其志し、誠に感服いたした、死さも汝等の魂此世にあらば、此宵此十次郎光興が吉良家へ乗込む働らきを見物いたして喜び呉れ、其方共母子は決して犬

死はいたさせぬぞ、十太郎、宜く其方も死んで呉れた、ア、天晴れな志し、者をムザ／＼殺したるは不愍のいたり」流石の十次郎暫し涙に暮れて居たが扱て何うかして此の死骸を取り納め度くは思つたが、早や時刻も追々差し追つて来る、此儘置けば狐狸の類の餌食ならんも圖られず、如何はせんぞ圖つおいつ、思案に暮れて居る内に、淺草寺で撞き出す鐘は耳元近くゴーン……十「ヤツ今聞ゆるは淺草寺の子刻の鐘、今宵の討入りは九ツを合圖、遅刻いたしては一大事、側へ金子を置いたらば、誰れにも取り片付けをいたして呉れ様」心許なくは思へども十次郎光興、懐中の金を死骸の側に置いた儘、大小刀取つて掴み差し、雪を蹴立て、又もやバラ／＼と松坂町を差して一目散、最早や勢揃への場所へ参るも時遅れたりと思つたから、其儘直ぐに吉良家の裏門の方へ駈け付けた送端、「待て／＼ツ、アイヤ此の處を通行いたすは何者であるか、只今赤穂の浪士吉良左兵衛佐殿屋敷へ討ち入り、隠居上野介を

討ち取らんが爲め、既に同勢は乗り込んだり、事相濟むまでは此處を一人たり  
 ことも通すことは相成らん十ハツ、誰方かは存ぜぬが、吾等は義黨の一人間十  
 次郎光興でござる。〇オ、間氏が、山……十川〇ウ△仔細はござらぬ、  
 速かに通らつしやい十ハツ御免ツ」之間十次郎、雪を蹴立て、裏門近く乗  
 り込み來り、グル／＼ツと帯を解き、着物をバツと脱ぎ捨てるさ、下には火事  
 装束に鞆を掛け、後鉢巻手早くいたし、今しも裏門の處へ來るさ、彼の潮  
 田又之丞が塀を乗り越へて飛び込まんさする處十ア、潮田氏、吾等は妻子の  
 自害に遅刻をいたした、後れ走せに只今是れへ參つたが、此の塀越しの一番槍  
 何卒拙者にお譲り下さい。又オ、其れは／＼氣の毒千萬、然らば御身に一番  
 乗りはお譲り申そう十千萬忝けなふござる、此の御恩は忘れは仕つらん」  
 と云ひながら、ヒラリ塀越しの一番乗りをいたし、愈々裏門に打ち込んだる  
 時に、彼の上杉家よりの附人、劍客鳥居利右衛門に出會ひ、股の邊りへブツ

り槍を突込まれ、既に危ふく見へたる時に、跡より續いて乗り込んだる同志の  
 者の救けを蒙むり、傷所は假りの手當てをいたし、其れより烈しき働らきを成  
 し、遂には吉良上野介の所在を見出し、第一番の槍を付けたと云ふお話し、  
 是れば四十七士討入りの時に委しく申し述べますから、此處では大略いたし  
 て置きます、是れは誠に勇ましき内に憐れなお話してございます故、此間十  
 次郎の傳記中に出ましたる、武林唯七が滑稽談、及び矢田五郎左衛門が橋上  
 の野猿切りと云ふ逸話を申し述べます、先づ此武林唯七は如何なる人かご  
 云ふさ、此のお方は故淺野内匠頭様とは所謂乳兄弟の間柄で、即ち唯七  
 の阿母様が、内匠頭様御幼少の頃乳を差上げて居たのでございます、其れ  
 が爲めに此唯七は他の御家臣から見れば、一層内匠頭様が御最負に遊ばした  
 處が性來て此人は大變粗忽の質で、折節飛んだ失敗をいたします、けれど  
 り大抵のこまは内匠頭様も根が御仁心の御方故御叱りが無い、處り或日此唯

七が内匠頭様の御髪上げをいたして居りました時に、御月代を剃りました、  
 所が吾々の使ふ剃刀とは違ひ、貴さき人の御使ひ成さる剃刀には柄が付いて  
 居ります、其れを唯七が遺つて居る内に、何うしたか其内自然と柄が抜け  
 て来た、スルと性來粗忽の唯七であるから、思はず内匠頭様のお頭へコツリ  
 と一つ當て、創刀の柄を着げ込んだ、驚いたのは内匠頭様内「コレ唯七、  
 何をいたす」失策つたと思つたがモウ取り返しが付かない唯「ハ、ツ内「ハア  
 では無いぞ、予の頭に何を打つ付ける唯「へエ、誠に申譯けがございません、  
 エ、只今お創刀の柄が抜けそうに成りましたから、萬一お頭にお怪我がござい  
 ましては申し譯けが無いぞ存じ、柄を着げ様さいたし、ツイお頭を臺と間違つ  
 て……内「無禮な事をいたすナ、其方は何たる粗忽者だ、以來氣を注ける」と  
 被仰つたが、萬一他の者に斯様な粗忽があつたならば、嚴しきお咎めもありま  
 せうが、内匠頭様の御仁心さ、唯七の粗忽者と云ふ事は、能く御存じの上、

殊に御愛臣の事故さしたるお咎めも無かつたさ云ふ、先づ全体が斯様な人であ  
 つたらしい、其内或日の事唯七が御前へ伺候いたそうと思つて、御殿の御廊下  
 へ今しも歩つて来るさ○「オイ武林、早いナ」と聲を掛ける者があるから唯  
 七は、ヒヨイツと後邊を振り返つて見ると、同僚の堀部彌兵衛の養子前名中  
 山安兵衛、當時堀部の姓を名乗つた堀部安兵衛武庸ですから唯「オ、誰れかさ  
 心得たら堀部か、何だ安「イヤ唯七、好い處で貴公に出會をいたした、先達  
 て貴公と一本立會ひをいたしたが、アレが未だ勝負が付いて居ないぞ、だから  
 此處で會つたのを幸ひアノ勝負の形を付け度いと思ふが、貴公差し當つて用事  
 があるか唯「ウム然う、拙者もスツカリ失念をいたして居つた、幸ひ差し  
 當つて別に御用も無い、然らば早速形を付け様安「ウム其れでは宜いか唯「好  
 いどころでは無い、サア来い」直ぐに袋竹刀を借り受け、御殿のお庭へ出て身  
 仕度をいたしたが、此武林と云ふ人は粗忽者ではありませんけれども、劍道は

却々能く出来ませす、尤も此五萬三千石の御小身ながら、淺野家は名代の武藝家揃ひ、御家來の内にも此劍術槍術に限らず、總べての武術に長じて居る人が澤山にある、堀部安兵衛と云へば彼の高田の馬場に於いて十八人の武藝者を斬つて捨て、伯父菅野六郎左衛門の仇討ちをしたる位ひ、是れは眞庭念流の達人でございませす、互に竹刀を取つて相青眼に位取りをした、併し此武林と堀部は腕前が殆ど互角で、一步油斷をした方が敗れると云ふので、双方少しも油斷なく、其れが爲めに何時も勝負が付きませせん、今日も相變らず互ひに位取りをして、暫らく睨み合つて居たが、如何なる隙があつたか唯「エイッ」此一聲唯七から打ち込んで参つたのを、バチーッ引ッ拂つたかと思ふと、バツと手許へ飛び込んで安兵衛武庸「安」お小手ッ」此一打ちを入れた。

〇一飯のお振舞を頂戴したい

唯「ウム参つたッ安」何うだ唯七、恐れ入つたらう、平生から貴公は廣言を吐くが、イザと云ふ時に成るさ此の通りだ、以後武術に就いて拙者の前で大言を吐くな唯「待てッ、待て安兵衛」安「何だ唯」今一本勝負をいたそう、イヤ何うでも今一本立會ひをしる安「何だ又か唯」又では無い、今のは一寸呼吸の悪い處があつたから、残念ながら遅れを取つた、今一本……安「ウム、強情に負け腹を立て、も不可んぞ、假令へ何んな事があるとも勝ちは譲らぬ、何度勝負をしても同じ事だ、サア参れ」又候竹刀を取つて双方立ち上つた、處が此の度びは初めに負けを取つて居るから武林は、是非とも勝たれば成らぬと云ふので充分に氣を注げて居たから、大分武林の方が俱合が好い、今一足踏み込もうと云ふ途端に〇「アノ武林」氏、唯七殿はお出でに成らんか、武林「唯七殿……」と高聲に呼はる聲唯「オー只今……」〇「上の御召しでござる、武林氏、上の御召し唯、ハア只今……ウーム残念だナ、今一打ちと云ふ處で、堀部



すれば、彼れ必らず参つた……」此の参つた云ふ聲を唯七が馬上で發したのが、丁度安藝様のお向い屋敷、黒田様の表御門の處、馬丁は是れを聞いて、馬「ハ、ア今日は御本家様へのお使者だと思つたら違つて居るぞ、是れは黒田様へ御使者であつたか」さ早合点をいたしたのが間違ひの始まり、馬丁はバラバラと黒田様の御門内へ駆け込んで、馬「築地鐵砲洲淺野内匠頭使者」さ大聲に觸れ込んだ、イヤ黒田家では驚いた、鐵砲洲の淺野内匠頭から使者杯の参る筈は無いと思つたけれども、兎に角使者觸れがあつたのだから、早速玄關役人より重役へ此の事を申し入れた、其處で黒田家の御重役兩三人お玄關まで出迎かひをするさ、まだ氣が注かない唯七は馬より下り、會釋をして玄關式臺へ上つても平氣な顔をして居る。〇「ハ、ッお使者には御苦勞千萬に存じます、先づ御案内を仕つる」さ云ふ挨拶に、初めて心注いた武林唯七、ヒヨイツと正面の襖を見て驚いた唯「アッ失策つたぞ、是れは御本家さば

かり思つて居たら黒田家だわい」然リア然うでございませう、幾何細忽の武林でも、御紋所を見たら判るに定つて居る、御本家松平安藝守様の御紋は違ひ鷹の羽、黒田家の御定紋は藤巴でございます、是れを見たので流石の武林唯七も、始めて屋敷が違つたさ心注いたが、併し今更ら仕方が無い、眞逆か玄關先きで是れは飛んだことを仕つた、お屋敷違ひでございませうと云つて引返す譯にも行かないから唯「エ、何う成るものか、何は兎もあれ一つ使者の間へ通つた上の事に仕様」さ心を定め、大膽千萬にも案内される儘に、ズーツと使者の間へ通つて来た、重役の方が二人其れへ改めて出て挨拶をいたし、重「ハッ、お使者の御口上、吾々兩人承わり度う存じます」ハタと困つた武林唯七モウ斯う成るさ度胸が定まつたかぬから顔で唯「イヤ實は拙者御當家へ罷り越したるは、別に主人よりの使ひさ云ふのではござらぬ、拙者本日他家へ對し使者に罷り越す途中、御當家御長家下へ差し掛つたる所、非常の空腹をおぼ

へ、如何にも堪へ兼ねますに依つて、甚だ失禮ではござるが御大家とお見込み申し、一食一飯の御振舞ひを頂戴いたし度い考へで、斯く御無心に罷り出でたる次第でございます、誠に面目次第もござらんが、武士は相見互ひ、何卒此儀御承諾の上宜敷く御取斗らいを願ひ度う存する」是れを聞いて黒田の家來も互に顔と顔を見合せて、クス／＼笑ひ出した、是れば笑ふのも無理は無い、併し然う云はれて見ると折角ながら其儀はお断り申す云ふ譯にも成りませんから重、ハ、委細承知いたしました」さ其れより直ぐに御臺所へ申し付けた、名に負ふ五十二萬石の黒田家でございますから、結構なお料理を取り揃へて其れへ差し出した、處が此方武林唯七、屋敷を出る少し前に食事をいたしたばかりで、まだ空腹ごころぢやありません、漸く一杯頂戴して唯「ハッ、お庇護を以つて満腹仕りました給「イヤ、何うぞお換へ遊ばして、充分に御食り下さい」さ給仕の者は頼りに勤めるが、モウ我慢にも食べられ無い、其處で唯七

は自分相當の考へを出して唯「然らば恐れ入りましたが、此お汁椀のお代りを願ひます給「ハッ畏こまりました」さ給仕の人が汁を換へに參つた跡で、唯七は二膳目の御飯を懐中の鼻紙を取り出して、其れへ明けて手早く懐中に押し込み、漸く黒田の家來の目を瞞着し込んで、早速暇を告げて黒田家を立ち出で、御門外へ出るさ始めてホッさ一息次いだ。

○杜若の懇望、粗忽の使者

漸やくの事で武林唯七は黒田家の御門外へ出たが唯「ア、何うも飛んだ事をいたした、是れが跡で萬一露顯をするさ、お叱りを受ければ成らぬ」さ心配をいたしながら、早速御向へなる御本家淺野安藝守様のお屋敷へ罷り出で、御目通りを願ひましたる處、早速の御許しで御居間へ案内をされた殿「オ、唯七、久々であつたの唯「ハッ麗はしき御尊顔を拜し、恐悦を申し上げます殿「ワ



ム、併し唯七、其方が使者に参つた其要件を申すは何ちや唯「エ、主人内匠頭の口上別儀にございませぬ……殿「何ちや唯「エ、左様で……、口上の義はさ迄は云つたが、サア流石の唯七も脇の下から冷たい汗をタラ〜と流した、何たる粗忽でございませぬか、前申したる通りお屋敷を出る時に、殿様から肝腎の御用を伺がうのを忘れて居たのだ、眼ばかりパチ〜させて居たが唯「エ、御口上の次第は……殿「コリヤ唯七、使者の口上は何ちや、何を其方考へて居る唯「ヘエ、トエ、」眞逆かに安藝守様の御前で、忘れて聞かずに参つたさ云ふ事も云へない、苦〜粉れにヒヨイツと右手の御庭先きを見るさ、時しも臯月の中間にして、御庭前泉水の邊りには杜若が物の美事に咲いて居る、其れへ目を着けた唯七唯「エ、主人内匠頭口上の儀別儀にはございませぬ、御本家様御庭前の杜若、定めし今が美事であらうに依つて、其方今日罷り越し、頂戴いたし参れその口上にございませぬ殿「ア、左様か、何等の使ひと思ひ

しに杜若の所望か、宜い〜、早速取らせるぞよ……ア、コレ、杜若の花色宜しき處を内匠に遣はすに依つて、唯七へ取らせる〜とお小姓へ仰せ付けられたから、御近習は早速色取り宜敷く其れを切つて、一束にいたして持つて参りました、唯七は是れを頂戴して御暇を告げ、安藝様の御門を出で、其杜若を大切に左りの手に持ち、馬に打ち乗り右の手に手綱を握りながら、ボツ〜霞ヶ關の坂へ戻つて来た、途端にヂヤン〜と云ふ半鐘の音が聞へる唯「ア、出火がある様ちやナ馬「左様でございませぬ、何うやら火事のやうで云ふ内に諸家の火の見櫓で、版木の音がボン〜ボン〜鳴り始めた唯「オ、火事に違ひ無い、何の邊であるか〜と唯七が、ヒヨイツと馬上に伸び上つて築地見當を眺めるさ、恰度輕千橋の方角に當つて、黒煙盛んに立ち登つて居る唯「ヤツ、上屋敷見當に見へるぞ、ソレ者共續けツ〜と一聲掛けるさ等しく左手に持つたる彼の杜若を、右手にバツと取り直すが早い、其れを時に取つ

ての鞭さいたし、ピシリツ一打ち打ち當てた、モウ斯う成るさ土臺が粗忽者  
でありますから、杜若の美くしい花も自分の心配も忘れて仕舞つて、馬を煽つ  
てハイヨ一ツタツ〜、矢を射る如くに輕子橋へ立歸つて見ると、淺野様  
の御屋敷近傍で、出火があつたが、幸ひにして大火にも成らず既に鎮火いたし  
て居たけれども、何分近火のこまゆへ御屋敷の混雜は一通りならず、唯七は  
ヒラリ馬より飛び下りて取り敢へず内匠頭様お居間へ罷り出で唯「ハ、ハ、ハ、  
只今立ち歸りました殿」オ、唯七、其方を最前から尋ね居つたが何れへ罷り越  
した唯「エ、昨日吾君様より御本家へ只唯七御使者仰せ付けられしを失念い  
たし居りたる處へ、最前の御召し必定其れも存じ御本家へ罷り出でました殿」  
ウム本家へ参り居つたか、シテ本家への使ひは如何なる用向きか、其方辨まへ  
て罷り越したのか唯「ヘエツ、實は御用の次第を承わると忘れ其儘参上いた  
し、御本家様御目通りの節、使者の用向きは何ださお尋ねを蒙り、甚だ當惑

仕つりました殿、白痴奴ツめツ、何故左様に其方は粗忽者であるが、本家に  
於いては御立腹はいたされぬが唯「エ、御立腹は決してございませぬ、如何な  
る使ひぢやぞ仰せられました故、私しは己むを得ずお庭先きを拜見いたします  
るさ、實に何うも御本家の杜若のお美事なること、餘り結構にございまして故  
杜若を御所望に罷り出でたる儀さ申し上げたのでございませぬ、然る處御本  
家様は早速の御承知で、杜若の懇望なれば速かに取らせると仰せられ、御覽  
の通り結構なお花を頂戴いたして参りました、實に何うも色彩さ云ひ、又花片  
さ申し、美事なものでございます」と頭を下げた儘右手に持つたる杜若を御覽  
に入れた、内匠頭様ヒヨイツと其れを御覽に成ると、美事もなにも花杯は一  
つも付いてございませぬ内「コレ唯七、何を申す、何が美事ぢや唯「ハツ、御  
覽遊ばす通りお花の色彩リ……内「白痴者奴ツ、何が花の色彩リだ、花杯は一  
つもありは致さぬぞ唯「ヘエ……」ハツと心注いで唯七、見ると成る程霞ケ

開で出火と聞いて、鞭の代りに馬の尻を打つた其時にモウ花も何も滅茶く  
 に成つて仕舞つたのを、後生大事に持つて歸つたのだから、奮一つも付いては  
 居無い、是れはツと驚ろいた武林唯七、其れへ杜若を差し置いてハツと遙か  
 に飛び退り唯「ハ、ツ面目次第もございませぬ、實は私し御本家様へ御暇を頂  
 戴して霞ヶ關の中央まで歸つて参ります途中、御上屋敷見當に出火と承わ  
 り、斯様く云々、其れが爲めに結構なる杜若も斯くの如くにいたし、斯く度  
 び重なりましたる唯七の粗忽、何卒重き御成敗仰せ付け下され度く」と流石の  
 武林唯七、面目なき様子にて謹しんで頭を下げた、暫らく考へてお居て遊ば  
 したる内匠頭様内「ア左様か、其方は生れ付いての粗忽者ぢや、併し今日  
 の儀は屋敷見當出火と承わり、少しも早く駆け付けんと心付いたる儘に右  
 の粗忽、他の事とは違ふに依つて此の儀は忘れ取らせろ、今後は屹度氣を注  
 げる様にいたせ」と殿しきお告めもあらんと心得たる處、此御仁心なる御言葉

に、流石の武林も涙を流して厚く禮を述べた、スルと其後御本家へ内匠頭  
 様お出での時に、安藝守様が「エ、過日其方の家來武林唯七が吾が邸  
 へ参つて云々斯様であつた、其後殿中に於いて向ひ屋敷の黒田公に面會い  
 たした時、唯七に付いて是れくの事であると申されたが、其れは予の屋敷へ  
 参る途中、黒田の邸と予の邸と取り違へたのぢや、併し其時言葉を飾らず空腹  
 になつたから、一飯の振舞ひに預かり度いと申した彼れの頓智、實に面白い奴  
 ツであるさ、黒田公に於いても唯七の粗忽を笑ひもせず、却つて賞められた位  
 ひ、誠に宜い奴ツである、其方立ち歸つて唯七へ是れを取らせて呉れ」と仰せ  
 に成つて、お手許から脇差し一振りな、内匠頭様へ御渡しに成つた、其處で  
 内匠頭様は御本家へ厚く御禮を申し上げ、立ち歸つて右の次第を唯七へ仰せ  
 聞けの上、其脇差しをお遣はしに相成ると、武林は愈々赤面をいたしたが  
 粗忽の爲めに却つて御本家よりお脇差しを拜領に及ぶと云ふ、斯んな有難い事

は無いさ、耻じ入つたり喜こんだりいたしたと云ふ、斯くの如き粗忍の武林でございませぬが、忠義と云ふ二字は暫しも忘るゝ事はございませぬ、時なるから元祿十四年三月十四日の騒動、主君は切腹、五萬三千石の御家斷絶の不幸を見るに至り、茲に忠烈なる四十七士が、心を一致して亡君の思召しを繼ぎ、高家の筆頭吉良上野介の屋敷へ討ち入り、其首級を揚げた其時に、此武林唯七が自分の同僚なる橋本平左衛門と云ふ人の、死後の譽れを殘したと云ふお話がある。

○矢田五郎左衛門助武の逸傳

其れは愈々元祿十五年十二月十四日の夜、吉良の邸へ討ち入りの時に、戰士の面々は何れ劣らぬ働らきをいたした中に、此武林唯七に於いては關の孫六二尺六寸と云ふ大刀を振つて、及向ふ處の敵を斬ること數人、目差す敵の吉良

上野介の行衛が知れないから、段々奥の門へ踏込んで來るさ、一人の敵を對手に四人の同志が斬り合つて居る、是れで上杉家よりの附人として、豫て吉良家へ入れてあつた和久半太夫と云ふ豪傑、此方は木村岡右衛門、間瀬孫九郎、奥田貞右衛門、杉野十平次の四人が掛つて、猶手に餘つて居る處へ來合したるは此武林唯七、此の様子を眺めて唯「アイヤ四人の衆、武林唯七是れへ參つた、其の者は確か和久半太夫と云ふ者ならん、如何にも腕前勝れたる者ぞ承知いたす、貴公方此の一人の爲めに斯様に手間取つては相成らぬ、拙者も今迄で諸所を探し求めたれども吉良殿の所在は更に分らず、城代も御心配成されて居らるゝ事を存する、依つて各々は是れより手分けをいたし、吉良殿の所在を御穿索あつて然るべく、其者は拙者一人にて引受けたり」と呼ばつた、四人の者も是れを聞いて「四ツム然らば武林氏、何分御願ひ申す」と其儘刀を引いて四人の者は奥の方へ踏込んで行く、其れ遣つては和久半太夫、バツ／＼

くツと其跡を追つ駈けんといいたしたる此時、此方武林唯七は持つたる大刀を真向に振翳し唯「ヤア〜」和久半太夫、其方何んさて奥へ参るぞ、汝の對手は此方なり、吾れを恐れて逃げるのか」と云はれて半太夫據なく取つて返し半「能くも申した只今の一言、イテ其儀なれば汝の命を申し受くる」と突然唯七に斬つて掛る、心得たりと武林唯七、チャーン〜チャリーン受けつ流しつ茲に二十七八合と云ふもの戦かつたが、其内に和久半太夫は半「エイツ」さ焦つて唯七の、眉間を目蒐けて斬り下したる時に唯「ヤツ」さ唯七鏢元を以つてチャリーン受けは受けたが半太夫の太刀先き鋭ごく、横面の處を一寸斗り斬り付けられたから、ガラ〜〜ツと血が流れ出した、占めたりと和久半太夫、再び一刀取り直して斬り込んで来るを、唯七は早くも受け流したが、何しろ半面血に染み、其血が眼中に流れ込んで仕方が無いから、時々手を以つて其血を拭ひながら働らいて居る、所が對手は名に負ふ豪傑故、流石の唯七も受け

太刀と成つて、シリ〜〜後退りをいたし、坐敷から廊下へ出て、廊下から段々雪隠の方へ下つて来る内に半「エイツ」さ又々大喝一聲和久半太夫、唯七の膈天より眞二つと斬り下して来た唯「ヤツ」さ唯七は一生懸命、身を躍らして体を引いたが、何しろ雪隠の脇だから手水鉢がある、其手水鉢の脇に廊下に付いて簀子が出来て居る、唯七も足許に氣の注かない人では無いが、今身を獲してハツと右足を一足跡へ下げた時に、右の足を其簀子の上に踏張つたから堪りません、メリ〜〜ツと其簀子を打ち毀した、其の途端に唯七は、椽から下へドツと落ちた、得たりや應と和久半太夫、又踏み込んで真向より半「エイツ」さ斗りに斬り下さんとした所、是れほどに腕前の出来る半太夫だが、天武林の忠義を感じ給ふたものか、唯七の運が宜かつたか、半太夫が餘り急ぎ込んで斬り付けたから、今振り上げた二尺八寸の太刀の、銚先を上鴨居へ斬り込んだ、固より力の満ちて居る所故、切り込んだら容易には取れない半「

失策つたツ」と半太夫其れを引かうとする一刹那、落ちながらに唯七は、捨身に成つて唯「ヤアツ」さ大喝半太夫の足を拂つたから堪らない、美事両足共にバラリズンと斬つて落した、流石の和久半太夫も半「アツ」さ一聲ドツと廊下へ打つ倒れる、パツと忽ち飛び上つたる武林唯七、一刀を取り直して絶命を刺し、ホツと一息ついで横面の傷口より血汐の流れるのを拭ひながら前後を見返り、聲を張り揚げたることにいたして「唯ヤア〜人々能く聞かれよ、淺野内匠頭の家來橋本平左衛門が、和久半太夫兼則を討ち取つたり」と呼ばつた、是れを聞いて義黨の面々何れも感心の聲を揚げる、此の橋本平左衛門と云ふは最初黨中へ加はり、連判状へ名前を記したる五十一人の内の一人でございしましたが、赤穂より江戸表へ出府の途中、大津の驛に於いて重病に罹り、病氣の爲めに仇討の場所へ臨むことが出来ないご身の果敢なきを嘆いて切腹をして相果てた、其れを武林が誠に氣の毒に思つて居たので、今和久半太夫を

討ち取つたる己れの功を、此の橋本平左衛門に譲つた義侠のいたし方、丁度此時大石内蔵之助が鳥居利右衛門を討つて、萱野三平の忠孝を全くせんご切腹をしたる其志しに愛で、功を譲つたご云ふ佳談中の佳談と、一對の美談でございませす、先づ此の人が義士の中での時人ご云はれて後世に名を残したご云ふ一節でございませす、又間十次郎のお話しに出た今一人矢田五郎左衛門助武と云ふ人は、内匠頭様御盛んの頃、役は馬廻り役、食祿は百五十石を頂だき、御主君の御覺へも芽出度く、妻は旗本御番頭大澤志摩守組二百五十俵、渡邊仲右衛門の妹おけい殿と申し、夫婦の仲も誠に睦まじく暮して居たが、残念なことに未だ夫婦の仲に子供がございません、然るに時は延寶の三年正月、年頭に知巳を廻つて戻り路、妻おけいの兄、渡邊仲右衛門方へ歩つて参る五「ア、お頼み申す仲「ドレ」自身取次ぎに出た渡邊仲右衛門「イヤ是れは是れは矢田氏、能うこそお出で、サア何うぞ此方へお通りを五」其れでは御免一

「案内に連れて奥の一間へ通つて来る五」先づ明けましてお目出度……、舊冬は何かとお世話に相成り、本年も相變らず……仲「イヤ拙者の方より、尙相變らず宜敷く」交互に挨拶を濟まして酒肴を取り揃へ、二杯三杯盃をとり交したる此時、支關の方に當つて「〇頼む、頼もう」と訪ふ聲五「お兄上、何うやらお客様來の様で仲「イヤ決してお介意ひなく……では一寸失禮をいたします」と仲右衛門、自身に支關へ出て來て見ると、友人、堀民五郎、本多宅兵衛と云ふ兩人、仲「イヤ是れは、堀氏に本多氏、宜い處へ御入來成された、幸ひ拙者妹けいの連合ひにて、淺野内匠頭家來矢田五郎左衛門が來て今奥の間で一杯傾けて居る、四人で打ち解けて一杯やらう、何うぞ此方へ、民「ウム然うか、其れは、貴公の妹けい殿のお連合ひ、幸ひな處で出會つたららばお近附きに成つて置かう、御免下さい」と二人揃つて奥坐敷へ這入つて參り、程宜き邊りへ坐を占めた、此時、渡邊仲右衛門、仲「ア、矢田五「ハイ、

仲「此の方が拙者の友人本多宅兵衛殿、堀民五郎殿、御挨拶をいたされい、堀氏、本多氏、是れが妹けいの連合ひ、矢田五郎左衛門と申す、民「是れは、拙者此渡邊仲右衛門殿の友人にて、堀民五郎と申す者でござる、宅「拙者本多宅兵衛と申す者、何うか御別懇に願ひ度く存する、五「ハツ申し遅れました、拙者は渡邊仲右衛門の妹婿、矢田五郎左衛門にございます、何うか此後さも御懇意にお願ひ申します」と互ひに挨拶を濟むと又もや盃が順に廻り逆に飛ぶ、其内に酒が段々廻つて來ると、堀民五郎の方は宜敷いが、本多宅兵衛に至つて酒の上の悪い人で、早や眼が据り唇をペロリと舐めながら、ソロソロと管を巻き始める、宅「ア、其許が矢田五郎左衛門と云はれるか、御身は淺野内匠頭の家來だと云ふが、食祿は何の位ひだナ、五「エ、拙者は百五十石にございます、宅「ウム百五十石……左様か、吾々は大澤志摩守組にて、食祿は僅か二百五十俵なれど併し直參だ、然るに貴公は陪臣、御身の主人淺野内匠頭と吾等と

同格だが、其許陪臣の身として吾々直參と共に酒を飲むと云ふは、嬉しい事であらうナ。随分禮を失した言葉ですから、聞き兼ねて、堀民五郎「民」コレコレ本多、何を詰らぬ事を云ふ、其んな事を云ふものでは無い、サア飲めく」さ頼りに話した外へ轉じ様として居るが、却々本多宅兵衛聞き入れない。

○中の橋上の野猿斬り

宅「イヤ堀、其許は黙止つて居なさい、夫れに違ひ無いのだ、何うだ矢田五」ハイ……、如何にも陪臣の身を以つて、各々方々斯く膝組みでお盃を頂きまする事、此矢田誠に嬉しく存じます宅「ウム然うであらう、イヤ然う無うては相成らん、嬉しいと思つたら是れから後もある事故、決して今日の嬉しさを忘れては相成らんぞ、サア直參の酒をモウ一杯遣はそう」傍らに聞いて居た渡邊仲右衛門は心の中に「ハテ困つた事が出来た、矢田五郎左衛門が酒興と思つて辛抱いたして呉れ、ば宜いが、然うさ知つたならば二人を斷わるのであつた

さ頼りに案じて居る、堀民五郎も此本多宅兵衛を長く置いては間違ひの種と思つたから「民」サアく本多、大分時刻も移つたから歸るさ仕様宅「イヤまだまだ歸らぬ民」歸らぬでは無い、貴公酔つてるから是非歸りたまへ」さ無理やりに本多宅兵衛を連れて堀民五郎、渡邊、矢田の兩人に挨拶を述べて歸つて仕舞ふ、跡に渡邊仲右衛門は氣の毒そうに「イヤ氣の毒なことをした、矢田、何うか心に掛けぬ様に」五「イエく何で心に掛けませう、御酒を飲めば心の變りまするもの、お酒を飲んで平生に變らなければ飲まぬ方がましかさ心得ます、併し私しも是れにてお暇を仕ります仲「ウムモウ歸られるか、折りを見て又來て呉れます様、快く又一杯飲みませう、本日は誠に氣の毒であつた五「イエく、決して御心配なく、お兄上にもお暇があれば御出で下さる様、然らば是れにてお暇を仕つります」さ矢田五郎左衛門、渡邊仲右衛門方を立ち出でたが、何しろ慥忽あつては成らんさ心を締めて呑んで居た酒も、外へ出て先づ



是れで宜いさ心の寛んだものが、急に甚だしく酔が廻つて来た、足許さへも踏  
 き跟々として一步は高く一步はひくく、千鳥足に成つて歩行いて居る、尤さ  
 もそんなに足の利かなく成るまで呑まなくつても宜からうと、下戸黨は被仰る  
 かも知れませんが、御酒家がお酒を飲んだ時云ふものは、足を踏みぬめて歩  
 くよりは、身体に合はして千鳥足に歩行く方が心持ちが宜いのだそいで、時々  
 酔つ拂ひが溝の淵杯をヒヨロ／＼歩行て参ります、何しろ肝腎の足許が定まら  
 ないので、今にも溝の中へ落ちるか、今に落ちるかと思はれもしない心  
 配をして、萬一落ち込んだら上げて遣らうかと考へて尾行て行くさ、際どい處  
 で酔拂ひ先生「オット、い、危ない／＼杯を獨り言を云ひながら体を開いて  
 其處を避けるさ云ふ、足を踏みぬめて歩行くのさ、千鳥に歩行くのさ、お酒  
 の發し方が大變に違ひます、扱ても彼の矢田五郎左衛門は、今しも中の橋迄歸  
 つて参りましたが、非常に酒の酔ひが出たさ見へて頭がキリ／＼痛く成つて來

たから、橋の欄干に靠れて眠るでも無くウト／＼ウト／＼何時しか夢に入つた  
 處へ向ふから調子外れの大聲で爺「コレよ、汝が稼いで呉れるので俺リア斯  
 うして好きな酒も飲めるし、ノウウの儲かるのは此正月だけだ、家へ歸れば美  
 味い物を買つて遣るから、疲れるだらうが働いて呉れよ、俺れに取つては手  
 前エは大事な金箱だ」さ年の頃六十余の老爺、獨り言かと思ふさ背中へ背負つ  
 て居る荷の上に、乗つて居るは一匹の野猿、如何さま猿廻しの老爺で、正月の  
 事ですから諸方で貰ひがあり、何れで飲んだか宜い心持ちで、是れは芝新網に  
 居る家主勘兵衛の長屋を借りて居る猿廻し八兵衛「入ッラ橋へ來たよ、サア欄  
 干を渡んな」八兵衛が身体を横にしたから、背中に居る野猿坊は、ヒヨイツと  
 欄干へ飛び移り、チヨコ／＼と立つて中央の處まで参りますと、其處に  
 は矢田五郎左衛門が眠つて居ります、彼方へ越すのは其上を飛ばなければ成ら  
 ないから、野猿坊はヒヨイツと飛びながら欄干に後足で、矢田の顔をシュツ

さ引掛いた、是れにハッ目を見ました矢田五郎左衛門、見る顔はヒリヒリ痛んで少々の血もにじみ、野猿はキツキツと嘲笑して居る様に見へたから、一足下がるご五「ヤッ」ご一聲抜き打ちに、可愛野猿坊の首を斬り落した、体は其儘橋の上へ、八兵衛は是れを眺めて吃驚仰天、八「ヤイ武士、大變なことをしやアがつた、俺れの大事の金箱を手前エ途頭殺しアがつたナ、此野猿を殺されちや明日から俺れば商賈をする事が出来無エ、サア元の通りにして返して呉れ五「ヤア黙止れツ、無禮をいたした物を斬つて捨てたが何さいたした八「エイツ無禮をするにも何にも對手は畜生だ、禮を知つてる譯ア無エ、無禮をするのは當然だ、手前が斯んな處に寝て居るから悪いんだ、寝る處へ寝て居りア斯んな事ア無エ、サア勘辨出来無エでツ」ご此奴ツも大分酒を呑んで居たから前後を忘れてバツと突然り武者振り付いて来る奴ツを、此方矢田五郎右衛門も酒興の上で餘程腹が立つたさ見へ、今野猿を斬つた儘の一刀を取り直し五「無

禮者ツ、已れもかつ」ご肩先きより乳の下掛けて只一刀に、バラリズンと斬り下げる、血煙り立つて八兵衛は、ドツと其れへ打つ倒れたが、斬つてから五郎左衛門五「ア、飛んだ事をして仕舞つた、斬る丈けの事は無かつたのだが、併し今ご成つては仕方が無い」ご血刀を拭ふてビタリ鞘に納めた處へ、早や其の處へ町役人二三人でバラ／＼と出張に及ぶ五「ア、町役人共、拙者は築地鐵砲洲に上屋敷のある、淺野内匠頭家來矢田五郎左衛門と申する者、此の段を屋敷へ通知いたして呉れ、何れへ成りさも同道をいたす」ご云ふので町役人は、此事を直ぐ様淺野家へ注進をいたしますと、淺野家よりは間瀬孫九郎、藤井嘉兵衛の兩人が出張をいたし、直ちに矢田を引取つて鐵砲洲の屋敷へ同道して歸る、其跡へ御檢視が立つて八兵衛の死骸を檢ためて見るごたつた一大刀、肩口から乳の下へ袈裟切りご云ふ美事な切口、檢視の役人も驚ろいたご云ふ檢「ア、町役人、八兵衛の死骸は町法に依つて宜敷く取り行なへ町へ

エ、お役人様へ願ひます、まだ御検視の済まないのがございます。檢「八兵衛は  
今濟んだぞ。町「イエ其八兵衛の他に一匹野猿坊が。檢「白痴た事を申す奴ツだ、  
野猿に檢視がゐるか」茲に於いて町役人より芝の新網へ沙汰に成るさ、家主勘  
兵衛、人呼んで念佛勸兵衛、是れが長屋の者を連れて參つて八兵衛の死骸を取  
り片付けて仕舞つた、此方淺野家に於いては江戸家老安井彦右衛門から、矢田  
五郎左衛門の事を御殿様へ申し上げますさ、淺野内匠頭様は以つての外  
御立腹、予が自から手討ちにしたすこの御言葉、彦「恐れながらお手討ちは餘り  
輕々しく存じます」さ種々にお諫め申し上げたが、内匠頭様は却々御聞き入  
れがございませぬ、其内式に依つて矢田五郎左衛門へ最後の御膳を下し置かれ  
ました、此の時の焼物は鯉で、此鯉さ云ふものは覺悟の宜い魚で、斯う云ふ場  
合には必らず用ひますものだそうで、續いて御庭前へ荒蕪を敷き、其上に矢  
田五郎左衛門を引据へた、御坐敷から庭下駄を召されて靜かにお下りに成つた

淺野内匠頭様、何事も仰せられずお小姓が差し出すお膳差しをギラリ引抜い  
て、殿「エイツ」さ斬り下された一刀は、矢田五郎左衛門の帯の結び目を斬つて  
バラリ帯が解けた、ハツと驚ろく家臣の人々を見向きもやらず内匠頭様内  
見苦しい死骸を取り捨てい」さ仰せられた儘、ズーツと奥の間へ御這入りさ成  
つた。

○濁酒三升、持ち寄りの酒宴

夢見し如き矢田五郎左衛門、バラ／＼／＼ツと近寄つて来た家臣の人々に、不  
淨門より有無をも云はせず追ひ出されて仕舞つた、スルさ其處に待ち受けて居  
りましたのが矢田の下男作藏、是れは小松川から奉公に来て、モウ親父の代が  
ら二十年も居ります、其れに妻のおけい、二人共モウ旦那の命は無いものと思  
つて居た處へ、思ひ掛けなく無事で不淨門より追ひ出されたことでございます

から、大いに喜び、妻「オ、貴郎様、御無事で何よりでございます作「へ、且  
 那樣、作藏でございます、何うも御無事で何より結構と存じます五「ア、おけ  
 いか、會はせる顔が無い、面目ないが併し今云ふた處で歸らぬ事である、此の  
 上は何うかして今一度當家へ歸参いたし度いが、今其方を連れて何うすること  
 も出来ない、アノ作藏、其方けいを連れて當分の間、小松川へ参つて居つては  
 呉れまいか、拙者が元の身分に成れば必らず使ひを遣つて迎へ取らず、其時に  
 妻と共に出来て来て呉れる様作「ハイ承知いたしました、御新造様は確かに作藏  
 がお預かり申します故、御安神成されまます様五「ウム、何分頼む妻「其れで  
 は貴郎様も随分御機嫌宜敷う五「オ、暫らくの辛抱を頼むぞ」妻のおけい  
 は作藏に連れられて下總の小松川へ出立をする、此方矢田五郎左衛門は僅か  
 の金子を持って何れかへ家を搦へんければ成らぬと思つたけれども、何を云ふ  
 にも浪人の身の上故、何うして高い家賃は拂ひ切れない、其處で芝の新網遊り

で家を借りたら家賃も安からうと、新網へ歩つて来た、此新網と云ふ處は當大  
 阪で云ふと、以前の長町六丁目邊りの貧窮人の住居する處でございますから、  
 其處へ来たつて家を探すと、丁度勘兵衛と云ふ家主の長屋に一軒の空家がある  
 から、取り敢へず矢田五郎左衛門其れを借り受けて假の住居を定めた、其内に  
 五郎左衛門は淺野内匠頭様の登城下城に付き従が、陸ながらお守り申して  
 功を現はし歸参を仕様と云ふ考へで、殆ど毎日の如く出て参りまするが、別に  
 自分が功を立てる様な事も無い、其内に坐して喰へば山も空して、貯へば概略  
 盡きて仕舞ふたので、五郎左衛門も何うして糊口を浸いで行かうと考へる内に  
 其隣りに住居をするのが、毎日カ〜金を敲いて賣り歩行く餉賣の金兵衛と  
 云ふ者が、或日の事、矢田五郎左衛門の表口に立つて金「エ、お隣りの旦那  
 五「ウム金兵衛か、何だ金「開けても宜うございませうか、五「介意ぬ、這入れ  
 金「御免成さい」と、ガラリと戸を開けて中へ這入つて来て、二言三言話

したした末に金兵衛は金一時に旦那、他でもございませぬが、貴郎の御商買は何んで在つしやるんです五「ウム拙者の商買が金「へエ五「何も拙者は商買はして居ない金「へエ、商買が無くつちやお困りでございませう、私しは門付けをしてお歩行き成さるのだと思つた、其れでは謠を謳つてお歩行き成さるのぢやありませんか五「イヤ然うでは無い金「へエ、ぢや幾何かお金を持つて居なさるのですナ、ウム……ぢやア金貸した成さいますか五「金貸し……、金「夫れも澤山貸すんぢやアございませぬ、毎日小商人が買ひ出しに行く時に、一貫さか一貫五百の金を貸し、日の暮れ方に催促をして取る、烏金を貸すのです……五「ウム然うか、イヤ拙者も始めは少々の金を持つて居たが、今は殆ど喰ひ盡して無一物同様、明日から身の廻りの物でも賣らなければ喰ふ事が出来無い金「然うですか、其れでは私しがモウ少し早く氣を注げたら宜かつたに其れは併しお困りでせう、ぢや貴郎は謠云ふものを知りませぬか五「謠ひか

謠ひならば少々は存じて居る金「其れでは謠ひを謳つてお歩行き成さいますし、却々貰ひがございますよ五「然うか、其れは宜し事を聞かして呉れた、然らばお前の言葉に従がつて謠ひを唄つて歩行かう」と云ふので、其翌日から矢田五郎左衛門、毎日人の門に立つては謠ひを唄つて一錢二錢の合力を貰つて歩くが、昔し覺へた觀世流で、成る程却々餘る位ひの貰ひがある、併し五郎左衛門は是の金を貯めて置く云ふのでは無い、金さへあれば三日でも四日でも家に居て、一文も無くならないと貰ひに出ない、其れ故天氣都合の好い時は宜敷いが、雨が降るさ何うする事も出来ない、處が其年の五月に入つてから毎日續け様に降り出した梅雨で、新網邊りの其日稼ぎの者は非常な困難をいたして居る、

星一つ見付けし夜半の嬉しさは、

月にもまさる五月雨の空、

さ云ふ位ひで、天氣が好く成るさ何より嬉しい、長屋の連中は早や半分自暴氣味で〇「サア、皆集まつて来い、斯う毎日雨に降られちや長屋中の願が千あがる、皆んなで出しッこをして酒を呑んで、陽氣に歌でも唄つて騒いだら天氣に成るだらう、△「然うだ、併し何處の家が宜いだらう、〇「アノお武家様の家が廣いから、那處を借り様、△「ウム其れが宜い……」とソロソロ揃つて出て来た長屋の者、〇「エ、旦那五」ウム、是リア大層揃つて来たナ、何だ、〇「へ私共ア斯う雨に降り續けられちや願が千上りますから、一つお天氣に成る様にお祝ひをやらうと云ふので、何うぞ濟みませんがお宅をお貸し成すつて下さい、皆んなで幾十が出しッこをして濁酒を買つて飲むんで、旦那も幾十が入りませんが五」然うか、其れは何うも面白いが併し俺は相憎なこさだ、皆んな遣つて仕舞つて少しも残りが無い、〇「ちや仕方がありません私が立換へて置きますから、天氣に成つてお稼ぎ成すつたら、私の方へ返して下さい、其れ

で是れ丈けの人数へ濁酒が三升もあつたら宜からう、澤庵を六本斗り買つて來な、後は何にも要ら無エ、△「サア皆んな茲へ來たく、旦那お前さんも何うせ後で貰ふんだ、矢張りお仲間だから此處へ来て遠慮なく飲つてお呉んなさい、さ茲で十二三人の長屋の連中が、車坐に成つて面白く飲み始めた、〇「ア、金兵衛さん、何うも思ひ出すナ、金」思ひ出すつて何を……、〇「何時も斯うして長屋で出しッこをして酒を飲むさナ、アソソレ八兵衛の事よ、金」ウム然う、アノ八兵衛が居れば先きに立つて酒の仕度をするんだが、ナア思やア可愛そうなものだ、此正月だつたナ、何うでエ那の斬られた様子は、勘兵衛さんが然う云つた一太刀、俺リア死骸を片付けながらも、何だか心持が悪かつたナ……、向ふは何の氣も無しに話して居るのだが、ハツと思つた矢田五郎左衛門、五」ア、金兵衛金」へ何です、五」何だ其八兵衛と云ふのは、金」エ、然うだ、旦那は

御存じはありますまいが、八兵衛と云ふのは猿廻しで此長屋に住んで居たんで、處が此の正月に何か無禮をしたと云ふので、中の橋の上で武士に斬られました、私共が行つて其の死骸も引取り、大勢で寄つて葬むつて遣つたのです。其奴ツが却々の酒呑みでしてナ、酒亂の八兵衛杯と綽名を付けられて居た位ひで五「エツ……金「オヤツ、何故旦那は其んなに驚ろくんです、で此の家が其八兵衛の家で五「ナニ、然らば此の家が八兵衛の家が金「へエ、其奴ツが死んで空いた斗りの其後へ、貴郎が越して來たさ斯う云ふ譯でございます」是れを聞いて矢田五郎左衛門、思はず家の内を見廻した、是リア宜い心持ちはいたしますまい。○「旦那、貴郎は何を其んなに考へて居なさるので、まだ貴郎は一抔丈けですから、ドン／＼後を飲んだら宜うございませう、オイ／＼三吉、然う一人で飲んちや不可無エ、頭割りに成つて居るんだから足りなくなつちまふよ旦那はまだ一抔しか飲ま無エんだ、サア此方へ廻しナ △「オヤ／＼其れぢや俺

れの方はまだかい」とソイ／＼云ひながら濁酒に舌鼓を打つて居る。

○因縁の茅屋、歸參の喜悅

佛者の所謂因縁因果さば斯る事を云ふのでございませう、斬られた者の後へ知らぬさは云ひながら、手を下して斬つた矢田五郎左衛門が這入る杯さば、誠に奇妙な事と云はれば成らぬ、折りしもあれや門口より武「お頼み申す、○「旦那誰れが來ましたぜ五「ウム、ハ、何誰でござるか武「エ、拙者は富森助右衛門でござるが、矢田五郎左衛門殿御浪宅は此方でござるか」聞いてズイツと立ち上つた矢田五郎左衛門、ガラリ門口を押し開けて五「オウ是れは／＼富森氏、先づ／＼此方へ……コレ其方共お客來だ、見苦しい何れかへ行けサア歸れ／＼、○「オヤ／＼馬鹿にしてらア、今迄一緒に酒を飲んでいながら、見苦しいが聞いて呆れるわい、サア皆其れを持つて歸らう／＼」とアツ／＼云

ひながら長屋の者は、皆ゾロ／＼裏口から逃げ歸つて仕舞つた。五「サア富森氏何うぞ此方へ助ア、矢田氏、大層お賑やかでござるナ。五「イヤ彼等は皆拙者の召使ひでございます。助「ハ、ア、五「何うぞ決して御心配なく……」裏口から出て戸の透間から覗いて居た長屋の者。〇「オヤッ俺れ達ちの事を皆召し使ひださ云つてやアがる、何が召使ひだ、其んなら割前は現金に貰ふぞ、△「マア／＼黙止つて居れ、併しお客は立派なお武士だぜ」云ひながら猶もかヤ／＼覗き込んで居る。助「さて矢田氏、殿様が其許の事に就いて一時御立腹に成られたが、其後種々御考へ遊ばされ、折りあらば其許に歸參仰せ付けらるゝの御言葉、其れ故拙者共も必らず好機を見て御推舉仕つる考へでござるが、涙々中無不自由ならんぞ仰せられ、殿様より特別の思召しにてお手當てを下し置かれる、有難くお受けをいたされよ」と懐中より金子三十兩取り出して前に差し置いた、五郎左衛門是れを聞いて感涙に咽び五「ハ、ッ、有り難き君の

思召しめ、尙其許より御前体宜敷く御執成を願ひ奉つる、此の金子は矢田五郎左衛門確かに頂戴仕つりました。助「然らば矢田氏、随分御無事に五「ハッ何分宜敷願ひ上げます。助「御免ツ」と富森助右衛門歸つて行く、矢田五郎左衛門は其三十兩の金子を前に置いて、萬感胸に往來し、君の御惡みの有難きに感泣の涙止めあへず、此の君ならば假令へ水火の中なりとも、云ふ志した固めたのは、又無理ならぬございます、斯る處へ裏口よりドヤ／＼這入つて来た長屋の連中。〇「旦那五「ウム何だ。〇「お前さんは淺野様の御家來ですれ。五「如何にも然うだ。〇「何うも様子が變だと思つたら、酒亂の入兵衛をお斬り成すつたなアお前さんだれ。五「ハ、ア判つたか。〇「エ、判りますとも、道理で先刻家を見廻して妙な顔を成すつた、併し先生、餘まり甚ひぢやございませんか。人の事を見苦しい奴ッだぞか或は召使ひださか。五「ハ、ハ、ハ、イヤ怒るナ、友人の前で一才都合が應るかつたから那ア云つたのだ。〇「併し何を貰つたので



す五「金子を三十兩、御殿様より浪々中の手當てさして貰つた〇「ヘエー、オ  
、是リア皆小判ですれエ、皆んな小判でエ物を見た事がございませんから、見  
せて遣りませう、サア皆んな来なくちや不可無エ、小判だ〜〇「ヤア素晴し  
い物だナ、何うでエヒカ〜光つてらア、れエ旦那五「カム何だ △「先刻那ア  
して私達ちが御馳走をしたものだから、是れ丈の金が遣入つたので、何か御  
馳走をして呉れますね五「ア、宜いさも、澤山買つて来るが宜い、△「有難い  
〜、サア〜皆んな三十兩の金があるんだ、幾干濁酒を飲んだつて、三十兩  
は飲み切れ無エ」其時分の三十兩と云へば、方今の六百圓以上の金ですから  
濁酒を買つて呑んでは大變なものです、長屋の者は大喜こびで、澤山の濁酒を  
買つて参り、ガア〜長舞ひ酒を煽り付けた、翌日から矢田五郎左衛門は又々  
深編笠を頂だき、淺野内匠頭様の登城下城を尾けますが、別にはれと云  
つて變つたことも無い、然るに其年八月御本家藝州家の若殿安藝守様が御元

服を成され、其御祝ひとして御招きに依り内匠頭様、夜に入つて御歸りご成  
る、行列には提灯を照らして今も、霞ヶ關を四丁斗りお出でになるさ、何れの  
藩が判らぬが非常に酩酊した二人の武士、大刀を引抜いてバラ〜ツ往來  
の者を追つ駆けた、皆ソレ泥酔武士だ、危れエ〜、逃げる〜」と往來の  
者が淺野様御行列の處へ逃げて來た、遙かに尾けて参つた矢田五郎左衛門、  
是れを眺めて五「此處ぞ吾が腕の現はし處なり」と思つたから、此方を目蒐け  
てバラ〜、見るより一人の武士は武「エイツ邪覺いたすなツ」と眞向微塵さ  
斬り付くる、ヒラリ体を躲して矢田五郎左衛門五「ヤツ」と其手を取つて逆  
捻じ返し、一人は手の表てを以つて面部をしたゝかに打ち、倒れる處を豫て用  
意なしたる繩を以つて高手小手に縛り上げ、編笠取つて其れへ両手を仕へた、  
處が其當日折宜く富森助右衛門お行列に加はり、矢田の働らきを見て居たか  
助「カム矢田氏出來したり、必らず是れにて歸參相叶ふべし、安堵いたされる

様、後々にて殿様へ宜しなに申し上げる、先づ今日は引取られよ五ハツ有難  
い仕合せ、何分宜敷く願ひ奉つる」其處で二人の泥酔は矢田より町役人へ引  
渡す、内匠頭様は鐵砲洲の御屋敷へ御歸りに成りましたる後、富森助右衛門  
より右の趣きを殿様へ言上いたしまするさ、然らば矢田五郎左衛門へ歸參申し  
付けるさ云ふ事に成り、前百五十石の處を、百石にて歸參を許される、直様矢  
田は小松川の作藏方へ使ひを出だし、妻のけい、作藏諸共に呼び迎へたが、  
二人の喜こびは如何ばかり、其れより矢田助武は一層忠勤をばげみましたが、  
然るに元祿十四年三月十四日、殿中松の御廊下の及傷、翌十五年十二月十四日  
仇討ちの時、尤も目ざましき働らきをしたと云ふ、矢田五郎左衛門芽出度  
く歸參の一節」然るにお話し跡へ戻る様でございませうが、此四十七義士の總  
統領大石内藏之助良雄が、山科に閑居をして居る當時、同志の人々は討ち入り  
の日が待ち遠くして仕方が無い、其内江戸表では急進派の大將として堀部彌

兵衛、同じく安兵衛、其他同志の人々は内藏之助殿の出府が餘り遅くなるから  
何ういふ譯けださ都の様子を探ぐつて見ると、肝腎の大石内藏之助は、近頃伏  
見撞木町或は京の祇園新地や高原の遊里に通ひ、身を放蕩に持ち崩して居る  
といふ事が判つたから、江戸に居合す同志の人々の中で、矢田五郎左衛門、勝  
田新左衛門、赤垣源藏、不破敷右衛門等の血氣の人々は、大いに憤り、扱て  
こそ大石殿には亡君の仇を報する御所存も無く、變心をいたされたさ見へたり  
されば此上は吾々が山科に乗り込み、内藏之助を討ち取り其首級を亡君の御墓  
前に供へ、而して吾々一同が吉良家に亂入いたし、亡君泉下の怨みを晴さんさ  
いふ議論が起つた、するさ此時、年輩の堀部彌兵衛は、騒き立つ一同を制止し  
め彌「マア各々お待なさい、拙者共一同は昨年、播州赤穂を退城の砌り、善悪  
ともに大石内藏之助殿に從がうさいふ約束をいたしたのである、何ういふ都合  
で内藏之助殿の御出府が延引して居るか相判らん、なまじな事をしては婿嬢が

斧の笑ひを受ける様なことがあつては相成らん、よつて拙者がこれより山科へ参り、内蔵之助殿の心中を聞いて、若變心をいたしたさあらば、各々に成り代つて拙者が大石内蔵之助を討ち取り、其首級を持ち歸つて来るから、何うか夫れ迄はお控へ下されツ」さ、云ひ置いて江戸を發足して東海道を急ぎ果して都山科に來り、秘かに内蔵之助に對面して聞いて見ると、内蔵之助は何うして變心ごころでは無い、彼の吉良家からは猿橋右門、其他紀州家からも間者が來て大石に付き纏ひ、其れが爲め當時の内蔵之助は寢た間も油斷が出来ないさ云ふ實に苦心慘膽の有様だ。

○神崎與五郎則休の逸傳

此紀州家から間者の來るのは何う云ふ譯ださ云ふと、全体吉良上野介さ云ふ人は、赤穂の一件が無くとも疊の上で病死する杯は覺束ない人だ、此の人の父

は四千石で吉良若狭守さ云ひ、此人の一人息子が吉良左近、後上野介だが、此左近は旗本大名引くるめての美男の聞へを取つた人で、或時上杉家でお能狂言の催しがあつた時、父若狭守に連れられてお能拜見に行つた時に、上杉家には女のお子が三人あつて、一番末が一人男の子、處か其時總領のお姫様が吉良左近を見染めて戀病ひさなり、早速上杉家の御典醫に診斷をさせた處が、是れは普通の御病氣とは違ふ、何かお胸に思つたことが閉じて居るに依つて、斯う云ふ御病氣が出たのだから、お附のお女中からでもお尋ねに成れば宜敷からう、幾らお藥を差し上げても癒る御病氣ではございませんさ云ふので、其れからお附の女中が其れさなく聞いて見ると、實は耻かしながら吉良左近様をお見受け申し、斯う云ふ病氣に成つたさお打ち明けに成つたので、直ぐ様此の事を殿様へ申上げる、スルさ殿様は其れなれば早く然う申せば宜いに幸ひ先方も獨身であるからさ誠に粹なお方で早速吉良若狭守へ此お話しを

いたすに、吉良の方では大層喜こんだのは無理も無い、上杉云へば出羽國米澤の城主三十萬石、最も名譽の御家柄、此方は僅か四千石の旗本で、然う云ふ御大家の姫君を嫁に迎へると云ふのは此上も無いこと、早速承知に及び、黄道吉日を選び結納の取交せも済み、間も無く祝言の盃を擧げた、スル程無く父の若狭守が病死をしたので、吉良上野介が家督相續をした、續いて上杉の大守も御病死を成すつたが、茲に上杉家で困つた云ふのは、末のお子様千歳未滿であるから、却々御大家を相續することが難かしい、其れを此上野介が彼の柳澤美濃守と親分子分云つた様な間柄で、五代將軍家の御氣に入りだに依つて、柳澤と吉良が種々相談の上宜い様に御前体を取りなし十歳未滿の子供が遂に上杉家を相續することに成つた、是れ偏へに上野介の働らきに依る處、其れから後暫らくはお話しが無くつて、上杉の御當主が或る日お姉様、即ち吉良のお邸へお客に在つしやつた事がある、其時に上野介が

悪計をめぐらして此上杉家の當主に毒を服ませた、其處で直ぐに血を吐いて死んだ云ふ譯では無いが、屋敷へ歸られて後シリ、御病氣に成つて遂々御死去なされた、處が其跡にはお姉様一人御屋敷に居られるけれども、女では相續が出来ない、家督相續者なき時は名家たりとも取り潰す云ふことが、神君御遺言百ヶ條の内にある、其處で上杉家の家臣は大いに心配をいたし、家老中老番頭の面々相談の上、取り敢へず當主御病氣眉を出し置き、其れから打ち揃つて吉良の邸に出て参り、扱て斯ういふ云ふ次第故、何卒御當家のお子様三郎様を頂戴いたし度く存する云ふて來た、豫て此方は謀んだことですか、早速二ツ返事で承知をするのだが、其れさば面に現はさず上野介上、イヤ其れは困る、三郎は此方の相續人であるから、遣る譯には行かない、一旦は斷わつたもの、上杉家では却々承知しない、五「イヤ何ぞ仰せらるゝとも、此方の奥様のお實家方、三十萬石の御家が斷絶いたします、是非とも頂戴いたさ

なければ相成りません上「其れでは己むを得ず遺ることにするが、就いては其れに子供が出来たら此方へ相續人を英れる五「委細承知いたしました」其處で此吉良の總領三郎と云ふ人が上杉家へ乗込み、上杉彈正大弼綱乗と相成り、其奥様と云ふのが紀州中納言様の御姫様、御夫婦の間に出来たのが左兵衛佐と云つて是れが後に吉良家の相續人に成つた、上野介は是れで充分認みは叶つて、自分の家は四千石だが、倅の家が三十萬石、其倅の奥方が紀州家から來て其腹に出来たのが、詰り上野介の孫に當る、シテ見れば紀州家も充分に血縁がある、されば後元祿十五年極月十四日、上野介が首を斬られたと聞いた時に、此上杉彈正大弼綱乗を小脇に搦り込んで、父上の首を取り戻さうと云つて立ち出で様とすさ、御側に控へた千坂兵部、長尾長十郎の二人は強いて押し止め、貴郎は上杉の御相續人であるから、吉良の縁は切れて居りません、是非とも在つしやるなら家老、中老、番頭一同の者へ相談をして御離縁

を遊ばし、元の吉良三郎と成つて在らつしやいまし、左なくば出る事は出来ませんと無理に止められて據るなく引返した、其時に誰れかは知らず上杉の御門へ、夜の間に落首を認めて貼り付けた者がある、

「謙信の車掛りのくだ折れて、行くに行かれず引くに引かれず」

此謙信と云ふのは上杉謙信で、兵法に車掛り云ふのがある、其車掛りを車と見て眞棒が折れたから引くことも出来ないし、又行くことも出来なくなつた云ふ、竟り此大弼綱乗の心事を歌つたものです、此の時の事を以つて上杉は十五萬石の減地を仰せ付けられたが、是れは徳川時代の秘密と成つて居た、斯様な悪事をする吉良上野介ですから、到底疊の上の往生は出来そうも無い、其れが爲めに紀州家よりも問者を出して居たものと見へるが、扱ても此方堀部彌兵衛は山科へ參つて見るさ、大石内蔵之助は苦心慘膽多くの問者を欺

むき、反間苦肉の計略をめぐらして居る處だから、其次策を承わつて彌兵衛は、早速江戸表へ立ち歸り、一同の者を宥める心算で直様山科を出立する其處で内蔵之助は此血氣の連中を押へ付ける爲めに、已れの名代を一人江戸へ遣はすことに成つたので、其名代を誰れに仕様と考へたが、茲に神崎與五郎教休と云ふ、當年取つて三十三歳、其與五郎を遣はすことに成つた、其當時に内蔵之助は、今一人岡野金右衛門、此者を同道さそうかと思つたが、兎に角一人で江戸へ下らせる事に成つた、此岡野金右衛門と云ふのは、却々の短氣者で其上非常な頑固者、折々大石と一坐をして居ても、問者の猿橋右門杯の顔をカツと睨み付けたり杯するので、大石も萬一もの事があつては成らぬと思つたから、一層神崎と同道して江戸へ置かうかとも考へたが、是れは先づ跡から一人で出立させる事にいたし、兎も角神崎與五郎に出立を命じた、併し岡野金右衛門の事に付いても、却々面白い事があるので、何れ後にお話しなす

る事にいたしますが、愈々神崎與五郎は只一人で、小紋の半股引小紋の脚絆紺足袋に切緒の草鞋を穿き、柄袋を掛けたる大小刀を佩み、少々の荷物を振り分けにして肩に掛け、山科を出立いたして東海道の驛々も滞りなく、今日しも丁度遠州濱松の城下へ通り掛つた、折りしもドンドン／＼と城の櫓で打ち出した太鼓の音、是れに足を止めた神崎與五郎、與「ア、是れが有名な濱松城の太鼓であるか、往昔徳川家康公武田勢を對手にして、元龜三年十二月味方ヶ原の合戦破れ、當濱松へ御引上げになつたるを、甲斐の信玄三萬余騎の大軍にて此城下まで取り詰めた時に、酒井左衛門尉忠次が暮六ツの太鼓を打つた、其音色に流石の信玄も城内に大軍ありと思ひ誤り、其儘陣を引いたと云ふ位ひ、今太鼓の鳴るのを見れば丁度午刻と見へる、では一つ仕度をして参らう」と左手を見るとき日の出屋と染めた暖簾に、立場茶屋と書いた行燈が出て居ります、丁度時分時と見へて家も却々客がある様子、是

れへズイツと這入つて来た神崎與五郎「ア、許せよ亭へエ入らつしやいまし、何うぞお上り下さい」與「ウム、晝飯であるから然う上る迄の事は無い、何うか出来合いで宜い故飯を出して貰ひ度い亭「ハイ畏こまりました、貴郎此處へお上り遊ばせ與「イヤ此處で宜い」と椽側に腰を掛けて、荷物を傍わきに差し置き待つて居ります内、亭主は二品斗りの着に、膳立てをして其れへ持つて来た、處か此神崎と云ふ人は至つて品行の正しい人で、酒も飲まず只飯丈けを喰し、其れも濟んで靜かに茶を飲んで居ります。

○濱松驛馬喰ひの丑五郎

處へ表の方よりズカ／＼ツと這入つて来たのは年の頃は四十格好、色の眞黒な、頭の毛は櫻幕みたいに亂して、襦袢一枚に繩の帯を締め、片ツ方が白足袋で片ツ方へ紺足袋を穿き、雲助草鞋を穿いて、大分に酔つて居るさ見へてヒ

ヨロ／＼しながら這入つて来た一人の雲助「雲「オイ／＼番頭さん、一杯飲まして呉んねエ番「オ、丑や、今時分お前が来ては困るぢや無エか、何處の家も今頃は丁度忙がしい時だ、モツと後で来るさ宜い丑「オイ／＼番頭さん、冗談云つちや不可無エ、何時來やうと其リア此方の勝手だ、お前の家は酒や着を賣るのが商賣だらう、錢を出して買ひに来たお客様だ失禮な事を云ふない、雲助の錢だつて一文は一文に通用は出来るんだ、其んなことを云やアがるさ此の入口へ寝て仕舞ふぞ番「オイ／＼其んな事をしつア不可無エ」云つて居るさ此の家亭主「亭「ア、瀧藏、丑が来たんぢや無エか、邪覺にしれエで一杯飲まして遣れ、なア丑、貴様一杯飲んだら行けよ、門口でゴタ／＼するさお客様の邪覺に成るから丑「イヨウ是れリア旦那、お前エさんは商賣が上手だ、然う旦那の様に事を分けて云つて下さりア何も云ふ處は無エが、突然り今時分何故來たんだと劍突を食つちや、丑だつて黙止つちや居られねエ、何うちちりがさう

存じます、オイ番頭さん、氣に障つたら堪忍してお呉れ、ア、何う有難てエ  
ア、良い酒だ、此處の家は酒が良いのに旦那の愛嬌、繁昌する筈だね、ア、宜  
い心持ちだ」と愚圖く云ひながら大きな鉢へ注いで貰つた酒をガブ／＼煽り  
付けて、ヒョイツと片邊を見るさ彼の神崎與五郎、今食事終つて茶を飲んで  
居る、スルとまた其膳の上に少し餘つた肴があつたのを見るさ、無作法な奴ッ  
で丑云ふ奴ッは、其肴を突然り二本の指で挟んで丑、オイ旦那、是れをお呉  
れよ、酒の肴にするんだ、お前エさんは飯を食つて仕舞つたらモウ不用ねん  
だらう、お呉んなせエよ、與、ウム、欲しければ残らす持つて參れ、丑、ありがて  
エ、何うもお武家様は別だれ、氣前エが宜いや、残らす持つて行けエツて、ア  
ハ、い、い、全体旦那は上りか下りかれ、與、拙者は是れから江戸表へ參る、丑、  
やお下りだれ、旦那先きの驛まで馬に乗つてお呉んなせエな、與、ウム……丑、  
馬は何うだれ、安く乗せらア、三里の丁場を二百ばかりで行かふちや無エか、

與、イヤ親切は忝け無いが、まだ疲勞れもいたさぬから、馬の入り用は無い、丑、  
其んなことを云はれエで乗つてお呉んなせエな、二百で高エと思つたら無錢で  
行きませう、私も此街道で顔の知れた馬士だ、アノ野郎は行きの仕事にする  
が、歸エリは何日でも空馬で來ると云はれるさ氣が利かれエ、無錢乗せてもお  
客様を連れて居れば仲間の手前エも鼻が高エ、旦那、乗つてお呉んなせエ、  
萬一無錢でも高エと思つたら私の方から二百出すぜ、ねエ旦那、與、ア、大層酔  
つて居るさ見へる、無禮を働らくと其分には捨て置かんと、丑、オイ／＼旦那、  
無禮なんぞア決して働かれエや、お前さんが馬は厭やだと云ふから厭やなら無  
錢で乗せると云ふんだ、判つてゐるぢや無エか、私ちの馬は奇態だよ、毛が生へ  
て居る上に、足が四本あつてカボ／＼と歩行くよ、與、歩行のは當然へだ、丑、だ  
から乗つてお呉んなせエな、厭やだと云は無エで是非乗つて貰ひ度エ、與、コリ  
ヤ／＼無理なことを云ふナ、拙者は馬は嫌いだ、丑、何だつて、サア勘辨が出來



無エぞ、ヤイ武士、コン畜生、云ふことに事を缺いて馬が嫌いださは何だ、百姓や町人なら馬が嫌いださ云へば、俺れだつて其れは悪ふございましてさお辭儀もするが、武士の癖に馬が嫌いださで済むか、飛んでも無エこさを吐しアがる此の駄武士奴ツサア馬が嫌いださ云つたからにア勘辨ひ出来ぬエ、野郎何うするか見ろツ」云ふより早く、拳を固めてボカリツ神崎の肩の邊りを健かに打つた、奥「汝れ無禮者奴ツ」さビタリ刀の柄に手を掛けるさ、見るより此方は益々猛り立ち、丑「オヤツ何をする、刀の柄へ手を掛けアがつたナ、俺れを斬らうと云ふんだらう、サア斬られ様、此奴ツは面白く成つて来た、道中を瞞着す爲めに鈍刀を帶して来たんだらう、汝の面を見るさ武士ちや無エヤ、旅役者が其儘ちや道中が仕難いと思つて武士の姿に化けて来たんだらう、サア頭巾を取つて挨拶しろ、寛棒奴ツ、只の雲助たア譯が違はア、東海道濱松の宿で、馬喰ひの丑五郎たア俺れのこつた、只然う云つても判るめエが、三年跡に下宿

の立場茶屋で酒を呑み、繋いで置いた馬を引張り出そうとした時に、馬め腹を立ちアがつて俺れの肩に喰ひ付いた、其れから俺れも癪にさわつたから、家へ歸つて馬の股を削いで喰ひ、前の敵討ちをした、其時から馬を喰つたさ云つて馬喰ひの丑五郎と云ふ異名を取つたんだ、お前エ見たいな偽武士に脅かされて御免下せエと詫まる様なんぢや無エヤ、サア斬るなら斬つて呉れ、斬られて赤エ血が出なけりア錢は取ら無エ西瓜野郎てんだ、頭から斬るか尻から斬るか、何方からでも斬つて呉れ、サア斬れ〜ツ、ヤイ物を云は無エか、コン畜生〜と突然り神崎與五郎の胸倉を押へた様子、與五郎も始めの間は不届な奴ツさと思つたが、何しろ思慮深い人で、今大望を抱いて居る身体故、大事の前の小事を考へ直し、僅か人足一人でも斬り捨てれば土地の法に行なはれ、其れが爲めに江戸表へ参ることも遅れ、大石氏に心配を掛けるの道理、詫まつて済むことなれば此處が堪忍の仕處さ、奥「コレ馬士、大きに拙者が悪るかつた、馬が嫌ひ

と云つた段は一言の申譯も無い、何うぞ許して呉れ、斯くの通り両手を仕へて謝罪るから丑、醜体ア見やアがれ、俺れの權幕に驚るいて謝罪るなら堪忍するが、只堪忍は出来無エ、地面へ両手を突いて謝罪れ、ウム、其方の申す通り斯様に大地へ手を突き謝罪るから、何うぞ是れで勘辨をして呉れ、と與五郎教休、大地に手を突き頭を下げた丑「アハ、ハ、醜体ア見やアがれ、カ、アツ」與五郎の横顔の邊りへ痰を吐き掛けた、ウメツと思つたが與五郎は、其儘頭を下げて居る、勝ちほこつたる馬喰ひ丑五郎丑「何うだい見物、見て呉れエ、幾ら武士でも甲らいでも、斯う成つた日にア態ア無エや、此丑五郎に會つちやまるで大ッ千同様だ、ヤイ武士、未だ勘解が出来無エぞ、與「何故勘解が出来無エ、丑「何故出来無エと云つて、只謝罪つた斗りちや後日に證據が無エ、馬は嫌いだと云つたのは、誠に申譯けがございませんと云ふ事を書いて出せ、詫まり證文を出さなけりア勘辨が出来無エ、與「ウム詫證文……、イヤ然らば盟み

に任せ認めて遣はす、と矢立を取り出し與五郎教休、鼻紙を取つてサラ／＼と認ため與「サア詫り證文だ、何うぞ是れで勘辨して呉れ、丑「ウムモウ書きアがつたか、と馬喰ひの丑五郎、其れを取つて熟々見て居りましたが、丑「不可ねエ、與「其れでは氣に入らんか、丑「氣に入らぬも入れぬも、俺れの知ら無エ字ばかり集めアがつて、斯んな物が俺れに判るか、斯リア俺れが手習ひをした後に出来た字だ、斯んなに難かしく書きアがつて、馬鹿にしやアがるナ、俺れの知つてる字で書いて呉れ、與「其方の存じて居る文字と云ふのは、丑「判ら無エ奴ツだナ、ソレいろはにはへさてエ字、與「ア、假名だナ、宜しい承知したと與五郎は、顔色も變へず再びサラ／＼と認めて其れへ差し出したが、馬喰ひの丑五郎其れを取つて見て居る。

○假名書きの證文

丑「ウム巧く書きアがつたナ、一あやまりしようものこと、ウム巧く書いた又一つか、エ、むまはきらひださまふしきふらふは、ヤイ〜コン畜生、むまさは何だ、うまならうまを書け、人を馬鹿にしやアがつて、奥「イヤむまを書いて馬、別段に其方を馬鹿にした譯では無い、丑「ヘン巧く云つてヤアがる、マア其れは宜いさして遣らア、ちう〜おそれいりさふらふ、オヤちう〜たア、ヤイコン畜生、ちう〜たア何だ、奥「其れは其肩に濁りが付いて居るから、其れでちう〜だ、丑「ア、重々か、マア是れも宜いや、是れで勘辨して遣れ、エ、むまくひのうしごらうさま、かんさけよこらう、オヤツコン畜生、俺れが今冷酒を飲んだものだから、燗酒宜からうだつて云やがらア、奥「然うでは無い、神崎與五郎だ、丑「嘘を吐け、神崎與五郎杯たア書いて無エぢやれエか、奥「サアよごらうと書いて與五郎、うしごらうと書いて丑五郎、丑「フ、ン巧く瞞着しアがつた、マア是れで勘辨して遣るから氣を注けて行けよ、峠もあれば川もある

んだ、狼狽た事をして怪我でもするな、命冥加の駄武士だ、醜体ア見やがれ」と云ひながら、再びカツと痰唾を吐き掛けた、與五郎怒るかと思ふさ少しも怒る氣色もなく、盞飯の支拂又は茶代を其れへ出して、奥「ヤツ、大きに手数を掛けて濟なかつた」と、片脇に置いたる振り分けの荷物を肩に掛け、片頬に笑を含んで靜々と東を指して下つて行く、跡見送くつた見物の人々、〇「丑、酷い事をやつたナ、丑「ナアニ當然へよ、那奴は武士の眞似をして居るが、旅役者だ、面ア御覽なせエ、いやにピカ〜光つてやがる、幾らか飲代を打奪つてやらうと思つたが、那奴つア又詰まつても錢を出さ無エ、那んな奴ツに出會しちや仕方がねエや、アノ併し宜い心持ちに成つた、諸證文を買つて、是れから俺れの巾が利くんだ、武士から詰まり證文を取つたさ云やア、斯んな剛氣な事アれエ」さ大威張りで丑五郎は、其儘何處かへ行つて仕舞つた、お話し別れて此方神崎與五郎は、其後道中別にお話しもなく、無事江戸表へ下つた後、時なるかな

元祿十五年十二月十四日、本所松坂町吉良の邸へ四十七士の義黨が討ち入り  
をいたし、隠居上野介を討取り、高輪萬松山泉岳寺へ引取り、亡君の  
靈魂を慰さめしは、全く此の人々の誠忠に固る處、其處で翌十五日四家の大名  
へ各々お預けご相成り、二月四日に至つて皆切腹を仰せ付けられた、然るに藝  
州家の御指揮に依つて銘々の死体は泉岳寺へ送り、只今以つて其名芳ばしく残  
つて居る義士の墓、イヤ何うも其當座と云ふものは、全國到る處此噂さばか  
りて持ち切りと云ふありさま、然るに茲に其頃遠州濱松に宰林堂桂山と云  
ふ手習の先生があつた、處が此人が江戸表新宿に用事があつて新宿へ出て  
参り、逗留をして居る内に例の敵討ちだ、其處で桂山は見た事聞いたことを残  
らず書き止めて濱松へ立歸り、子供衆を集めて桂山とて皆さん、吾が日の本の  
武士と云ふものは、御主人の爲め國の爲めに命を捨つるさ云ふが本分だ、今度  
大石内蔵之助殿を始め四十余人の人が、殿様の御志しを繼いで妻子を捨て、

辛苦の末、終に吉良上野介の首を取つて泉岳寺へ引上げ、お上の御法に照ら  
されて一同腹を切つた、忠臣義士の鑑と云ふは實に此の人々である」さ子供衆  
を集めて話して聞かせて居たのを其親達ちが聞いて、何うか桂山先生より仇  
討の講釋を聞き度いさ云ふので、本陣の水谷重兵衛と云ふ人の發起で宿内  
の有志の人々を集め、此桂山先生を自分の家に案内をして、晝の間は何れも  
多用ですから、夕景から義士の講釋をすることに成つた、所が奇を好むが世の  
中、況して忠臣義士の講釋と云ふので、何れも夕方から本陣へ集まり、さし  
もに廣き本陣も錐を立つる場も無い位、其内章林堂桂山先生は、羽織袴  
を着用いたし高坐へ上りまするさ、各々洩らさぬ様に聞かうと思ひますから  
咳拂ひもいたさずシーンと静まり返つて居る、スルと此時門口から、ハレ  
ケに酔拂つた馬喰ひ五郎丑御免成せよ、評判の講釋があるさ云ふんで  
態々來たんだ、聞かして呉んねえ」怒鳴り込まうとする○「コレ、丑、貴

様が講釋杯を聞いて判るものか、貴様杯は講釋を聞くよりも、何んて間が宜んでせうの踊りでも見て居る丑馬鹿ア云アかれ、判られエ事ア無エ、人間が喋舌る事を人間が聞いて判られエ答ア無エ、俺れに聞かせれエ云ア了簡があるんだ、此の近所へ火を放けるから然う思へ○コレ〜飛んでも無いことを云ふナ〜大きな聲で云ひ争つて居るのを、此方本陣の主人が聞いて其れへ出て参り重ア、丑か、お前も折角聞き度いと思つて来たんだから聞かして遣る、丑や、貴様も聞き度い云ふのなら此方へ通しても遣るが、酔つて居るから又先生の講釋の邪覺をしちや不可れエせ丑エ、邪覺杯は決していたしません、溫和しく聞いて居ますが、何うも此頃逆上て少し耳が遠く成つて居るから、高座の前の方へ遣つて呉んなせエ……、ハイ御免なさいよ、先きへ出るんだから、ア、宜い心持ちだ、トテツ、シヤン〜、○コレ〜講釋を聞きに來て其んな事を云ふ奴ツがあるか丑アハ、ハ、ハ、御免なせエ、ヤイ先生

解る様に確かり頼むぜ」桂山先生驚るいて、是れは何うも甚ひ奴ツが来たナと思つて居る丑東四〜ツ ○何だ、貴様一人が騒々敷いんだ丑黙止つてろ、サア先生やつて呉んねエ、赤穂の浪人が本所松坂町の吉良家へ亂入して、仇討ちをしたと云ふ處をシツカリやつて呉れ、俺れが聞いて居るんだ、誰れだと思ふ馬喰ひの丑五郎だぞ」其内に桂山張扇を取つてポン〜机を叩きながら桂「扱て御一統へ申し入れる、此の度び各々の望みに應じ、淺野内匠頭浪士の面々、元祿十五年十二月十四日、仇討ちの次第を細やかにお話しをいたす、何うか謹しんでお聞きに預かり度い」一言の口上を述べて其れより自分の手控かへを出し桂「されば頃は元祿十五年十二月十四日、櫓の棟木に消へ残る、雪の明りは味方の松明、何づれも一様の黒装束、袖にはうねり山道の合印し、襟には舊き播州赤穂の浪士何の某行年何十何歳、君恩の爲め討死すぞ記したる旗章、各自に得物を押つ取り、中にも堀部安兵衛、大高源吾、武

林唯七は、五貫八百目の掛け矢を取つて、表門には大石内蔵之助良雄を大将とし、裏門には同姓主税良金、後見には小野寺十内、吉田忠左衛門、表裏ひさしく亂入なさんと身構へる内、大石内蔵之助の腕木に掛けたる處の山鹿流の陣太鼓は、三段流れ九打ち、ドン／＼／＼／＼響き渡る、此太鼓の音に裏さ表よりドツさばかりに亂入なし、吾れ一に仇敵吉良上野之介の首級を掲げんとする中にも、一際目立浪士の一人は、槍を小脇に搥り込んで、支關の戸障子を槍の石突きにて突き倒し、奥へ差して乗り込んでくる、此時支關次ぎの間に睡眠して居たるは、之れも上杉家よりの付け人にて、佐分流の槍の達人新貝彌七郎と云へる者、物音に不圖目を覺しバツと臥床を起き上り彌七フム……、偕てこそ秀穂の浪人が亂入いたしたか、宜しイテ吾が槍先きに掛けて呉れんツと、長押しに掛けたる槍追ツ取りバラ／＼ツと駈け出だし彌「ヤアノ、赤穂の瘦せ浪人能く承われ、吾れこそは上杉家よりの付け人にて、新貝彌

七郎と云へる者なり、イテ吾が槍玉に揚げて呉れん、覺悟いたせツと、突き出す槍先きを、心得たりと此方浪士の一人は、同じく槍にてチヤチンツと受け止め、少時の間は双方戦つて居たが、忠義の一心ヤアツと突き出したる槍先きは狙ひ違はず、新貝彌七郎の胸元を物の見事に貫いたり、アツツと一撃血煙り立つて相果てた、此時件の浪士は、天地に響く大音聲浪士「ヤア／＼敵も味方も能く聞き候得、當手一番乗り一番槍を入れたる者は、赤穂の浪士、神崎與五郎教休なりツと聲高らかに呼ばつたり……丑「オツ先生、一寸待つて呉んねエ」と、高座の前に立ち上つた、桂山先生はアツさばかりに驚いて居るさ、聴衆の人々は「オイ丑、手前エは何うしたんだ、これからが面白くなる肝腎な處だ……丑「エツ、肝腎な處でも何んでも介意れエ、オイ先生お前エさん今何んとか云つたナ、吉良上野之介の首を取らんさ槍を提げて飛び込んで行つたのは、神崎何んか云ふ人だ、桂」されば、神崎與五郎教休……丑「エー

ッ、ソ一其奥五郎と云ふ假名で書くさ何んぞ書くだらう桂、妙な事を聞くナ  
然うだ、假名で書けば先づかんざきよごらう丑「エツ、サア大變だッ、ソ一其  
人は全体幾歳位ひだれ年は……桂、また若盛りの方だ、拙者も幸ひに引揚げ  
の時に神崎與五郎殿を見上げたが、實に美男で一才見るさ役者がさ思ふ様な好  
い男だ、年は先づ三十六七かナ丑「エツ、其奴ッア飛んだ事をしてしまつた」  
さッアツと聲を揚げて泣き出した、

○堪忍の徳、悪漢の改心

人の性は元善なり、悪いと思ふことは誰れでも知つて居るが、却々其の時にな  
らないと思ひ止まらないもので、今丑五郎が泣き出したので一座の人々は驚き  
ながら重「コレ〜丑や、何んだつてお前は泣いてるんだ丑「なんで泣つて本  
陣の旦那、マア聞いてお呉んなせエ、丁度去年の三月中旬の事、那處にお在で

なざる日の出屋の旦那の處へ私しが這入つて、酒を買つて飲んだ時に、其處の  
椽臺へ腰を掛けて茶を呑んで居た武士が却々の好い男だ、何う見ても役者が化  
けて東海道を下る奴ッに相違無エと一圖に思ひ込み、是れに因縁を付けたら幾  
金に成るだらうと思つたから、柄の無エ處へ柄をすげて、種んな悪口を云つた  
上肩を打つたり痰を吐き掛けたり、故意に亂暴をして見せるさ、其の武士は刀  
の柄に手を掛けたけれど、此方ア役者と思つてるから、サア斬るなら斬れさ  
嵩に掛つて悪口をするさ、其の人ア何だか少し考へて居たが、遂頭仕舞ひにア  
地面へ手突いて詫言られ、此方の目算はガラリと外れたから、今更に成つて  
眞逆か錢さも云ひ兼ねて、諸證文を書けと云つたら直ぐに書いて出したが難か  
しい字ばかりで俺リア判ら無エ、其れから又私チア假名で書けと云ふと、又素  
直にサラ〜と書直して出した諸證文……モシ章林堂の先生、一寸是れを見て  
お呉んなせエ」懐中から呷煙草入れを出して、其中から取り出した一通の書付

け、煙草の粉を拂ひながら「丑」サア先生、何うか是れを大きな聲で讀み上げて呉んねエ桂、ホ、ウ委細心得た、神崎與五郎殿の詔まり證文とは珍らしい、見せて貰なう……、何々覺一五、勿八分、古布子一枚、一二、勿五分、古袴天、右者當月が流れ月に御座候……、丑「ヤア先生、其奴ツア質の流れ札と間違ッた、これだノ、桂「フム……、丑五郎お前は實に大層な物を持つて居る、是れは全たく淺野派入、神崎與五郎殿の筆に相違ない、丑「エ、そんなら其人が殿様の仇討ちをしたのかい」と詔證文を見詰めて居たが、是れで酔ひも醒めたが大聲を擧げて又々泣き出した、丑「ねエ先生、俺リア實に濟まれエ事をした、然うして見るに其神崎でエ旦那は決して弱いんぢや無エ、吹けば飛ぶ様な馬士でも、一人斬リア下手人に出なけりア成らず、其んな事で此濱松へ足を止めちや居られ無エ、殿様の仇討ちをしようと思ひ込んだ忠義の武士、其れゆへ救けて下さつたに相違ねエ、其れを此方ア知ら無エから弱いのだと思ひ込んで、其與五郎

様の面へ癆を吐き掛けたり、踏んだり蹴たりしたなア今考げへるに誠にも勿体ねエ、ア、是れと云ふのも俺れが悪いばかりぢや無い酒が悪いから那んなことをさせたのだ、是れから其旦那の處へ詔まりに行き度エが、今は其神崎様は何處にお在で成さるか、何うか居所を知つて居るなら教へて下せエ桂「今は生きて居なさらん、當年の二月四日に四十有余人残らず切腹を仰せ付けられて、今は高輪の泉岳寺と云ふ寺にお墓が竝んで居る、丑「エツ、其んなら那の旦那はモウ腹を切つて死んでおしまひ成すつたのか、其れぢや詔まりに行く處が無エ……、ウム、ぢや斯う仕様、今日から俺れは坊主になつて、其高輪の泉岳寺と云ふ寺へ尋ねて行つて、與五郎様のお墓に詔びをしなければ成らねエ、モシ御本陣の日那を始め此處へ今夜來なすつた人は災難だと思つて、何うか私ちが江戸へ行く道中に入用と、坊主に成つて行くのだから皆さんで法衣の勤化をして下せエまし重、エツ講釋を聞き損なつて貴様の法衣の勤化まですりア、斯んな詰



「まら無エ話しは無エ、併し貴様が其の神崎様の忠義に感じて改心をしたと云へば、何ぞかして遣らう」と此處で皆々其相談を始める。桂「ア、丑五郎、此の謄まり證文は失なさん様にして、江戸へ行つたら泉岳寺へ納めなさい。丑「へエ私ちや興五郎様へお返し申してお謄をする心算でござえます。桂「サア返す云つた處で肝腎の受取り人が死んでしまつては仕方がない故、其れはお前から泉岳寺の住持へ譯を云つて預けて置けば、是れに越した事はあるまい。丑「へエ然うですれエ、ぢや然うしませう」と其處で丑五郎は濱松の長久寺と云ふ寺へ行つて、其翌日坊主となり、又宿内の人々も昨日までは悪い奴ツでも改心をすれば又一層不愠が増して、少々づゝの金子を出したのが十兩足らずに成つた、丑五郎は是れを貰つて東へ下り、聞きながら來た高輪の泉岳寺、門を遣入つて丑五郎は泉岳寺の臺所へ來り丑「エ、お頼み申します、私は濱松の者でございますが、神崎與五郎様は何處に居られますか、何うぞ案内をして下さいませ

しと申し込んだので、泉岳寺の番僧も大いに驚ろき、事の様子を尋ねて見ると、丑五郎は少しも隠さず是れまでの事を懺悔したのに付き、泉岳寺の住職王道和尚も大いに感心せられ、自身に神崎與五郎の墓へ案内をして呉れた。丑五郎は是れが神崎與五郎殿の墓と教へられてピタリ其の墓前に坐り、生きたる人に物云ふ如く、去年の事を云つて段々謄言を申し、涙に咽ぶ様子は一通りではございませぬ、其處で濱松宿の本陣水谷重兵衛よりも、豫て泉岳寺役僧へ宛てゝの頼み状もございませぬ故、茲で丑五郎を泉岳寺へ止め置き、義士一同の墓所の掃除をさせる事に致しました、是れに依つて丑五郎の喜ぶ一方ならず、此の時彼の假名書の謄まり證文を泉岳寺の王道和尚に贈る、王道和尚も實に珍らしい物である云ふので、暫らくの間此泉岳寺へ預かつて居りました。が、早くも此の事が藝州家の御耳に入り、藝州侯より強つての御懇望に付いて王道和尚も、他家とは違ひ淺野家の御本家の事故、藝州家へ此謄まり證文を

納めました、是れが方今に於いても此藝州家に残つて、毎年正月松の内はお床へ並べる三幅對、一幅は狩野元信の筆で韓臣の股を瀆る圖、眞中が堪忍と大書した掛物、左り手が此神崎與五郎の詔まり證文、是れを藝州家の寶物として堪忍三幅と残つて居るのでございます、其後彼の馬喰ひの丑五郎は此の泉岳寺に於いて天命を終つたさ云ふ、惡に強きは善にも強しと云ふのは、此の丑五郎杯の事を云ふのでございます、今一人此義士の内で、前お約の通り岡野金右衛門の一節を口述いたします、抑も此赤穂義士四十七人は、何れ優り劣りもありません内に、溫和で忠、強勇で忠と云ふ俱合で、種々其人の長所を異にして居たが、中に最も頑固で、流石に人を使ふ事の上手な大石も餘程困つた人さ云ふは、此岡野金右衛門兼助でございます、併し此の人が非常なる手柄を現はして、仇討本懐を容易ならしめたさ云ふ一節、此の岡野金右衛門は元の名を九十郎と云つて居りましたが、父の金右衛門が病死をいたして其跡を續いたの

で、此父金右衛門と云ふ人も又頗ぶる忠義な人で、彼の五十一名の中に連判した後に病死をした、然るに此岡野金右衛門は父の葬送を濟ました後、名跡を續いて人々より少し遅れて東海道を下りましたが、固より金子に不自由の無い旅ですから、日ならず江戸表へ着し、早速兩國橋を渡り、本所松坂町、是れが吉良の邸がと親み廻しながら通川門の向へ側を見るとき、萬屋と白く染め出した紺暖簾が風にヒラ／＼と飄めいて居る、是れは彼の神崎與五郎が吉良の邸の様子を窺がふ爲め、此處へ酒屋を出したので、岡野金右衛門其前に立つて内裡を覗いて見るとき、以前の武士姿は何處へやら、町人に成り濟ました與五郎の姿が見へる。

○岡野金右衛門包季の逸傳

縞の綿入れに一本獨鈷の帯を締め、算盤を持つて何が顔りに勘定をして居りま

すき、堀部安兵衛が八百屋妻で野菜の荷を門口に置き、醬油樽へ腰をおろして片足揚げた矢大臣、一升櫛の角から美味そうに酒を飲みながら世間話していたして居る、御殿様御在世の時に百石を頂戴してお徒士頭で眞面目腐つた萱野和助は當時酒屋の御用聞き、汚ない紺の着物に同じ前掛けをめぐめて、大きな盥で徳利を洗つて居る、一同の同志が何れも以前に變つた姿をして居るから、其心根を思ひ遣つて此方岡野金右衛門、涙をホロリと零してズイツと其れへ遣つて参り金「ア、神崎氏、堀部氏、萱野氏……」而「ヤア是れはくく九十郎殿、能くマア尋ねて来た、併し何しろ下では不可ん、向へは吉良殿の邸だ、早く二階へくく」云ふので岡野金右衛門二階へ上つて来るさ、同志の人々は入り換り立ち換り出て参り、絶へて久しき挨拶をする金「エ、父金右衛門病氣をいたした故、拙者父の名跡を續いて金右衛門と改名に及んだが、拙者此の程より少々氣鬱症に罹り、大石氏の仰せに従がひ、當地に於いて病氣保養をいたしたら

宜からうと云ふ事故、本日漸やく當地へ出向きました、依つて當分何れも方の御厄介に相成る、是れは内藏之助殿よりの御書面でござる」さ差し出した手紙を人々が披見いたし皆「ヤレ、御尊父の御病死はお氣の毒だが併し是れも命數故、今更歎いても歸らぬ事、何時時を得て吉良邸へ討入りの際、其許が其お考へにて御尊父と二人前の功名をいたせば其れで宜敷い、就いて其許が當家に滞在するは決して介意ないが、併し茲に一つ困る事のあるのは、同志の人々が漸やく此頃に入り込み掛けた吉良の邸、武士上りをひどく思む家風であるから、其許が其武士姿では何うも不都合、依つて一つ其許田舎者の風体にも身扮し、私しの在方から尋ねて来た甥だと世間へ披露をすれば疑ぐる者もあるまいから、早速姿を變へなければ成らぬ」云ふので、是れより皆なで勤めて、町髪結を呼び、與五郎が指圖をして厚い髪を蒲く剃り込み、小髷を結ばせ、膚の着物に小倉の帯をめぐめさせた處は、誰れが見ても淺野内匠頭様御番頭

を勤めた人の悴さば、口を利くと武士上りが出て不可ないから、成る可く口を利かない様に云ひ付けた。金右衛門は鏡に向つて自分の姿を見て、金「ア、吾れながら淺猿しい姿に成つた、これ云ふのも皆向ふの吉良上野之介の成す業一と、帳場に座つて吉良の邸を打ち眺め、無念の涙を溢して居る、何んしろ頑固の事云つたら、仇討ちが遅れると云つて、親父と二人で大石を殺して仕舞をうさした位ひだつたが、是れは大石が敵を欺む計略さ知れて二人ながら赤面をした事がある、山科で大石の側に居つても、間者の顔を折々カツと睨み付けたり何かして大石をヒヤ／＼させたから、大石も是れには閉口して、其處で病氣保養と云ふ名で江戸に差遣はし、萬屋の店に座る事に成つたが、吉良の邸を見るに腹が立つと見へて、獨り言斗りを云つて居るから、同志の人々にも毎度注意をされ、又暫らく経つと其れを忘れて又吾れ知らず見詰めて居るさ云ふ様な譯であつた、然るに此の萬屋の店は東向きで、朝日當りが宜

いから吉良の案中の乳母、或は子守り杯が毎日の様に此の戸外へ出て来て遊んで居る、スルミ酒の賣場を働らいて居る神崎與五郎は誠に意氣に碎けた人ですから、此の乳母、子守りに榎輪戯むれ、イヤモウ萬屋の店は毎朝キヤア／＼ツと笑ひさめいて居る、其の毎朝來ては遊んで居る多くの女子供の中で、一人目立つて美しく、口敷を餘り利かない下女には少し品格がある様だ、與五郎が目を注げれば、又萱野和助も然う思つて居る一人の女がある、或日の事であつた萱野和助が、此の女に向つて世間話しの序でに和「モシお前さんは何かエ吉良様の御家中の娘さんがエ」聞き出した、スルト女は女「イエ、妾は下女でございます、和「へエお女中さんかい、併し何方へ御奉公をして居なされる、女「ハイアノ糟谷平馬様に勤めて居るのでございます、和「ハア然うですか、シテアノ糟谷様のお役は何を勤めてお在で、すれ女「アノお奥御用人で……、和「ハア奥御用人さ云へば随分宜い役だれ、定めし御内福で在つしやいませ

うね女「ハイ然うでございます、随分御内福に見へます、和「併し姐さん、お前さんはお幾歳、女「ハイ十七に成りますので、和「お名は女「アノおつやと申します、和「ハ、アおつやさん、お優しい名だ、名は天から授かるもの、艶々しいから然う云ふ名が付いたのだらう、シテ宿は艶「アノ北割下水でございます、和「ヘエー北割下水云へば此處から遠くでも無いが、シテお父様はお商人かね、艶「イエー、公儀の御家人でございます、和「ウム、成る程何うも人は育ちにあるものだ、ア、して大勢来て居る女中達には、只ガヤ／＼取り止めも無い事を喋舌つて居るが、お前さんに限つては口數も利かす、來る時歸る時の禮儀は確かに違ふ人だと思つて居たが、扱ては御家人の御娘御か、イヤ種々委しく聞く様だが、お父さんのお勤めは何を成さる、艶「ハイ、表お産所を勤めます、和「ウム然うですか、其れは／＼」と始めて聞いて、萱野和助も、其後は遠慮して餘り輕率な冗談口は利かぬ様になつた、處が此のお艶と云ふ女が、岡野金

右衛門が帳場に坐つて居るさ、其帳場の邊りをウロ／＼歩行き廻つて居るが、金右衛門が用事で他行でもして、神崎與五郎が帳場に坐つて居るさ、何うやら手持無沙汰の様に、コソ／＼と出て行く様子、才物だから早くも是れに目を注げた萱野和助、和「ハ、ア是リアアの娘は少し金右衛門にボツと來て居る様だ、と思つたから、或る一日同志の面々が此の萬屋の二階に密談をした時に、和助より此のお艶の一件を話し出すさ、同志の人々は何しろ奥用人の女中とあれば何かに付けて手掛りにも成らう、是れは金右衛門と懇ろにさせたら宜からうと云ふ事に成つたので、早速金右衛門に此の話をするさ、イヤ金右衛門驚ろくまいこそか、金「エツ、拙者其儀は甚だ迷惑、何しに下女端女と不義をする事が出来様か、實に武士の耻辱此の上も無い事だ、と取つても付かぬ挨拶、是れを聞いて同志の中の粹人大高源吾が、源「イヤ貴殿は只一口に然う云ふが、岡野氏、能く考へて見さつしや、是れにお在での堀部安兵衛殿は八百屋に成り

三村氏は薪割り、又は夜蕎麥賣り、酒屋の亭主杯に身を扮すも、皆忠義の心を  
 持てばこそ此の賤しき業を好んでいたして居るのでござらぬか、然るに今日  
 貴殿にお勤めをする事杯は、マア一番楽な方では無いが、金「イヤ假令へ楽な事  
 にもせよ、正道な事で身を落せさ云ふお言葉なら、何の様な苦しみをいたすも  
 決して厭ひはせぬが、不義さ云ふ其名前からして忌やだ、併し大石殿から不義  
 をしても宜敷いと云ふお言葉があれば、決して厭ひはいたさぬけれど、其れが  
 無い内は何うしても聞き入れる譯には不可ぬ」サア一同の者は殆ど困つて仕舞  
 った。

○水清ければ魚すまます

水清ければ魚すまます、或は屏風は曲られば立たぬと云つて、同志の人々も此  
 岡野金右衛門が餘り固すぎ、融通が利かないのを齒齧ゆく思つて居るさ、折々

此江戸から山科の大石の許へ、秘密に手紙の遣り取りをする、處で今度も少し  
 用事があつて大石の處へ手紙を遣はす序に、其の端しの方へ岡野金右衛門の事  
 を書き込んで遣るさ、程なく内蔵之助良雄から其返事があつた、是れに依つて  
 又々大勢集まつて大石の返事は如何と、其の書面を披いて見ると、金右衛門  
 に對しては彼のお罵言へる女の事は決して介意ぬ、拙者とても當時は斯く心  
 にも無い放蕩三昧を成し、現在義理ある母には不實を竝べ、可愛い妻子を離  
 縁をいたし、實に五臟六腑も張り切れる様な思ひをして居るが、是れも上杉家  
 又吉良家に油斷をさせん計略にして、謂はゞ大功は細瑾を省すで、心にも無  
 い事でも忍ばねば成らぬと細々と認ためてあるから、金右衛門も遂に我を折つ  
 て金「是れではモハヤ仕方が無い、イヤ委細承知いたした、ア、世に在る時で  
 ござるなら、不義杯を申し掛け無禮なごころのある時は、斬り捨てにもいたすべ  
 きものを、主家の不祥が身の不祥、斯くも零落れるものか」と歎息をする奴ッ

を、同志の人々が寄つて集つて種々云ひなぐさめ、扱て其翌日に成るゝ相變らず金右衛門帳場へ坐つて居る、處へ例のお艶が遊びに来て、段々口を利く様に成り遂には側へ寄つて「艶アノ金さん、煙草を一服貸して頂戴な」杯云ふが、金右衛門の方ではまだ本當に打ち解けない、金「イヤ私の煙草は強くて、女のお口には適はないからお止し成さい」と宛然で木で鼻を括つた様な挨拶をするから、お艶は赤い顔をして跡へ身を引いて仕舞ふ、賣場に居た萱野和助が横目で此の有様を見て獨り氣を揉んで居る、其内に又同志が此の萬屋の二階へ集合をした時に和助が、おつやの一件は是れ〜と同志の人々に委細を話し和「何しる宜い俱合に先方から持ち掛けて来るぞ、此方で劍もホロの挨拶をして終ふから、何うも纏まりが付きそうにも成いが、是れば明日にも那の女が來たら、與五郎、傳助、又拙者も家を出て仕舞ふが宜いと思ふが何うだらう」と相談をするぞ、皆ウム其れが宜からう、和「其處で岡野氏、其許は皆んなが居

なく成つた處で、那のお艶に、二階に面白い繪があるから見に来なさいと云つて、引立て、御覽なさい、誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ、喜こんで二階へ上るだらうから、其處で手早く話を付けて終つたら宜からう、金「其リア何うも拙者には……」スルと側から大高源吾「源」成る程其れが宜い、……ア、岡野氏、金右衛門殿、シツカリ遣なさい、萬一此の事を遣り損なふぞ、罰を申し付けるから然う思はつしやい」と脅かし半分に勧められ、金右衛門の迷惑云はん方も無い、斯くして其翌日帳場格千の中へ坐る時には、初陣に乗り出した様な氣がして、ヒク〜と身体を震はせて居る、其内に四ツ少し過ぎに成ると、例の通りおつやが金右衛門の顔を見て、ニコ〜と笑を含んで遊びに來た、是れを見て此方神崎與五郎、與「ソラ岡野氏、今日萬一其許が遣り損なつては、屹度大石殿の方へ然う云つて遣つて、相當の罰を申し付けるぞ云ふから、巧く遣り遂げれば不可ませんが、コレ〜何を其んな妙な顔をして居らるゝのだ、貴殿も男な

「今少し勇氣をお出しなさい、此の寒いのに大汗をかいてサ、ソレ来た〜」と種々云つて聞かせて後「ア、金さん、聞きア錢の相場が變つた云ふが此方が損をしてもお客に損をさせても成らないから、一寸行つて聞いて來ます故、店を何うぞお頼み申します」と一番掛けに「ア、金さん、今日私達の同國者が來てルと飯炊をして居る倉橋傳助が傳、エ、金さん、今日私達の同國者が來て逢ひ度い云ふので、丁度今手が空いて居るから、一寸行つて参りまして宜敷うございませうか、金右衛門の方も糞度胸を定めた金、ア、行つておいで」と云はれて傳助臺所の方から出て行く、跡へ残つたのが萱野和助と金さん、徳利を集めて來るから、お頼み申します」と云ひ捨てた儘、造作なく出て行つてしまつた、扱て跡に残つたのが岡野金右衛門の金藏と、お醫二人の差し向ひ一世の浮沈は此の時にありと思つた金右衛門「金、ア、モシおつやさん二階に面白い繪があるから、一緒に行つて御覽なさい」と例もお世辭の無い金右衛門が

今日は始めて優しい言葉を掛けて呉れたので、おつやも大層喜んで、引かると儘に二階へ上つたが遠くて近きは男女の道、途頭おつやと金右衛門は好い交情に成つてしまつた、肝腎の本人、金右衛門よりは、他人が大喜びで、中にも大高源吾、堀部安兵衛杯と云ふ世間馴れた連中が、「今度逢つたら斯う云ふ事を探ねて見る、斯う云ふ事を聞いて置け」と教へられるが儘に金右衛門、種んな事をおつやに尋ねながら、暫らく馴染んで居る内に、或る一日金右衛門の金藏は、少しく打ち惚れておつやに向ひ「金、扱ておつやさん、私は今度お前に別れなければならぬ事が出來た、イヤ其れにも少し工風がある云ふのは素私の親父は京都禁裏の御大工頭梁の下頭梁で、私は前髪の時から身体が弱く大工職は到底も覚へられまい云ふので親の情けで繪圖引きにして呉れたから、其れで私は大言の様だが先づ京都で指を折られる繪圖引きに成りはしたが大きに道樂をしたが爲め今斯うして叔父の處に預けられて居る、所が今度親父



が關白殿から大した御普請を請負ひ、其處でその御普請の内にお茶の湯の坐敷も出来る、其の坐敷も何うか國持大名にも無い様な茶坐敷を拵らへて呉れさ云ふ大變儲かる仕事だが、私が居なければ其の繪圖が出来無い、其れが私の幸ひに成つて今歸つて来いさ云ふ迎へ手紙が京都の親父の處から来て居る、併し私は斯うやつて江戸に馴れて見ると小さい京都へは何うしても歸り度く無い、此方でお前と世帯を持たうと思ふけれども、何しろ繪圖の工風をしなければ成らないと云ふは、外の坐敷と違つて是れが茶の湯の坐敷だ、私が茶の湯を知つて居ると云ふ譯でも無いから、萬一間違つた物を拵らへて遣つて、名前を汚す様な事があつては成らない、何うか其手本に何か見て圖を引き度いと思ふので、就いてお前に相談をするんだが、お前の御主人の糟谷様……、イヤ御主人の糟谷様が勤めて居られる吉良様の御隠居は、千家のお茶を能く遊ばして、上様のお茶のお直しを申し上げる位ひで、お邸にはお茶席が三ツもある位ひだ

そうだが、何うだらう、何のお茶席でも宜い内々私に見せて呉れることは出来まいか、然うするさお前にも別れずさ、私も親父には大分儲けさせる事が出来るのだ、何ういふものだらう」さ持ち掛けて来た。

○吉良邸内繪圖面取り

是れを聞いてお艶は娘心にホツと嘆息をつき、其挨拶に困じて居るから金一不可ないかエ……、ア、其れは本當に残念だ、ア其れぢやおつやさん、お前の旦那様は奥御用人で在つしやるから、萬一や吉良様の御普請をした時の繪圖を預かつて居る様な噂を聞いた事はないか、艶「ハイ、其れは金さん、旦那様がお預かり成すつて在つしやいます金、ナニ糟谷様が持つて居るか、艶「ハイ、妾は此年で三年御奉公をして居りました、三度お虫干に出逢つて居りますが、其お虫干の時に何時も大きな紙へ赤い線や何かを引いてあるのを旦那様がお出

し成すつて、是れは誠に詰らん物の様に見へるが、御當家の繩張りだ、願ふ事では無いが萬一お邸が焼けてもした時に、是れが無ければ見積りに困る、又先年潰れた淺野の浪人の手にでも渡るさ害に成るものだと被仰つたのを聞いて居ります、金「ウム、其の繪圖を藏つてある處をお前知つて居るか、豈知つて居りますとも、お土藏に入つて居ります、金「ウム然うか、何とおつやさん、お前人知れず其繪圖を取り出して来て、内々で私に貸して呉れる事は出来まいか、然うなれば其繪圖を私の方で繪圖を拵らへ、其れを都へ持たして遣れば私は永く江戸に居られるが何うだらうれエ」と云はれて固より二十歳に足らぬ生娘の初戀、別れとも無い迷いから、心もいさゞ暗まされ、其夜密かに土藏へ忍び込んで、遂に此の吉良邸の繪圖を盗み出し、金右衛門にソツと手渡しをする、金右衛門は是れを得て大いに喜び、直ぐ此の萬屋の二階へ同志を集め、中央へ例の圖面を取り出して見せると、一同の人々は驚喜して躍り上り、然々其

繪圖を調べて見ると、彼の上杉家の家老千坂兵部が、心を碎いた屋敷の繩張り、玄關、長屋、侍部屋、手に手を盡した堅固な繩張り、殊に上野介の寢所は床下に右と左りへ何ぞの事のあつた時に、根板を剥がして抜けて出る間道が二ツ開いてある、又、陥穴が二ヶ所出来ております、是れは何うしても攻め込んで行けば落ちなければ成らぬ様になつて居て、平日は是れを確かり塞いで置き、スワ事出来と云ふ時に、此處を斯う取つて斯うやつて置けば、不案内の者は必らず其穴へ落ち、下は石を積み上げてあるから、其石が崩れ落ちて死んで仕舞ふと云ふ仕掛け、其れに袋壁と云ふ新工風がある、是れは床の間の壁の中に、疊が二枚敷ける様に成つて、是れに大きな穴が明いてある、平日は床の間だから其前に軸が掛つてあるが、スワと云つたら其の軸を蹴れて穴へ這入り、軸を素の通り下して置けば必らず見付からぬと云ふ様な俱合に成つて居る、總て斯くの如く人に心注かん事ばかりを巧みに考へてあるから、一同の人々も

皆「ア、おに恐ろしい千坂兵部の智謀、併し岡野氏出来した、金右衛門殿天晴れの手柄をいたされた、吾々は斯く永く江戸に居ても、遅れて来た御邊の爲めに斯る大功を立てられ、實に面目次第も無い、何しろ味方の萬歳である」と是れから此の圖面を残らず寫し取り、眞物をおつやの手に渡した、おつやは再び土藏へ忍んで元置いてあつた處へ入れたから、粕谷平馬も斯かる事があらうかは全く夢にも知らなかつた。扱て同志の人々は山科の大石の處へ委細の注進をする、内藏之助是れを承わつて天に喜び地に悦び、是れさへあれば大願成就、總ての仕度を整へて東海道を東下り、種々事を運んでいよく何時か幾日には吉良邸に討ち入らうと運んで来た時に、前以つて大石は一同の人に向つて内「彼の粕谷の女中お艶と云ふものは、吾々の爲めには大恩人、萬一彼の圖面が吾々の手に入らざる時には、必らず黨中の者が四人なり五人なり、彼の陥穴へ落ちて其難を遣れる事は出来ない、何うか討入りの時は逃ぐる者には

僅を負はせず、戦ひ中でも女子供は成る丈け情けを加へて逃げさせて遣れ」と申し渡し、尙岡野金右衛門には秘かに大石が何か云ひ付けた、スルと岡野金右衛門は元祿十五年十二月十三日の夜、即ち討入りの前夜、秘かにお艶を萬屋の二階へ呼んで金「扱ておつやさん、私は一度何うしても京都へ歸らなければならん事に成つたが、何しろ親父と私とは氣象が合はないから、親父は歸らないのを却つて喜んで居るけれども、親類一同が私の肩を持つて呉れて、僅かの放蕩がつのつたために、長男を家督にさせないさ云ふ事は無いさ苦情が起り、遂に親父も云ひ負けて、其れでは呼び寄せ様と云ふので、モウ路金も充分に呉れ、何でも彼でも此方へ歸れと云つて迎へが来たのだ、斯う成つて見るに私も歸らんければ成らん、併しお前に別れるのが誠に心掛りであるが、何とおつやさん、明夜私と一緒に京都へ逃げて呉れまいか、然うすれば通し駕籠でお前を連れて行く、路金は畢山に有るから決して心配は無い、又何んな事があつて

も、私に不實をしてお前を見捨てる様な事はしないから、何と何うだらう、洗  
げて呉れるか」誠しやかに情を含んで話し込むと、おつやは暫らく小首を傾  
けて居たが、鬨、ハイ、黙止つて家を出ましたら、御主人も両親も無ぞ心配を成  
さいませうが、併し粕谷の旦那様が妾し共に時々御諭し成さるには、女は三従  
と云ふて幼ない時には父母に従がひ、嫁しては良夫に従がひ、老いては子に従  
へど云ふ、一度でも肌を許した男は、生涯の良夫、其の外に男は無い筈で、萬  
一其外に良夫を持てば、是れ女の道に背いて居るのだと云ふ事を度々伺がつて  
居ります、シテ見れば妾しの良夫と定めるは貴郎より外には決してございませ  
ん、其の良夫たる貴郎が仰せ故、是非に及びません其れでは御一緒に立ち退き  
ませう、今「ウム然うか、其れでは何うか然うして呉れ、ぢや明日は間違ひなく  
御主人へはお前の實家へ二三日宿下りをさか何さか云つて、家へ歸つて待つて  
居てお呉れ、明晩丑の刻に成れば必らず駕籠昇きの大丈夫なのを揃へてお前の

處へ出掛け、外から石を投げるから其れを合圖に出て来る様、切めて明晩の  
内に此の江戸丈けを立つて置かう」さ茲で相談が出来るとお艶は、其翌日午  
刻少し過ぎた時分、粕谷の御新造の前に出て参り、艶「エ、御新造様に少々御願  
ひがございます、先き程妾し方の隣家の者が参つて呉れまして、母が大變な  
癩で、親父は男で介抱が出来ませんから、今夜丈け妾しに其介抱に歸つて來  
て呉れる様にご申し、迎へに來て呉れました故、妾しは明朝早く歸つて参りま  
すから、何うかお暇が願はれませうか」云ふと、元來此のお艶と云ふ娘は、  
平素餘り宿下りをした事が無い、久し振りだから御新造も、快く承知をして、  
新「ア、然うかエ、其れは無ぞ心配だらう、然う云ふ事なら早く歸つて看病を  
してお進げ、旦那様がお歸りに成つたら、妾しより其の譯を話して置く」さ茲  
で許されておつやは、割下水の自分の家へ、久し振りに立歸つて來た。

○少女貞操を全くして自害

處が此方お艶の両親は、不意の事にて不審に思ひ、両親「おつやコレ、お前は今日は何うしたのだ艶、ハイ、今夜お邸にはお泊り客が大分にあつてお宅が狭いから、今晚は實家へ行つて泊つて来る様にござ斯う被仰ひましたので、幸ひに久し振りで歸つて参りました両「ウム然うかい、其れは宜いことをした」お親は何の心も付かず、夕飯も親子が睦まじく膳を並べて濟ませ、宵の内は四方山の話をして居たが、サアモウ寢やうさ成るさお艶「アノ阿母さん、妾しは玄關の方へ臥まして貰ひます」と秘かに着換への衣服を一二枚風呂敷包みにして持つて歸つたやつを枕許に置き、寢ないさ可訝しいから床の中へ這入りはいたしたものと、却々寢入る處の騒ぎぢや無い、目をパツチリ開いて豫て合圖の樂のあるのを、今か〜さ相待つて居る。其内早や亥刻も最前打つたが來

ない、モウ子刻の鐘が耳許に響いても薩張り合圖がありませんから、お艶は心中に「艶、ハテ何うしたんだらう、眞逆か今に成つてアノ金さんが、妾しを欺したと云ふ譯でも無からうけれども、ハテ氣に掛る事だ」その心配をして居る内に夜は次第に更け渡り、外には朝よりの雪にて、シト〜シト〜降り積る音ばかり、イトも淋しく聞へたる此の時、不意にドーン、ドーン、ドーン、近所の者は太鼓の音と共に、ガラ〜〜ツと激しき物音がいたしたから、近所の者は是れに夢を破られ、驚ろいて起き上り、雪を冒して屋根へ上つた様子。○「アノ源兵衛さん、見へますかエ火の手は……」源「ア、平兵衛さん、寒ふがすナ、何アに些さも見へ無エが、屋根へ上る物音が手に取る様に聞へる平「併し火事ぢや無エのか知ら源「イヤ今の物音は火事にア違ひ無いが、アツ段々物音は甚く成る様だ、何だか行つて見様」さ其れから下へ降りて若い者は、物音を便りに飛び出して行つたが、暫らく経つと歸つて来て、息をヒイ〜はづませな

がら平「マア酷い目に逢つた。黒扮装の武士が四五人今向ふで長エ槍を持つて通す事はなら無エ、先年潰れた赤穂の浪人が、吉良殿の邸へ討ち入つたんだと云ふから、其奴ツア面白いと思つて其處を駆け抜け様さしたら、萬一強つて通れば命は無いぞと脅かしやがつて、驚ろいて逃げ歸つて来た。〇「エツ然うか、其れぢや火事ぢや無くつて吉良様と赤穂浪人の戦ひだ、此方は介意つた事ア無エが、嗚、浪人衆は骨折りだらう……、オイ時に金兵衛さん、お隣のお娘子は吉良様の邸へ御奉公をして居るが、御両親の身に成つては嗚心配だらう」近處の人は打ち揃つて見舞に来るとお隣の両親は「父、ハイ有難う存じます、實は只今も嬉し涙に暮れて居りました、娘は此宵に限つて勤め先きの柏谷様から、日の暮れ方暇を頂いて宅へ歸つて来て居りますので、思はず此の難義を逃れました、是れも平生から信心のお高庇だらうと皆んな喜んで居ります。〇「ア、然うですか、其れは何うもお芽出度う存じます」さ尙も種々話して居る

内に夜が明ける。朝に成るまじくバラ／＼賑やかな位ひの人通り。甲「オイ大嫌だ、吉良様が遂頭首を討たれて仕舞つたさよ。乙「ウーム、其れぢや愈々赤穂の浪人衆は本望を達したかれ。甲「ウーム、モウスツカリ片附けてしまつたから行つても宜いが、ア、吉良様の通用門の前に、新店で萬屋と云ふ酒屋があつたらう。乙「オ、有つた、此の十日程前にも朝早く那處の前を通り掛り、内へ飛び込んで二人が一杯飲んで矢大臣を極め込んだ事が有るだらう。甲「オ、然うだつたナ、處がアノ家が赤穂の浪人仲間だつたさよ、だからアノ何時も酒を斗つて呉れた男なんかア矢ッ張り赤穂の浪人だ。乙「ヤア其奴ツア嬉しいナ、然う／＼色の白い溫和しい若い衆が帳場格子の中に坐つて居たが、他に何時も酒を斗つて呉れた人があつたナ。甲「其れがサ皆んな赤穂の浪人で、まだ他に安い蕎麥屋も居るし、俺れの家へ来る八百屋も義黨の中に這入つて居たぜ、何んでも今本望を遂げ勢揃へをして、是れから高輪泉岳寺へ引揚げるさ。いふ處だ。乙「

ヘエーッ然うか、ア、其れで那んな御苦勞をして居られたのか、皆んな計略  
 だつたのだらう、俺リア涙が零れる、何しろマア行つて見る……行けくッ」  
 さ云ふのでバラくくッさ飛び出す有様、お艶は是れを聞いてハッさ胸を轟  
 ろかせ、艶「昨夜那れほど約束をしたのに何の音沙汰も無く、酒屋の萬屋の人は  
 皆赤穂浪人ださ云ふが、萬一しや金さんは……」と思ひ立つては矢も楯も堪  
 らない、秘さ裏口から抜け出して急ぎ足に本所松坂町から高輪へ行くに、何  
 うしても通らんければ行けないさ云ふ場所を聞いて先き廻りをして待つて居る  
 處へ義士の人々はザクくくッッッさ雪を踏んで意氣揚々、威風四邊を振  
 ふの勢ひにて引揚げて来た、負傷者は六人あつたが討死は一人も無い、中にも  
 岡野金右衛門は幸ひにして一ヶ所の手傷も負はず、勇氣凜々として引揚げて來  
 る、思はず見合す顔と顔、艶「オヤッ貴郎は金さん……」と聲を掛けたが、金右  
 衛門は同志の人の手前もあるから永く言葉を交す事が出来無い、手早く懐中

を探つて取り出した肌附の金子と呼子の笛一つ、バツさ其處へ投げ出して金  
 か、おつや殿、是れが別れた、其方も身体を大切に……」と此の一言が千萬無  
 量、袖を拂つてスタくくッッさ行き過ぎてしまつた、お艶は何しろ生娘の事  
 だから再び言葉も發する事が出来ない、只後ろ姿を見送つて、涙ながらに立  
 ち歸つて参り、彼の肌付の金子と呼子の笛を深く秘して、何う成る事かさ案じ  
 て居るさ、四十七士の人々は四家の御大名へ御預けと成り、翌年二月、悉く  
 切腹を仰せ付けられ、岡野金右衛門も生害したと聞いておつやは只一人、艶  
 しが豫て良夫と頼んだ人は、世にも稀れな忠臣義士、妾しも女冥利に叶つた事  
 故、何うか貞女の名を残し度いが、存命で居れば親の云ひ付けで、又心に濟  
 まない良夫を持たねば成らぬ、是れでは寧そ命を捨て、良夫の跡を追はん」  
 さ思つたから、今年十八の春を迎へた斗りで先立つ不孝の詫手紙、墨の色さへ  
 にじみ勝ちに委しく譯けを書き認ため、是れを遺書として、剃刀を以つて咽喉を

貫ぬき、悲壯なる最後を遂げてしまつた、是れに依つて両親の歎きは一方ならず、其内に彼の遺書を披いて讀み下す。今度の一條が委しく認めてあるから、扱ては然うかど驚ろいて居るさ、早や此の事を聞き傳へて近所の人を寄り集まつて参り、皆「ア、貴郎の處のお娘御は、天晴れの義士をお婿様に成すつて感心いたしました、其の上其の人に操を立て度いさ云つて、共にお果てなさるさ云ふは、實に健氣な事でございます」と誠心を以つて慰さめ、其晩は大勢集まつて佛の守りをして遣つた、人が死んで徹夜をするのをつやと云ふのは、此のおつやよりぞ始まりけるさ何とも、本にも書いてはありませんが、是れは一場の戲言に過ぎない、扱て年は十八歳の小娘だが、實に宜い心掛けの女で、又彼の金右衛門がおつやに興へし肌付の金子、呼子の笛は永く此家の家宝として残つて居たと云ふ、四十七士が第一に必要とする圖面を取り得て、仇討の成功したのは又偏へに此の可憐なる少女の力、興かつて大なるものでございませ

う、扱て義士の銘々傳は此の位ひにして、是れより話頭一轉、赤穂義士の首領大石良雄が山科閑所中の苦節に移ることに仕ります。

○薩摩隼人の典型村上喜劍

落花の雪に踏み迷ふ、片野の春の櫻狩り、紅葉の錦着て歸る、嵐の山の秋のくれ、京都四條の繩手をば、數多の藝妓、舞妓、幣間に取り巻かれ、ア、云ひながら向ふより來掛かる四人連れの内、淺黄羽二重の紋服に、綺麗びやかなる大小刀を帶し、茶献上の帯もだらしなき三人、後の一人は其供と見へて黒木綿の紋服に、頂戴ものさ見へる羽織を着したる、是れぞ大石内蔵之助、原惣右衛門、猿橋右門の三人に、後に續くが寺坂吉右衛門、中にも大石内蔵之助は醉眼、朦朧として足許さへも踏々、跟々、妻楊枝を咬へて自作の端歌を唄ひながら歩行いて來る、





の御心中が承わり度い内「ハ、ア、何んでござるナ、此の大石の心中を問ひ度い……、ハテナ、心中さは何んでござるか喜、ウム、其許は定めて御主君の御無念をばらす御志ざしてござらう、拙者も薩摩軍人の村上喜劍、其許の一言を待たず仇討の助勢がつかまつり度いのでござる」さ大變な事を云ひ出した、所もあらうに京都四條繩手、往來しげき巷街に、殊更藝妓、舞妓の數多く引連れたる時であるから、是れには流石の内藏之助も弱つてしまつた、殊に對手が薩摩軍人の頑固者内「アハツアハ……、其許の云はれる事は、何が何やら拙者一寸も相判りません、殊に此處は往來でござるから、御話しがあれば向ふへ行つて何でも承わる事にいたしませう……、ア、コリヤ女共參れ、ソレ此の御方を御案内いたせよ女「ハイ……」さ云ひながら前後から、村上喜劍の袖袂を捉へた藝妓、舞妓四五人、口々に皆「サア旦那様此方へ、何うぞ御越し遊ばしませ」ガツと睨み付けながら袂を振り拂つた村上喜劍「喜」エツ五月蠅いッ、

隨骸に綺麗を飾つた白化物奴、武士の魂たる腰の物に錆が付くわい、退げく、汚らばしい、薩州の武士は女は嫌ひだッ内「アハツアハ……、ア、女共、村上氏は、女は嫌いだぞ仰せられる、退げく……イヤ村上氏、其の様な頑固な事を云はれずして、其れでは拙者が御案内をいたします、サア何うぞお感し下さい」さ内藏之助は口の内に何やら小歌を唄ひながら、村上喜劍と共に其他の人々十人斗り、ドヤ／＼と這入つて來た祇園一力の支關、女共は心得て奥の大廣間に案内するさ、大石は秘かに目配ばせをするさ、原惣右衛門、惣「ア、皆の者、此の村上氏さやらが御大盡に何か御用がある様子、拙者共は向ふの座敷でお先きへ始め様、サア猿橋殿、向ふでソツと一騒ぎいたそう、ア、御両所御免ッ」さ氣を利かし女共を引連れ、原惣右衛門、猿橋右門の兩人は坐を外してしまつた、後見送つて内藏之助、大小刀も其處へ投げ出した儘、前なる盃を取つて内「ア、何うも村上氏、非常に失禮をいたす、サア兎に角

村上先生、一つお上り成さい喜、エツ、拙者は酒は嫌いだ内「ハ、アお酒が  
お嫌ひ、マア然う云はれずさ、此の盃は拙者好みで態々申し付けて拵らへさ  
せた物でござる、此の盃の中を御覽下さい、ウイーツ、一つ喧嘩口論つゝ  
しむ事、一つ下に置くべからず、一つおさへ申す間敷事、但し女中はくるしからず、サ  
エ、一つしたむべからず、一つすけ申す間敷事、但し女中はくるしからず、サ  
ア如何でござる、然う野暮くさい事を仰せられず……喜、ヤア黙止れツ、其の  
様な汚らしい事聞くと耳の汚れたツ、拙者は酒が飲み度くつて参つたのでは  
無い、サア大石内藏之助承らう、御所存は如何でござる内「ゴ、御所存さ  
はナ……何事でござる喜、エイツ仇討をする所存があるか無いか、其れを聞け  
ば宜いのだ内「ハ、ハ、ハ、何事かと思へば……イヤまだ其許はお若い、  
成る程拙者も是れで武士の端くれ、主の仇討ちもせれば成るまいか、一時は  
種々考へて見たが、イヤ村上氏、素々拙者主人が場所柄をもわきまへ

ず、刀を抜いて斬り付ける杯と云ふのが、此方が悪いのだ、又仇討ちは天下の  
法度、仇討杯をいたすよりは、何時迄も生き永らへて、亡君の追善供養をいた  
すのが役目、イヤ家来の役目であらうと思ひ直した、殊に斯く憂さを拂ふ玉帯  
のお酒、其許も左様な頑固な事を仰せられず廊で飲む酒は又格別の味がいたす  
一献いかゞでござる村上先生「さ早や膝も崩るゝ斗りのしだらなさ、見る見  
る面体グワツと亦みを帯びて、前額に青筋を立てたる村上喜剣、シリ、膝を進  
めて喜、ヤア黙止れツ大石、其リア其方眞實で申すさか、コリヤ其方は主  
君の御厚恩を忘却いたしたか、君辱かしめられるれば臣死すさ云ふ事を知らぬ  
かつ内「永い勤めに短か夜の、鐘も數へて暁を、待つ時あれば永き夜の、鶏の  
音恨む床の中は、又一層でござるで、アハツアハ……、ア、酔つたく、村  
上氏御免下され喜、ヤツ今斯く性根の腐つた其方は、素何役を勤めて居つた  
のだ内「其れは今更事新らしく……、城代家老で千五百石でござる喜、迂

奴才家臣の最上席を勤むる身でありながら、此の醜体は何事だツ、世に云ふ汝こそ祿盗人、其方の主君内匠頭殿は草葉の蔭で嘸ぞ御嘆きであらう、ユリヤ内蔵之助、此上は薩摩軍人の村上喜剣が、不忠不義の武士、イヤ祿盗人の威敗をいたして遣はす、覺悟をしろツと云ふより早く、榮螺の如き餓拳を固め力に任せてボカーリツ撲り付けた、不意を打たれて内蔵之助、コロリツと横に打つ倒れながら内ア、痛い、是れは何うも亂暴千萬……併し其許のお手は痛みはいたさぬか喜エツ貴様の性根は何處にあるツと云ツと立ち上り右の足を揚げてバツと蹴上げた内ア、是れは如何にも痛い、御國の風かは知らざれど、餘り手荒い亂暴……喜何を吐く大武士奴ツ、畜生は是れを喰へツとさ片邊に有り合した蜻の足を、自分の足の指に挟んでグイツと内蔵之助の前に突き出した、俯向いたなり内蔵之助は、ツツと首を上げ手を伸して内ア、手を出して足を頂く蜻着さは結構々々、さらば頂戴いたす、ウム……、ア、美味々々ツ

さ、云つた、彼の忠臣蔵の劇場で演ずる七段目の茶屋場で、斧九太夫が大星由良之助に蜻の足を箸に挟んで差し出すは、此處の處である、併し劇場と講談とは大きに其の趣きが異なつて居ります、餘事を申して恐れ入ります内ア、醜つた々々、村上氏失禮御免ツとさ、ゴロリ横に成つて眼を閉じた様子喜ア、云をう様なき畜生武士、已れの如き不道不義の奴ツとは知らず、三日四日も此の京都に足を止めたは誠に残念、言葉かはすも汚らばしい、是れを置土産ださ云ひながら内蔵之助の面体臨んでカアツと痰唾を吐き掛け、疊を蹴立て、バク……ツ、村上喜剣は此の一方樓を飛び出して仕舞つた、此方大石内蔵之助はグルリ寝返りをいたして早やグー……ツと高軒、表面は正に寝入つて居るが、心中の苦悶轉々として内ア、村上氏、其許の仰せは辱けない、是れに依つて拙者も本望を遂げるこゝが出来、御厚意の段は死すとも忘れはいたさぬとさ心中両手を合して伏し拜んだが、嗚呼天人を誠むるに先づ艱難を以てす

さか、思ひ遺るだに憐れの次第でございます。

○懺悔自ら盡す泉岳寺墓碑

悟りなげ直ぐあらためよ己が非を、懺悔は勇のはじめなりけり、抑も此村上喜剣さは何者であるか云ふに、薩摩國山川郷の郷士にして、遠く其先祖を尋ねれば元弘の昔し大塔宮護長親王に仕へし村上彦四郎義光の末葉、村上長雄義唯一子にして、生れ付いて大力無双、殊に剣道は人並勝れて出来る人であつたが、或る時碁打ちの遺恨より對手の若武士を二人まで美事に斬つて落し、普通ならば其罪に依つて村上の家名も斷絶、御國拂ひも仰せせられ可きの處、島津侯特別の思召しに依り、先祖は村上彦四郎から代々打ち續い産家柄、殊に其罪を憎んで其人を憎くまず、喜剣に暫時の暇を取らせ、國々を廻り人情風俗を取り調べさせ、又忠臣節婦を尋ねて良き土産を携さへて歸

らせよと云ふ仰せ、茲に於いて父長雄は大いに喜び、早速立ち歸つて喜剣に此の事を傳へるさ、村上喜剣も主家の御厚恩を感じ、父より錢別として呉れたる關の孫六の太刀を帶し、今日しも出立をせん云ふ門途に父長雄は長併し是れより其方が諸國を漫遊する内、未だ若年の事故、萬一武士道に欠けたる事をいたしたならば直ちに切腹をいたせ、又辱しめを受け殿様の御名を汚す様な事あらば、其の場を去らす切腹いたして相果てよと云ふ訓戒した、喜ハツ仰せの趣き畏こまりました、決して武士道に背くことはいたしませんと言葉を誓つて薩州山川の郷を出立いたし、其れより九州を歴遊して中國に渡り、備前岡山の旅館で赤穂城明渡し、淺野家斷絶、就いては大石内蔵之助が山科閑居の事を聞き、豫てよりの人物、性行を能く知つたる岡山藩の人々より、委しく大石内蔵之助が性情を尋ね、是れは何うしても主君の仇討ちをする人だと思つたものですから、急ぎ山科に來り三度まで内蔵之助を訪問たが

何時來ても不在さばかり。何うして居るのであらうと聞いて見ると、伏見の撞木町、京の祇園或は島原、杯で遊び戯れて居るさ。いふ事を承はり、半信半疑で親しく内蔵之助が目下の有様を見たので、ブン／＼ツと怒り出したのは無理は無い、斯くして村上喜剣は此の京都の地を憤怒の情に駆られながら出立し、江戸に下つて本所松坂町なる吉良の邸を眺め、道を轉じて出羽奥州地を巡遊し、到る處で勇士豪傑、或は孝子貞婦の物語りに心耳を澄ませ、再び江戸に引返して来たのが元禄十六年四月中旬、縁に見ゆる梢には、春の情けを残すかと思はれ、澗谷鶯舌の聲老いて、初音ゆかしき子規の、聲さへ聞ゆる此處は品川の海岸、近き一軒の茶店、來掛つたるは彼の村上喜剣、其處の床几に腰を掛けて「喜、ア、許せよ、女、オ、在つしやいまし、サア何うぞお茶を一つ喜、ウム」と喜剣は暗れ渡す空に、遠く安房、上總の山々を遙かに見渡しながら、今茶を呑んで居るさ。向ふの方より揃ひの着物で五十人斗り、何や

ら高聲に唄ひながら、ドン／＼／＼と歩つて來て、ワイ／＼と云ひつゝ、此處を通り過ぎて行く、續いて數多の町人、百姓は、ゾロ／＼と此處を通つて行く様子に、不圖眼を注いだ村上喜剣「喜、ア、女中、今日は又非常な人通りであるが、此の向ふにでも何かあるのか」聞き出しますと女中は何の氣も注がず「女、ハ、イ、那は大抵此の向ふの泉岳寺へ御墓参りにおいでに成りますので、喜、ハ、ア、泉岳寺へ……併し今此處で見て居れば五六十人も揃ひの着物を着して居た様子だか、墓参りに揃ひの着物と云ふのは、何だか可訝いでは無いか、シテ何者の墓参をいたす、女、ハ、エ、ア、貴郎様は未だ御存じありませんか、播州赤穂淺野様の御浪人が四十七士、昨年、極月の十四日の夜、本所松坂町の吉良様のお邸へ斬り込んで、お主人の仇討を成され、其後今年の二月に皆切腹をしてお果て成された其お墓へ御参りをするのでございます、喜、エツ何ぞ申す淺野の浪人が四十七人、主君の仇討ちをした、シテ其四十七人の中に、大石内蔵之助

さ云ふ御方は居なかつたか女「ハイ、其の大石何んぞか云ふお方が大將でござ  
いましたそうで喜「フム……ッ」さ俄かに變る喜劍の顔色、見る／＼内に赤  
くなり蒼くなり、坐にも堪へない様子、ズイツと立ち上つた村上喜劍、紙入れ  
より幾千かの鳥目を取り出して其れへ差し置き喜「ア、女中、茶代は是れへ置  
くぞ女「ハイ有難うございます、アノお過刺を……喜「過刺は要らぬ、併し其  
泉岳寺さ云ふのは何處だ女「ア、貴郎も御參詣遊ばしますか、其れは何うも御  
奇特なことでございます、アノ此處から右の方へ行つて突き當つた處が泉岳寺  
でございます喜「ウム然うか」さ何か思ひ込んだる村上喜劍、其儘泉岳寺へ  
來て見るさ、早速支關へ掛つて案内を乞ひ、住職「王堂和尚に對面して今  
迄での成り行きを委しく話し、金子五百正を紙に包んで御布施さして差し出  
し、番僧に案内されて墓所へ參つて見るさ、成る程墓碑臺尙ほ新たなれど、參  
詣人は其跡を絶たず、香煙縷々としてそゞろ人生の無常を感じしむ有様、喜劍

は大石内藏之助の墓前に平伏して何か頼りに生きたる人に對する如く、口の中  
でケド／＼云つて居りましたが、此の日は其儘泉岳寺を出て去つて品川宿ま  
で參り、此處に宿を取つて其翌日より毎日の様に泉岳寺へ來て墓參りをして居  
たが、遂に其れより七日目雨の中をも厭はず墓前に參詣し、大石の碑の前に於  
いて切腹をして相果てた、嗚呼風蕭々として易水寒し、壯士一度び去つて復歸  
らず、其れこそ是れさば變れども、何れ劣らぬ潔士と潔士、義は金銀より重く命  
は鴻毛の輕きに比す、義士を慕ふて死を急ぎたる薩摩軍人の木領は是れでござ  
います、其夜喜劍が墓所より出て來るのが、餘り遅い故に王道和尚、小僧に  
提灯を点させて來て見るさ、誘ふ嵐に櫻花果敢なく散りし後でございますか  
ら、今は奈何さもいたし方なく、早速其筋へ届けて檢視を受け、同じく其遺  
骸を此の寺内へ葬むつたさ云ふ、薩摩武士の氣魂は是れに依つて遺憾なく殘さ  
れたのでございます、話頭一轉此方大石内藏之助良雄は斯かる苦辛慘難なる場

所を幾度か潜つた、處が此村上喜劍と大石とが、祇園一方での一件を襖の隙間から覗いて居たのが彼の猿橋右門、心の中に「右ハア成る程、是れでは大石は眞實、仇討の心底は無い、其れ位ひの氣概がある者であれば、假令へ何ぞ云つてゞも、村上喜劍に相當な仕返しの方法がありそうなものだ、モウ是れで愈々上杉家の千坂殿へ其趣きを知らせて遣らう」と思つたから、猿橋右門は其翌日大石の前へ出て参り、自分の心中を打ち明けて大石に話し、其處で手紙を認めて千坂兵部の處へ送り付けた、其れから暫らくして江戸表より時節到来、斯様々の譯にて吉良邸の繪圖面も手に入つた云つて来たものですから内「モウ一刻も猶豫すべきにあらず」と心得、猿橋には二三ヶ月江戸表で遊んで来るから云ひ残し、愈々大石良雄が東下りの仕度に取り掛つた。

○機は漸く熟す東下り

愈々此二三日内に山科を出立せんとする時、主税良金は父内蔵之助の處へ出て参り、良、扱て父上、私しは是れまで二度迄御殿様の御供をして江戸へ往復いたしました、此の度びは冥途の道中も同じ事にて、また中仙道の山家の景氣を見ませんから、苦しからずば木曾道中を一足お先きへ江戸へ参り度う存じます、内蔵之助も今度は何れにしても吾子を殺しに連れて行く様だと思つたから、快く承知をいたし内、ワム、其れなれば其方は拙者より二日も早く中仙道を、出立したら宜からう、其れに一人旅びは誠に心淋しいもの故、仲好しの矢頭右衛門七を連れて行くが宜い、併し其れでも拙者の方が一日や二日は早く江戸へ着するであらうから、板橋迄で迎へを出す事に致そう、主、ハツ、誠に有難く存じます、其れでは父上御免を蒙ります、主税良金は、多年住み馴れし山科を後に、矢頭右衛門七を召し連れて是れより中仙道を志し、七重八重咲く九重の花の都を後にして、名にし大津の驛路へ、草津夕がき打ち越へて、



守山差してやす川を、渡る心のやすからず、吾身をてらす鏡山、むさ木原家にやすらひて、越川越へて高宮を、誰がやしろさばしられども、鳥居本より伏し拜み、番場、醒ヶ井、柏原、廢物語りの美濃近江さ追々申仙道へ這入つて参り、次第に江戸表を差して歩つて参る、此方大石内藏之助は、前以つて近衛公へ手を廻して、近衛殿の味内池田久左衛門と成つて、道中の先觸を頂き、同勢三十二人、泊りを重ね日を重ねて、漸やく江戸へ到着に及び、同志の人々は馬喰町、或は小傳馬喰町に別れて宿を取らせ、自分は石町に派宅を構へて申る中村勘助方へ宿を定め、暫らくは只アラクと暮して居たが、此の間こそ大石内藏之助良雄が、苦辛惨膽の間であつて、誠に大雨來らんとして風樓に滿つの愴があつた、然るに愈々元祿十五年十二月七日より七日の間、泉岳寺に於いて、亡君の大法會を催した、此の時に一同は黒羽二重揃の紋付に、揃ひの上下、花やかなる大小刀を帶し、皆雪駄穿き、髪を茶釜に結つて阿

伽桶に華を入れ、水晶の珠數を手にかけて四十七士の同勢、ゾロ／＼打ち連れ立ち、是れ見よがしに佛參をしたから、心ある人々は是れを見て皆ア、實に大石内藏之助と云ふ者は見違へた、甚だ名間を好む無道十萬の横着者であつた」と云つて嘲けり笑つた云ふ、是れを噂さに聞いて上杉の千坂兵部も片腹いたく心得て居たが、是れこそ人目をあざむく大石が計略にして、燕雀何んぞ大鵬の志しを知らん、スルま今日しも元祿十五年十二月十三日の夜、御法事の終つた時に泉所寺の奥坐敷で最後の評定を開き、愈々其翌十四日子刻に本所松坂町なる吉良邸へ討ち入り、卯刻に引上げと云ふ手筈を定めた、處か其十三日の朝早く、大石内藏之助良雄は矢田五郎左衛門を召し連れ、石町なる中村勘助の宅を立ち出で、麻布南部坂來て三萬石、淺野遠江守の御通用門から這入つて参り、其御屋敷内に小鉢ながら風流のお住居に出來て居る、亡君淺野内匠頭御臺所、當時御後室瑤泉院様へ一世のお別れを申し上ぐる考

へ、内蔵之助は是れへ出て参つて御土産として金子千両持参した。其當時取次ぎに出たのが戸田の局と云つて、義黨の内小野寺十内秀和の妹に當る人だ。内「ア、是れは〜戸田殿、何時もお變りなく……戸「オ、御城代にも相變らず御勇健にて、誠にお芽出度う存じます、貴郡様が此の度び當江戸表へ御下向に相成りましたので、御臺様も大層お喜び遊ばし、今日は化やかなる噂さがあるか、明日は花々しい評判があるかと、毎日の様に仰せ暮らされて居ります併し能くこそお出向き下さいました内「ア、左様か、イヤ御法事もいよく、今日で終りを告げ、三四日内には山科の里へ再び立ち歸らんければ相成らぬ、其れ故此の後拙者又々當江戸表へ罷り出るは、餘程時日も有之ござ、存じた故、今日は其御暇乞ひかた〜、参上をいたしました、宜敷く御披露を願ひ度うござる戸「ヘエ、其れでは貴郡様は又山科へ御立歸りに相成るのでございませうか内「何を左様に不思議そうな御顔を成さる、御法事済みの上はモウ江戸に

居ても無益の事、歸宅いたすの外はござらぬ」是れを聞いて戸田の局は、見えず〜顔色蒼ざめて、心の中に戸「ア、思ひの外なる御城代の御心中、萬一此の事を申し上げたら嘸や御臺様が御力を落される事であらう」と思つたが、據るなく、彼の持参したる千両の金千を、腰元を呼んで瑤泉院様御次きの間に運ばせ戸「其れでは御城代様、何うか暫らく御待ち下さいまし、今御執次ぎを申し上げます」と挨拶をして奥へ這入つて行く、後に内蔵之助は五郎左衛門に持たせて参つた風呂に包みを開き、拜領小袖と見へて丸に違ひ鷹の羽の御紋付、肩衣は自分の定紋の二ツ巴と着換へに及ぶ、心の中に内蔵之助内「モウ今日で此肩衣は付け納め、不用の服に成るであらう」と断念めても其處は人情で、流石鐵石心の内蔵之助も、ホロリとこぼす一零、處へ再び其處へ戸田局が立ち出で、戸「ア、御城代様、御臺様がお逢ひに相成ります、サア御案内仕つりませう内「何分御願ひ申す」と大石は、戸田局に連れられて御臺所瑤泉

院の御居間へ出て来て見ると、今年廿七歳、顔に紅彩を装をひ遊ばすも、天然備はる美人、殊に愁を含んで居られる様子は、筑波山の秋景色に、季花の雨を盛りたる風情に見へた、内藏之助は其處へ平身低頭に及ぶ、瑠オ、内藏之助が、久々であるのう、其方も壯健で芽出度の内、ハ、ツ、麗はしき御尊顔を拜し、大慶至極に存じ奉つります、既に御法事も本日で終り成り、三四日中には私しは再び山科へ歸宅仕つります、又江戸表へ罷り出するは暫くの間のあること故本日は御詞敵きに相成り、御暇乞ひに罷り出でました、然るに速かに御目通り仰せ付けられ、如何斗りかありがたく御禮を申し上げます、是れを聞かれて瑠泉院様御顔にサツと憂ひの雲掛り、ホツと嘆息をおつき遊ばして、瑠内藏之助、其方へ目通り申し付ける上は、申し附く可き事又尋ね度い事が数々あるが、今の一言では到底も思ひも寄らぬ事である……ア、今迄で頼みし事も春の雪消へて仕舞ふたか、長雄、其れで武士の行ひに叶つて居る

ものか、其れを聞き度い、去年三月十四日、殿中松の御廊下に於いて吾君の御短氣、妾も自害をして御殿様の御跡を慕はんかと思ひしが、イヤ、國表に其方が存命の上は、必らず吾が君の怨恨を晴らし、妾の心を慰めて呉れるであろうと、竊に風聞を窺がつて居ると、赤穂の城は受取りの大名に明け渡して家臣の銘々は退散に及んだと云ふ、ハテ合点の行かぬ事と一度は迷つて見たが、イヤ、常々文武の道にくらからぬ内藏之助、五常の道を知らぬ答は無く況して忠孝の二つは其方の深く護つて居る處故、是れには深き思慮あつての事ならむと今日が日まで惜しからぬ命を生き永らへて居る妾、其れに其方は山科とやらへ浪宅を構へ、段々亂れたる放蕩も、敵に油断をさせる策であらうと妾は心にも止めずに居つた、然るに今年六月中旬の事、其方の母が涙片手に妾が方へ尋ね来り、伴の放蕩を見るに忍びず、意見をしたのが氣に叶はず家出を勧めし故、今日斯く罷り出し次第、實に不孝者不忠者、人非人の内藏之助

さ云ふ老母の怒り、其時妾はイヤノ成さぬ仲の其方へ不實不孝を働らくも内蔵之助が深き企み存つての事であらう、必らず其雄を恨むなと昨日までも愚痴の度々に妾が勵まし執成し居つた位にて、此度其方が東下向はヤレ〜謀斗なつての事であらう、今日は花々しい評判が立つか、明日は敵討ちの噂があるか、起きるより寝るまで其の事斗りが楽しみで居つた處、今日からは其方が目見へを申し込んだる故、飛び立つ程の嬉しさに、今逢つて見れば再び山科へ立ち歸るこの事、コレ其雄、其れで武士道に叶つた行ひか、其れで其方の務めは盡したのか、さハラ〜ツさ思はず熱涙止めも敢へず、内蔵之助の顔を恨めしそうに眺められる。

○麻布南部坂雪の別れ

此の時大石内蔵之助は、怪訝な顔をして内へエ是れば何うも恐れ入つたる

お問ひにございます、イヤ昔しの事を考へますれば、去年三月十八日當江戶表よりの早打が赤穂の城へ乗込み來り、意外にも松の間の及傷、吾君御切腹、又引續いて御家斷絶の知らせ、其上吉良侯へは何の御告めもなしと承わつた時の残念さ、是れは當城を枕に敵を引受け、斬り死にをいたそうと決し、軍用金配當の時に集まりました者八百三十六人、此の者共へ來る四月一日には籠城手配りをいたすに依つて、先祖代々の墓所へも詣で納め、妻子に水盃の別れをなし、決死を覚悟して入城いたせよと申し渡して其日は退散、扱て愈々四月一日に集まり來りし人数を調べて見れば二百八十四人に減じましてございませ、何を申すも三百人に不足の人数にては、籠城手配り思ひも寄らず、なまじ色めいて後の笑ひを招かんよりは、コリア殉死をいたして冥途の御奉公こそ然るべしと、又此の趣きを一統の者に諭し、其の日は四月七日さ取り極めたのでございませ、斯くして愈々四月七日の當日さ相成り、集まり來りし人数を取調

べて見れば減りも減つたり僅か五十一人、ア、君の爲めに命を抛つ忠臣は江戸國表両方にて僅か百人に足らぬものか、併し今日これへ集まりし人数の中には、二心を抱くものはモウ無からう、此の忠臣に空しく腹を切らせるは誠に少量なる考へ、是れは一先づ當城を城受取りの大名衆へ御渡し申し、一度は臆病と世人の嘲笑を受けても、隙を視つて吉良侯を討ち奉つらんと決心をいたし、一同へも其の赴き申し聞かして遂に赤穂城を御渡し申し、涙ながらに赤穂を立つて私しは山科へ浪宅を構へ、浮世の濁りに交わつて見まするさ、扱て人の心は段々歳年を取るに従がひ日を重ぬるに因り、次第に變つて参りますもので、熟々考へて見ますれば、吾君御切腹、御家斷絶は東照神君の御遺し遊ばされたる、百ヶ條の御掟目にある赴き、其れを恨むところもなし、言は吾君の御短氣をお恨み申すまでの事、又敵討ちは天下の制禁にして、其れを犯す者は法破り故、其法も破らず忠義の立つ工風が何さかありそうなものさ考

へましたが、是れは何うしても私しは七十の年を重ね、ば相成らぬ、其れこそ御主君へ忠義と云ふものであらう、何んさなれば吉良殿は私しよりは二十一歳の高齡にして、私しが七十歳まで長命いたせば上野介殿は必らず御病死を遊ばされるであらう、吉良殿の御病死をしかと見届けし其後、私しも命數盡きて相果てますれば、取りも直さず敵討をいたしたのも同じ事、斯くさへいたせば法も破らず義も立たうと漸やくの事に心注ぎ、其れよりは酒を用ひ遊里へ入り込み、罪の無い女童と戯れて長命をいたす工風を凝らし居るに、私しが其心を知らずして母や愚妻は目先き忠義の意見だて、是れ等が傍らに居りましては、私の命も縮まりまする故、遂に家出をいたさせましたる次第、然るに今日斯くお目通りをいたし、只今の仰せを伺がつて見まするさ、何うやら私しの考へが違ふ様な御言葉、然らば何れ山科へ立ち歸り、拙者が只今の妻さも能くく相談をいたし、一工風仕つるでございませう、と殆ど狂人に近き其言葉

に、諸泉院殿はグラツと急き立てられ、諸コレ内蔵之助、イヤサ良雄ツ、良ハイツ何か御用でございまするか、諸コレ良雄、其方は以前の太石ではヨモあるまい、本心は天覽さ入り換つたか、今更云ふは愚痴なれど、吾君江戸表にお在での時は、雨の降る日や風の夜に、今此處に内蔵が居つたなれば、歌の附合ひ又は話し相手に成り呉れる故、此の退屈はせまじきものをさ、風の日雪の降る夜毎に噂の山るのは其方斗り、折々、御國表より内蔵之助の書面が云へば、急いで是れへさ御取り遊ばし、只其方の手跡を見て喜こび給ひ、愈々江戸表御立ちの時は、此の江戸の者に別れるは左程には思はれど、早く本國へ立ち歸り、内蔵之助に逢ふのが楽しみぢやさ仰せられ、御出立の時の御元氣は、まだ妾の目の先きに殘つて居る、其の後アノ大變のあつた時も、妾や大學殿へは只一言の御遺言も無く、其れに引換へ其方へは、御紀念物の御短冊や御短刀、並びに一言の仰せを御殘しあつたさ云ふこと、死ぬる最期の際までも、左

程お鼻負下されし吉が君の御恩を忘れる不忠者、其の方はヨモ人ではあるまい人の皮着た畜生武士、能く其心でオメく、今日妾へ對面を願ひ出でたナ、見るも却々汚ららしい、其處立ちませいッ」と云ふ仰せ、五萬三千石の奥方には、是れが思ひ切つた罵詈雑言、聞く大石は心中に、熱涙胸にあふる、斗り内ア、其恨みは無理ならず、併し十五日の曉には、善惡とも御注進を申し上げれば相成らぬ其折りこそ今の御怒りのお涙は、御喜こびのお涙に變るであらうが、只だ一夜の事なれど、假りにも明かせぬ今一兩日の「大事」さ辛くも笑ひにまざらせて内ア、私しが御前に居りましては、御慰さみにも相成らざる様御見受けいたし、追々御不興を増します斗り、是れにてお暇をいただきます、諸「モウ此世では其方には逢はぬぞよ内」其の御一言こそ虫の知らする仰せ如何にも現世のお顔の見納めでござる」さ口には言はれど大石が、心に泣いて表面には涙も見せぬ大丈夫の決心、御前を下つて元の御休息處へ下つて来る、

月田 局は大石の後から従いて来たが、月「御城代様、貴郎は實に御心が變つて仕舞はれましたではございませんか、内「イヤモウ戸田殿、御後室の御話して拙者針の、庭に坐つた如く、實に御前を立ち兼ねましてござる、月「ハイ、併し貴郎様は左様なお心持ちにお成り遊ばしましたか、日頃忠義の、アノ神崎與五郎様杯は如何遊ばしましたか、内「イヤアノ神崎は誠に伶俐者でござるぞ、此の間拙者一寸面會いたしましたが、此の節は或る處へ酒店を出し、次第に繁昌をいたしたる様子にて、刀を差して窮屈なことをいたして居るよりは、今の身の上、心安いさ云ふて非常に喜び居りました、實に彼れば才物でござる、月「へエ、アノ酒屋を……、シテ堀部の御養子安兵衛様は、内「彼れは武士より外に向かぬ男で、是れにも此の間、對面をいたしたが、イヤモウ配當の金子も遣ひ無くして、胡蘿蔔、牛房を擔いで八百屋に落ぶれて居ります、月「左様でございませるか、一匹の馬がくるへば千匹の馬が狂ふさやら、併し妾しの兄の

小野寺十内の居ります處を御存じではございませんか、内「ア、知つて居ります、小野寺氏は當時江州大津の驛に住居をいたされて居らるゝ御様子でござる、月「左様でございませるか、されど二君に仕へいたしますまいナ、内「其れは褒めてお遣り成さい、十内も當時兩刀を捨て、月「エツ、兩刀を捨て、何をいたして居ります、内「イヤモウ那の男も一酷者で、是れも早や配當の金子を遣ひ果たし、見る影も無い渡世をいたして居る、月「へエ、何に成つて居ります、内「紙屑買ひをいたして細々暮しを立て、居られる様子でござる、月「其れではモウ此方へ尋ねて参りはいたしますまい、内「モウ参りますまい、十内は那れで却々の見得者でござる、様子が宜敷しければ其れを見せに参るであらうが、那の零落れ様では身に耻じて、戸田殿もモウ兄妹の對面は出来ませぬ、併し人間の一生は水にたゞよう根無し草と同じ事、何う成り行くものか、人の死なぬ内は其者へ善惡の折紙は付けられぬものでござる、併し拙者の母親は御當家に御厄

介に相成つて居りますか戸「左様でございます。いつぞや御目に掛つた時に  
貴郎様の事を不忠不孝と被仰つて居られました内、ハア左様でございますか。イヤ  
女子と小人は養ひ難し。誠に頑固な事を申しますから、家出をさせたのでござ  
る。御序の節何うぞ宜敷く御傳言を願ふ、左様ならば戸田殿」大石は、矢田  
五郎左郎門を連れて降り積むを踏みしめて、麻布南部坂を立ち戻る。心の裡  
や如何ならむ、是れぞ最期の御目通りと、思へば胸は湧き立つ斗り、見返り勝  
ちに引取つて行く。

○寺坂吉右衛門信清の注進

跡には瑠泉院と大石の老母と戸田局、三人打ち寄つて内藏之助の事を悪しさま  
に罵しつて居たが、其十四日大事の故内匠頭様の命日でございますから、夫  
れ、佛事の事に暇無く、彼れ是れする内に早や日は西山に沈んで夜に入り、

五ツ半時に銘々御寢所へ引取つたが、其内次第に夜は更けまさり、チン／＼  
／＼と四ツの御時計が鳴る、冷光院殿の御位牌の前に供へてあつた御  
燈明が、俄かにパツと光りを放ち、庭に植へたる山吹のまだ固き蕾が何時し  
か雪中に開ひたのも不思議のいたり、此時戸田局は何うしても寝入る事が  
出来ない、宜なるかな血肉を別けたる小野寺十内が、主君の敵と雪を踏み、槍  
押つ取つて吉良侯の、表門より亂入に及び、命を的に奮戦突激、降り積む  
雪に時ならぬ、落花の色を染めなせる眞最中故、眠る事の出来ないのも又無  
理は無い、此方大石の母親も何となく總身苦しく胸躍つて寝る事が出来ない、  
苦悶の中に一夜を明かした十五日の朝、早くも起き出でた戸田局「御老母様  
お早やうございます。老」お早やうございます、併し昨晩は戸田様、妾しは一睡  
もいたさぬ間に夜が明けました戸「オヤ御老母様、貴女も御寢みには成りませ  
んか、妾しも昨晩は變な心持ちがして、遂に夜を明しました。老」左様でござい



ますか、併し貴女も妾しも別段寝られぬ様な物は戴かず、宵に頂戴したお茶が  
お濃茶なら寝られぬかも知れませぬが、お薄でございましたから左様なことも  
無い筈だと思ひます、何うしたのでございませう戸「へエ貴女も申し妾し迄、  
不思議な事がありますものでございませうねエ」と話し最中に一人の腰元バラバ  
ラと駆け来り、腰ア、戸田様へ申し上げます、只今お玄關先きへ寺坂吉右衛  
門が参り、戸田殿へ御目に掛つて申し上げ度い次第ありと、此の寒いのに汗だ  
ら、何か容易ならぬ事と心得ます、お逢ひ遊ばしますか戸「エッ、寺坂吉  
右衛門、ハテ合点の行かぬ、イヤ併し逢ひさへすれば様子が判りませう」と急  
ぎ玄關へ出て来て見ると、成る程足輕寺坂吉右衛門、雪中素足に草鞋穿き  
で、顔色火の如く、汗はダラ、顔も何も濡れたる如くに見受けられる戸「オ  
、寺坂、見れば餘程急ぎ込んだ様子であるが、何うかしたのであるか吉「オ、  
是れは戸田様、委細は此の御書面に認めてございませう故、宜敷く御披露を願

ひ奉ります、又御城代様より只今私しを以つて御注進の次第は、昨年赤穂を退  
城の際仇討ちの臍を固め、此の大事は假令へ骨肉同胞の間柄なりと雖も、  
決して他言はいたすまいと云ふ契約を結び、御城代は都の片邊り山科へ御閉居  
に相成り、放蕩三昧に身を持ち崩し、吉良邸へ油断をさせ、愈々時來つて昨  
夜九ツの鐘を合圖に松坂町吉良の邸へ五十一人の内四人を除き四十七人の者表  
御門には内藏之助様二十二人を率ひ、裏御門は主税殿總大將として二十三人  
表裏等しく亂入に及び、芽出度く上野介殿御首級を頂戴し、黨中に負傷は  
あれども淺傷にして、深傷は無く、一同今朝未明高輪萬松山泉岳寺に引揚  
げ、首級を亡君の御墓前に供へ、私しは大石様の御内命に依つて御當家へ御注  
進、是れより藝州様の御留守居へ注進なし、直様東海道を但馬豊岡へ参り、  
奥様、大三郎様、吉千代様へ此、赴きを申し上げて御悦ばし申し、其後にて  
其方は心任せにいたせよとの有難き御一言、又是れなる包みは連判狀、是れ

を御覽遊ばしませれば昨夜討入りの人数姓名は明らかに相判ります、尤も姓名の上へ黒き点の掛り居るは病死の御人にして、赤き印しは變心をいたしたる者さ御見分け下し置かれまする様、又内藏之助事忠義の爲めさは云ひながら、御老母様へ不孝の段々お詫びの書面認ためたけれど、筆を取るの暇無し唯々宜敷く其方より御詫びを申せよとの仰せ……イヤ取り分け小野寺十内様も昨夜の御働らきは誠に群を抜き、此の場合書面を認める暇も無い、唯々蔭ながら悦び呉れさの御傳言でございます、私しは是れより藝州様へ御注進申し上げに参ります故、心急くまゝ是れにて御暇を願ひ上げます、宜敷く御披露を願ひ奉つる、御免ツと一聲を後に殘して忠義の足輕寺坂吉右衛門、バツバツバツと雪を蹴立て、一目散、表外の方に飛び出して仕舞つた、アツと驚く戸田局奥殿差してバツバツと駆け込んで参り、戸田局、御後室様、一昨日御城代がお目通りを願つた節、不忠不義の人非人さ仰せ遊ばされし大石殿より、只今

お使ひとして足輕寺坂吉右衛門當御支關へ参り、御注進申すには昨夜九ツ時御城代を始め四十七人、吉良家へ亂入して芽出度く上野介のお首級を上げ、唯今其れを亡君の御墓前へお供へ成すつたと云ふこと、何さマア嬉しい事ではございせんか、今日の日の出は誠に日本晴れさ拜まれます、是れは御城代よりの御書面、又此の包みは連判状さかにて姓名の上に黒点のあるのは病氣の御人、赤き印しのあるのは途中變心いたせし者さ申すことでございます、戸田局は餘程嬉しかつたか、是れ丈けを云ふ間にも立つたり居たり、手の舞ひ足の踏み處も知らない位ひ、お聞き遊ばされし御後室様、扱ては内藏之助は其の心であつたのか、然うさは知らず一昨日目通りを許せし時に、耻がしや人非人さまで云ふたのである、ア、知らぬ事さ内藏之助、許して呉れよと瑤泉院、ワツと斗りに泣き出された、此の時此方の襖を開き、靜かに一間を立ち出でたる大石の老母、老御後室様、委細は只今承りました、扱ては良雄が今

迄での放蕩三昧、其上此の母を追い出したも皆敵に油断の謀略でございまして、たが、可愛い、悴の吉千代、大三郎、其他妻のお關を離別したのも、是れも残らず計略……其の時内蔵之助が心の苦しさを、推し測られて不憚千萬……、御後室様、お免し下さいまし」と云ひさしてワツと斗りに泣き出す、其内其處に置いたる連判状へ眼を止めて見てあれば、假令へ骨肉同胞の間柄なりと雖も、他言はいたすまいこの規則、第一に大石内蔵之助良雄、主税良金親子の血判老、オ、く、悴と孫が親子並んで立派な血判、内蔵之助は文もあり武もある人なれば總大將は道理なれど、孫の良金若、年に似合す、能くも健氣に大將を勤めて呉れた」と老母の悦び一方ならず、戸田局は上より二十一人目には、小野寺十内の姓名を認め「ア、昨晩は定めて佐分利流の槍先きにて、天晴れの功名手柄を現はした事であらう、ア、自分も男と生れたらんには、及ばずながら昨夜吉良の邸へ進入して、米澤奴の二人や三人は斬つて捨て、亡君

のお恨みを聊かなりとお晴し申すのであるが、女の身の情けなさ、併し兄が切めてもの忠義を盡し呉れたので、妾までが肩身を廣く暮らすことが出来る」と三女は互に慰められつ慰さめつ、更に御佛間を開いて此の赴きを冷光院殿へ申し上げ、連判状を御靈前へ供へて、喜悲こもくいたる熱涙に、外面の雪も解けん斗りであつた云ふ、併し是れは後のお話してございます。

○大高源吾忠雄の逸傳

時は來にけり元祿十四年極月十四日、昨日より降り續いたる雪は何時やむべしとも見へず、午後になりたつて益々烈しく、巴の如くに降る雪は霽々として玉樹をよそほひ、一陣の狂風櫻花をちらすが如く相見へたが、忠勇義烈の四十七士の爲めには勿怪の幸ひと云ふべきか、豫て約せる義士の人々は、三々五々人目に立たぬ様と一先づ兩國矢の倉なる堀部彌兵衛金丸の浪宅へ集まつ

たが、此處からは九十六間もある長い兩國橋を渡つて行かれば成らぬので、其れでは不便なからず、何處か本所の方で集會の宜い場所が無からうか云つた時に、堀部安兵衛武庸が豫て懸意にする、本所尾上町の蕎麥屋、楠屋久兵衛の二階が宜からうと云ふので、安兵衛は只一人先きへ来て、今度或る處へ召し抱へられたに付き、其の交際披露と云ふ名前前で此處の二階を借り受け、刻限斗つて二人三人宛此處へ集まつて来る、時刻移る愈々大石内蔵之助良雄は、豫て堀部の町人天野屋利兵衛が、心を籠めて作りあげさせたる十二点の忍び道具を取り出し、第一番に大石内蔵之助良雄、同じく倅主税良金、差添へさして小野寺十内秀和、續いて吉田忠左衛門兼亮、間瀬孫九郎正良、神崎與五郎則休、間瀬久太夫正明、堀部彌兵衛金丸、村松喜兵衛秀直、原徳右衛門元辰、横川勘平宗利、岡野金右衛門包季、貝賀彌左衛門友信、片岡源五右衛門高房、武林唯七隆重、富森助右衛門正國、奥田孫太夫薰盛、矢田五

郎右衛門助武、不破數右衛門正種、吉田澤右衛門兼定、岡島八十右衛門常樹、小野寺幸右衛門秀富、速水藤左衛門滿幾、矢頭右衛門七教兼、大高源吾忠雄、近松勘六行重、間十次郎光興、潮田又之丞高教、木村岡右衛門貞行、勝田新左衛門武堯、前原伊助宗房、赤垣源藏重賢、杉野十平次次房、間喜兵衛光延、三村次郎右衛門包常、中村勘助正良、奥田貞右衛門行高、千葉三郎兵衛光忠、萱野和助常成、間新六郎光風、磯貝十郎左衛門正久、堀部安兵衛武庸、倉橋傳助武幸、菅谷半之丞政利、大石瀨左衛門信清、村松三太夫高重、寺坂吉右衛門信行の四十七義士、碌々上下の區別はあれど、忠義の道には變りなく、各々黒地の絆纏、山道段だら筋、白木綿の袖印し、襟に掛けたる白布には、播州赤穂浪士何の某何十何歳と書き記され、綾紋裁着ぼたん、白山足袋に若荷草鞋を穿き締めて、北條流の鍔頭巾を猪首に着なし、投鎌、投槍、繩梯子、半弓掛矢を携さへし人もあり、中にも目立つ扮装は

總統領大石内蔵之助、其夜の扮装見てあれば、腹巻仕立の着込みには、豫て主君より拜領したる淺黄羽二重丸の内に違ひ鷹の羽の定紋打つたる小袖に、錦爛具足の袴を股立ち高く取り上げて、黒羅紗の陣羽織、白き木綿の袖印、襟に掛けたる白布には播州赤穂の浪士大石内蔵之助良雄行年四十五歳と記され、波平行安の鍛へたる古今の名刀、小刀は備前忠吉を帯し、雪に輝やく星兜を猪首にきなし、六十四枚金切割りの采配を鑲の孔底に納め、山鹿流の陣太鼓は三段流れ九のうち、時刻は既に子の上刻、ソレツと云ふなり堂々、たゞ見る雪の銀世界、夜は更け渡る寂寥の境、雪を蹴立て、乗り出した其有様は、誠に百萬の強敵もものかほの概があつた、斯くして愈々本所松坂町なる吉良邸に打ち向つたる同勢は、大石良雄の計らいに依つて四十七士を二手に分け、先づ東組の總大將には内蔵之助を始め二十四名、是れは表門より討入る事に定め、西組には裏門より二十三名、若年ながら主税良金を大將と

して、後見には吉田忠左衛門、小野寺十内、奉行は片岡源五右衛門と定まつた此時内蔵之助は大高源吾、岡島彌惣右衛門の兩人を呼び出し、吉良家の御隣り屋敷、越前御附家老本多孫太郎方へ、今日の次第を申し遣した、此の大高源吾と云ふ人は亡君御盛人の時、御近習頭取の助を務め、誠に風流の質ちで其の辯武藝も相當に出来る、豫て美濃の子貢と云ふ宗匠に就いて俳諧を學び、俳號を子葉と云ふ、處が師の子貢が歿してから後江戸茅場町の寶晋齋其角を慕つて先づ其れを師匠として居た、然るに御家に騷動があつて大石良雄の義士中に加はり、豫て江戸に馴れたる浪人は皆其れへ江戸へ出て、思ひへに姿を扮し吉良上杉の様子を探つて、山科の大石の處へ秘かに書面を出し、氣脈を通じて居る内に、愈々機が熟して大石が江戸へ出て参り、近々吉良家へ討入りと云ふ事に成つた、處が此大高は江戸に暫らく居たけれども、吉良家へ出入りをする事が出来ない、何うも此の人の性質では商人に成つた處で巧く屋敷へ入り込

み事をすることがむつかしい。其處で其角の弟子に成つて俳諧師となり、此の道より吉良殿の傍へ近寄つたら利益があるだらうと、思ひ付きは宜い様で悪るかつた。其角も吉良殿へは月に三回、四の日に俳諧の會があるから其の時何うかして同道をして貰ひ度いと思つたが、此方から言ひ出して悟られては成らないから、只睨みツコをして居る。又其角の方でも此の大高源吾は内匠頭の家來で、吉良殿へは恨みのあるのを知つて居るので、他の大名方の邸へなら何處へでも連れて行くが、吉良殿の邸へは更に同道して呉れない。其内に運びが付いて愈々十二月十四日の夜に吉良殿の邸へ亂入と定まつた。晝と違つて夜のこゝでは屋敷内の様子を知らないでは大變に損だ。黨中でも神崎與五郎、倉橋傳助、萱野和助、赤垣源藏、堀部安兵衛、三村次郎右衛門、中村勘助、宮森助右衛門、杉野十平次の面々は種々に姿を扮して吉良家へ出入りをいたし、邸内の様子を知つて居るが、大高源吾は少しも邸内の様子が判らないから、他に

後れを取つては誠に残念の話だと思つて居る。今日は十二月十三日、愈々モウ明日の晩だ、御法事は晩方だから先づ其れまでに、吉良殿の門へ這入つて那處には大きな溝がある。此處が左兵衛、備佐の御部屋で、吉良殿の寢所は何處と云ふ事丈けを見て置き度いと考へた。處が舊幕時代には十二月十三日から紅葉山千代田城のお煤拂ひが始まつて、十三日が表、十四日が奥、十五日が二の丸お櫓等の御掃除以上三日掛り、十三日には御譜代大名御旗本、或は高家杯も此の日に煤拂ひをする邸が澤山にある。其れで此の煤拂ひを的にて籠を賣り歩くものがある。其處で大高源吾は心中に「源、是れは寧ろ身を落して籠賣りに成り、吉良の邸門前へ行つて萬一呼ばれたら打ち捨てる様に安く賣つて遣らう、然うすれば是れは安い籠賣りが來たと云ふので門の内へ這入れる事は間違ひ無い、此の計略が行なはれんでも其れ迄だ、思ひ切つて遣つて見様」と其處で源吾は條拂ひに用ゆる籠を一纏め買ひ求め、自分の着類の中から

最も粗末なものを撰み出し、ダラシも無く是れを着て、少しも武士の姿は無く往來の人中を頼冠りをして其椽竹を擔ぎ、今しも兩國橋を本所の方へ向つて歩いて來ると、向ふから坊主合羽を着し頭巾を冠り、杖を突いて雪の中を靜かに此方へ向つて歩いて來るのが、源吾の師匠茅場町の習習齋其角、不圖是れを眺めた大高源吾、心の中に「源ア、悪い處で宗匠に出逢つた、何うかして顔を合し度く無いものだが」さと思つたが、思ひ付きが遅くつて、目の前へ其角が來てから氣が注いだのだから逃げる事も出來ず、據るなく欄干に其椽竹を立て掛けて、其竹の中へ源吾が顔を突込んで遣り過そうとしたが、身体がまるで外へ出て居るので、其角は今摺り違ながら「其ア、大高氏だナ」さ早くも見て取つた。

○兩國橋上子葉其角の出會

富貴なる時は他人集まり、貧なる時は親族離れる。零落した時は人間は不實なもので、大高源吾が是れ位ひの汚ない姿をして居るから、大抵な人であれば、ア、零落たものだ、此處でリカ／＼口を利いて無心でも云はれては困ると思ふのだが、此實井其角は俳諧師ではあるけれども、其んな不實の人では無い、豫て前年には下總葛西領の百姓に頼まれ、其の身の命を三圍神社へ捧げて雨乞ひを成し、其角の誠心を天が感應在ましたか、遂に雨を降らしたので、葛西領の百姓杯は此其角を神の如く恭まい尊さんだ云ふ、其の位ひの徳のある人ゆへ、他が零落れて居れば居るほど、見捨てられない、今後邊を振り返つて「其ア、子葉さん」さ言葉を掛けた、斯く呼ばれては仕方が無いから大高子葉源「オ、是れば宗匠、何うも久しく御無沙汰を……其何う成すつた其後は……家内も能く貴耶の御噂をいたして居る、何うぞ些さお尋ね下さい、源「ハイ有難く御禮を申します、イヤ何うも宗匠、私しも浪人の後はするこそ成すこそ

皆んな見込み違ひに成つて、只今では實に見る影もなき斯様な有様其其れは  
 何うも大高氏 武士が食 祿に離れたら皆零落するもの、浪人をして外形を飾  
 り、立派な世渡りがして居られれば、其人は必らず不正の者を見做される、決  
 して其れをお耻し成さる處は無い、併し當節は何處にお在で成さる 源、イヤ何  
 うも住所は定まりません、那方に三日此方に五日……其其れは誠に御不自由  
 だらう、何しろお尋ね下さい、私しも相當の御相談には乗りませうから 源、有  
 難う存じます、何れ又何がひます 其併しまた風流の道はお捨て成さるまいナ  
 源「斯様な身に零落れても、嗜きな道さて朝な夕な、何かに付けて……其、イ  
 ヤ、其處に誠の風流がある、餘り久々だ、是れなりでお別れ申すも誠に本意  
 ない、一寸附け合ひ丈けを願ひ度い」風流人は又違ふ、十二月の中旬の雪中  
 に、兩國橋の真中央、筑波風しの冷たい風に吹かれて、手も凍へて覺への無  
 い位ひ、其角は其れへ立ち留つたる儘腰の矢立を取り出し、凍つて居る筆を嘴

み、懐中の紙を取り出してスラ／＼と立句を書き認め其「サア何うぞお附け  
 下さい」と差し出した、是れを源吾が取り上げて見るこ  
 年の瀬や水の流れも人の身も  
 年の瀬と云ふは今日は早や十二月の十三日、水の流れも人の身も、其行末は如  
 何なるか、此の大高と云ふ人も内匠頭御繁昌の時は、御近習頭取外へ一寸  
 用達しに出るにも仲間一人を供に連れ、立派な風体で往來をした人が、また滿  
 二年経たぬ中に斯うも零落れるものか、樺竹賣りさば情けない、水の流れも人  
 の身は、行末判らぬものだと云ふ意味であるが、能く云ひ廻したものだ、是れ  
 を眺めて大高が、心の中に 源「此の宗匠は眞實の人だから是れは全く心配をし  
 て呉れるのだ、斯う云ふ人に苦勞を掛けるでは無いが、モウ心願も明日の晩、  
 忠義の爲めに一命は賭けて居る、御心配下さるナと云ふ譯にも行かず、切めて  
 自分の心の中を、其れさなく此附け合ひの筆に意味を含めて置いたなら、大盟



成就の曉は、ア、成る程ご一層おもしろく考へるであらう」ご考へた大高源吾、源「ハ、ア是れば誠に面白ふございます、一寸お筆を拜借」ご其の附句が

源「如何でございます、何うぞ御覽下さい、其「ドレ拜見いたしませう、ハ、アあした待たる、其「寶船……、春氣を含んで誠に面白うござる、是れば頂戴いたしませう、源「併し宗匠、急ぎましたので巧く出来ません故、何うぞ他人にお見せ下さるナ、其「イヤ委細承知いたした」と云ふ時に此の其角が附句に勘違ひをした、其「是れば此の大高氏は二君に仕へる了解だ、あした待たる、其「寶船明日にも主取り仕官の途があれば、寶船に乗つた様で元の身分に成れると云ふ意味か、ア、斯んな人では無かつたが、二度目の主人を頂いて、草履取りや若黨を連れて往來すれば、一寸見た處は立派だが腹の中は汚ない、斯うやつて椽竹を賣つて歩行く方が、姿は汚ないが腹の中は清かだのに」と思つたから其「

子葉さん、年内にお暇があつたら何うか私方へ御訪ね下さい、又御相談の對手にもならうし、此の附け合ひもいたしませう」大高源吾は又宗匠程の人でも、此の意味は判らないかと思ひながら源「ハイ、何しろ何れお伺ひ申します、其「デラ是れでお別れを……、イヤ少しお待ち下さい、餘り見れば肌薄だ、寒さ凌ぎを進ぜ度いものだが、何うも途中ではあるし」と考へて居たが、坊主合羽と着物の間の羽織の紐を解いて袖を脱ぎ、合羽の着類の間から、上に着て居た黒縮緬の羽織をスツと引張り出した、モウ其角位ひの人になるさ、毛抜き羽織と云ふ奴ツで裏も何も無い、両方から表斗りを合せ、此方の大名邸へ行く時には此の紋付、此方を引繰り返せば何處へ行くさ云ふ羽織に成つて居る、其「ア、子葉さん、切めて此の羽織を寒さ凌ぎに着てお出で成さい」と云はれて源吾は心中に源「是れば宗匠愈々意味を取り違へた、併し今の附け合ひを他人に見せて呉れなければ宜いが、萬一心ある人に見られて、其れさ悟られては

一大事、併し今更ら取り返した處が附け句は宗匠の胸に疊んでしまつた。此の人にも斯う云ふ勘違ひがあるか」と思ひながら、粗服の上へ貰つた羽織を遠慮なく重ね、源宗匠、是れはマア行きも丈けも丁度私に宜敷い、イヤ有難う存じます、何れ伺がひます、へ、へ、へ、」と厭やな笑ひを残して大高千葉、又もや煤竹を擔いで行つて仕舞つた、跡見送つた其角が、其「ア、那れだから零落をする筈だ、煤竹が幾らの物だ、黒縮緬の羽織を貰つたら竹なんぞ川の中へ放り込んで仕舞つても宜さそうなもの、然るに後生大事に竹を擔いで、縮緬の羽織を着た竹賣りが何處にあるものか、併し零落があまり早や過ぎる、去年お家が潰れて大高氏も、相當の配當金は貰つたらう、酒は呑んでも八分にして亂れな

い酒だし、女に溺れるさ云ふ人でも無し、身持ち堅固で賭事は大嫌い、其れにしては零落れ様が早い……オヤ、これは飛んだ事をした、今の羽織は松浦の御隠居から拜領した御紋付、餘り肌薄だから寒からうと一圖に考へ、飛んだ事をしてしまつた、此の分ではアノ大高氏、何處かへ羽織を賣り拂ふかも知れない、殊に松浦様の御紋所は澤山に無いから、古着屋の釣し物にでも振ら下つたら、名家の松浦家へ耻を與へなければ相成らぬ、と云つて今更ら追つ返して取り返すのも可訝いし、今日は何うせ用が無いから、一つ是れから松浦のお邸へ引返して御隠居へ御目通りを願ひ、羽織のお詫びをして置かう」と根が正直な人だから、然う思ひ出すと矢も楯も堪らない、再び兩國橋を後に取つて返して、本所の松浦様の御中屋敷、屋敷の塀の上から往來の方へ椎の木がニユツと出て居たが、今は其形ちばかりが残つて、俗に椎の木松浦と云ふ、是れへ来て見るさ前の松浦肥前守、此の人は山鹿甚五左衛門先生のお弟子で、軍學の名人、山鹿先生が後公儀のお咎めを蒙むつた時に、加賀様さ此の松浦様も公邊不首尾であつた位、當時は御隠居をして卜雅齋と仰せられる、丁度今日には十二月十三日の雪景色、向ふは大川だから非常に眺めが宜い、今朝は雪見

酒を酌まうと思召し。二三の女中を側に置いて顔に御酒宴中、執次の者より寶井其角が御伺がひをしたさ申し入れる。是れを御聞きに成つてト雅齋ト「ア、其角が参つたか、其れは、直ぐ此方へ通す可宜からう」暫くする其角、案内に連れられて其れへ通つて来るト「イヤ其角が、近ふく、其御機嫌宜敷く……ト」大層今日は降つたナ、世に月雪花さ云ふが、モウ年を取つては雪も少し恐れ入る、斯く衣を厚くし火桶を前に置いて眺める誠結搦だが、下々の者は難儀をいたすであらう、サア一盞遣はす其ハツ有難う存じますト「時に其角、其後何か珍句は無いか其イヤ其義に就いて今日罷り出ましたか、今日兩國橋で大高子葉に出逢ひましたト」ウム大高源吾か、彼れも淺野家が斷絶をして、大きに閉口だらう、何か矢張り俳諧でもして遊んで居るか其イヤ俳諧どころか何うも甚い零落れ様でございますト「ア、零落いたしたさ申すか其へエ、何を申すも氣の毒千萬、煤拂ひに用ひます笹賣りに成つて居ります

ト「笹賣り……、其れは何うも妙だナ、那んな才物で何か外に零落しながらもモウ少し思ひ付きがありそうなもの、條拂ひの笹賣りとは……併し何か口を利いたか其へエ久し振りで口を利きました、併し風流は捨てません、橋上で立つたまゝ一寸附け合ひ丈けをいたし、年内に此の附け合ひを再びいたそうと約束を仕つりました、是れへ持參を致しましたから、何うか御覽下さる様ト」ドレ、成る程、年の瀬や水の流れも人の身も……是れは宗匠だナ其「左様でございます。

○討入前最後の句合せ

ト「ウム少しも此の假名が死んで居らんナ、流石は商賣人だ、ア、是れが子葉か、あした待たるゝ其寶船……ウム所白い、あした待たるゝ其寶船……ウム、コレ其角、其方は何か勘違ひをして居るナ、俺れだから宜いが、滅多な

人に見せられぬ附け合ひだ、あした待たるゝと云ふのは意味深長、此の頃は武士が柔弱に成つて、此の卜雅齋杯も行末を案じて居る、其情弱の武士の眠りを覺させる様な事があらうと思はれる、ぞ、是れは迂闊に人に見せぬ方が宜からう」さ被仰つた、スルも流石宗匠の其角だから、其の意味が早速判つて來るさ、頂だいて居ります酒も苦味を生じて些しも美味くない、ソコ〜にお暇なつて松浦邸を立ち出で、再び阿國の邊りへ戻つて來て彼方此方と笹賣りを見て歩行いたが、肝腎の大高千葉は居ない、其角もホツと嘆息をついて、其ア私ばモウ老ひ込んだのか、其れなればこそ大高氏が、急ぎましたから巧く出來ません、何うぞ人にお見せ下さるなと一寸一言私に心注けた、其れを悟らずに松浦の隠居に御覽に入れた、松浦様だから仔細は無いが何うも面目ない、今考へれば羽織を遣つたのは却つて此方の耻であつた、行き丈けも丁度宜敷いへい、いゝ、さ妙な笑ひ方をした、是れも其角を頼みない人だと輕蔑笑ひをした

のであらう、ア、面目ない」と思ひながら、其角は其儘自分の家へ歸つて酒を呑んで寢て仕舞ひ、夜が明けるさ十四日だ、湯にも這入つて來たが何だか胸がキリ〜痛いので、又酒を爛て見たが誰れも對手が無い、仕方無しに獨酌で飲んで居たけれど何うも酒が美味くない、スルも其處へヒョイツと這入つて來たのが、同じ風流仲間の雪中庵嵐雪、鯉屋杉風の二人杉、イヤ兄貴、朝からチヨビ〜飲つて居るナ、今本多様からお使ひがあつたから、お前を誘ひに來た其、其リア何うも……併し何處の本多様だ杉、アノ越前のお附家老、赤玉本多よ、此の間お下屋敷で百韻のお催しがあつた、處が今日はお上屋敷に在つて、跡に何か御趣向があるそうで、是非貴公と一緒にさ云ふ御沙汰だ、彼方で御酒を頂たくとして直ぐに支度を……其、俺リア本多様のお上屋敷へはまた出た事が無いが……杉、本所の松坂町だ其、エツ、アノ高家の吉良様の御近所か杉、然うだ、吉良様とは一重お隣りだ其「ウム然うか」と云ふと其角が俄

かに元氣付いて其「ちア直ぐ行かう」と直ちに支度をして三人連れ、本所松坂町の本多孫太郎様お邸へ出掛けて行く、此の本多様は代々内藏之助と云ふお名前だが、何う云ふものだったか赤穂浪人が吉良家へ討入りをしたと云ふ届け書に、本多孫太郎と書いて出された、然るに今三宗匠が来たと云ふので孫太郎様は大いにお喜びで、早速奥の間に通して文臺には其角が坐り、本多様の御家來で風流人がズーツと其れへ列び、ドン／＼讀み始めたから思ひの外に巻き上げが早く、其角宗匠は立句から百韻をズーツと詠み立てる、良い巻きが出来たと云つて殿様はお喜び遊ばし、後で御酒宴となる、其處へ女中が出て来て酒間のさりもちをする、と云ふ陽氣なお座敷、スルとお隣りの吉良殿も、今日はお茶の能會だ、と云ふので、町藝者杯が上つて騒いで居たが、其内早や五ツ半時に成ると、隣り屋敷の騒ぎは段々静まつて仕舞ふ、其内に夜が段々更けて來るから本多の殿様は殿「今夜は三宗匠泊つて行くが宜い、明日はモウ數

へ日ではあるし、身体を持ち扱かふ時分だから、何か又催しを仕様、徹夜でも宜いから遠慮無しに飲む様に、併し此方が此處に座つて居ては、酒も氣がまつて美味くあるまい」と云つて奥へ引いて仕舞はれた、スルと此時其角は、其「何うも身体の俱合が悪いから、今夜は早く寝度い」と云ふから鯉屋杉風が杉「其れぢや吾々も御免を蒙むらう」と大した絹布の夜具蒲團を延べて貰つて三宗匠は枕に就いた、何しろ杉風や嵐雪は酒の勢ひで、横に成ると直ぐ大肝をかいて寝て仕舞つたが、其角一人は何うしても眠られない、只何やら隣り屋敷の吉良様の方が氣に掛る、其の中に夜は深々として、降り續いたる大雪故人通りも途絶へ、シーンと寝静まつて仕舞つた此の時、恰度今九ツの御時計が鳴ると、本多様の御門をドン／＼と訪づれるものがある、御門番が門「ア、何誰……」と聲を掛ける、と外かうは凍さした聲で「〇吾々は播州赤穂元の城主淺野内匠頭家臣岡島八十右衛門、大高源吾の兩人にして、夜中は不審もあ

らうが御重役にお目に掛り度い、決して亂暴を働らく者ではございませぬ、願はくば御門内へ御通し下さる様、門「イヤ暫らく御控へ下され」と門番は飛び込んで泊り番の眞柄甚兵衛に此の事を告げる甚「ア、少しも思ひ當る事がある、潛門を開けて通せ」と甚兵衛さんは禪衣へ袴を穿いて脇差しを差し、左手に刀を持ち、右の手に雪洞を点して玄關式臺の處へ出て來る其内に、門の潛りが開くまばら／＼と雪を蹴立て、飛び込んで來た二人、夜目には確と判られど、黒白緞ダラ筋の野絆纏、北條流の鍛頭巾を高紐にて反ね返し、甲斐くしき扮装にて「八」是れば本多家御重役でござるか、私共身分の義は播州赤穂元の城主、主淺野内匠頭浪人岡島八十右衛門源一拙者は同じく大高源吾八、豫て御聞及びも是れあるべし、去年三月主人内匠頭義傳奏御馳走役勤務の折柄、重なる遺恨已み難く、高家吉良上野介を殿中に於いて及傷に及びたる處、事を果さず其身は切腹、家名は斷絶、對手吉良殿へは何の御告めも無く

目出度く榮へ居る段、泉下に在る主人の残念如何ばかり、依つて城代家老大石内蔵之助を始め有志の輩らに相談り、何卒主人の無念を晴し參らせ度く、千辛萬苦の功積んで、今夜隣家吉良殿へ討ち入る者四十有七人、火の元大切にいたし、過失出火等毫頭是れ無く、御隣家の事なれば、御加勢を御繰出しの御手配りも有之らんが、願はくば赤穂浪人が忠義の一念御憐察の上、此の義御見合せ下され度く、内蔵之助に代つて嘆願に罷り出でましてございませぬ、眞柄甚兵衛是れを承わつて甚「イヤ各々方の御忠節恐れ入つた、武士たる者は誰れも然うあり度い事、早速主人へ申し入れ、加勢の義は見合はせるでござらう、此の扉は隣家の境界でござる、當方より高張を數多差出し、外ながら幾分かのお助けもいたすでござらう、又御不自由の品もあらば、當方に若武士の面々を詰めされ置くに依つて、何なりとも辨越しに仰せ聞けられる様、表面は相成らぬが、内分で蠟燭其他の者は失禮ながらお助け申す、又吉良の家來、

上杉、附人杯此の扉を乗り越へ、當屋敷へ遁れ来る者あらば、若武士へ申し聞  
け、扉越しに隣家へ打ち込む様にいたす源「ハツ其の御一言を申し聞けました  
ら、定めし内藏之助も喜びませう、後して御禮は申し上げる、是れにて御免を  
蒙むる」此の時寶井其角は秘かに寢所を出て、委細玄關の衝立の影に聞いて  
居たが、松浦の御隠居の先見の明らかなるに感心し、今こそ大高、岡島の兩人  
が辭し去らうとした時に、其角は衝立の後ろから其「ア、子葉さんく」と呼  
はつて玄關へ飛び出して来た源「オ、是れは芽場町の宗匠でござるか、其「イ  
十大高殿、前日兩國橋の會ひの節は、甚だ失禮をいたしました、明日待たる、  
その寶船、今晚は多分御心願と察し、御當家に俳諧の御催ほしあるを幸ひ  
一宿をいたしたたが、各々の働らきを拜見いたし、末世まで方々の忠義の程を、  
其角が筆に書き残さんと云ふ老婆心、何うか立派に功名手柄を御祈り申す、御  
急きでござらうが、首途を祝つて、

吾が物と思へば輕し笠の雪、  
スルと大高子葉直ちに源「ハツ有難う存じます、  
日の恩や忽ち碎く厚氷

此の時岡島八十右衛門が「八」大高氏、寶井宗匠でござるか、ア、宗匠是れは  
誠に宜い處で御意得申す、手前は岡島八十右衛門、俳名を竹平と申す、

飛び込んで手にもたまらぬ霞かな、  
兩「さらば宗匠……」と暇乞ひ、大高源吾は裏門、岡島八十右衛門は吉良邸  
へ亂入に及んで天晴れの功名を現はしたる、未だに残る風雅の一節は即ち是れ  
……。

○壯氣忠烈、義士の討入

まつしぐら突き進み行く武士の、太刀には向ふ鬼神もなし、大石内藏之助は殘

る方なく手配りに及び、四十六人を二手に分け、主税の勢を裏門へ向はせ、雪を蹴つて表門へ乗り出して来る。門扉高く要害堅固にて、却々登る事が出来ぬ。片邊に突立つて居たのが富森助右衛門。内「ア、助右衛門殿、裏門を見て来られい。助「ハツ」と答へた助右衛門、バラ／＼と裏門へ廻つて見る。此處は表門よりは幾分か容易い様だ、復駈け戻つて助右衛門、此の起きを内蔵之助に云ふ。内「ウム、然らば吾れ裏門より乗り入らん、御身指圖して主税の手を差し換へられい。助「ハツ」と直ちに駈け来つて主税に此の事を傳へ、茲に同勢を入れ換へさせた。此時先づ第一に原惣右衛門、繩梯子を掛けてスルスルと扉に攀じ登り、身を屈ませて屋敷内を見下す。雪は早や名残り無く晴れ渡り、老女の化粧に譬へられし寒月は皎々と照り、庭内は晝を欺む如く、四邊隈なく見すかして居る惣「エイツ」云ふなり飛び降り様としたが、何うしたはづみか足踏み込らせ、ドツと計りに轆がり落ちた。續いて大高源吾

の上に乗じ登り、ヒラリと邸内へ飛び下りた。後ればせじと武林唯七もヒラリと飛び入つたが、此時大高源吾は直ちに掛つて門を開かうとしたが、頑丈な錠が下りて居るので却々開かない。源「エイツ、面倒なりツ」云ひ様に、持つたる掛矢を以つてグワチン錠を打ち割つてしまつた。續いて武林唯七斧を以つて門を打ち折り、ギーツと門を入文字に押し開いた。然るに此の物音に門番の武士二人、ムク／＼と起き上つたが、其れよと見る間にブル／＼と震へ上る、目ざさく見付けた大高源吾「源「已れツ神妙にしろツ」と躍り掛つて早くも高手小手に縛り上げ。源「事果てる迄で其處に待つて居れ。抵抗するも一刀両断だぞツ」二人に猿轡を箝め、其儘部屋の中に押し込めて仕舞つた。處へ内蔵之助を始め一同の人々、バラ／＼と入り込んで来る。跡へ廻つて以前の如く門を閉めて仕舞ふ。此の時内蔵之助は門内と臺所口とに二人宛を残し、ソレツと云ふより表門へ駈け付け、門番を踏んじばつて錠を取り、首



尾宜く門を開いて主税の勢を誘ひ入れた。此處でも元の如く又門を鎖してしまつた。其の内内藏之助は豫て定めたる新り人数の手配りに及び、玄關の正面に突立ち上り、大音聲に内「淺野内匠頭家來大石内藏之助以下四十余人、今日亡君の御恨みを晴らさん爲めに推参したり、上野介は何處にあるや、ソレ掛れッ、進めッ」云山鹿流の陣太鼓、ドーンドーンドーンと響き渡つた。皆「オツ年来の恨み今ぞ晴さん時來れりッ」云武者震ひて妻まじく響き渡つた。皆「オツ年来の恨み今ぞ晴さん時來れりッ」云武者震ひと共に横川、岡島、堀部、神崎、磯貝、三村の面々は、グララ／＼とツと玄關の戸を打ち破り、ドツと喚いて斬り込んだ。寢耳に水さは此の事か、疾風迅雷の叫びと共に、敵多の勢が亂入した事であるから、吉良家の騒ぎは一通りでは無い、女子供の泣き叫ぶ聲、彼方此方に矢叫びの聲、今迄で寂々たる吉良邸は、一瞬の内に條羅の巻と變じ、阿鼻叫喚、大叫喚の地獄と變じた。諸士の目差すば上野介只一人、假令へ地を潜り天を翔けるも、やはか尋ね出さで置く

べきかど、四邊の障子バツ／＼と蹴放しく、ドツと喚いて斬り込んだ。此の時玄關の次の間に寢て居たる三人の武士「三ツツレ狼藉者ッ」バツと蒲團を蹴れ上げて、一時に其れツと打ち向ふ。勘「サア來いッ」云横川、勘「エイッヤッ」云大喝一聲、一人を見事に其れへ斬つて落す、續いて三村次郎右衛門、次「エイッ」云云ふなり今一人を斬り落す、這は叶はさじと逃げ出す一人、八「ヤツ卑怯者奴ッ」云岡島八十右衛門、バツと躍り掛つて早くもグル／＼と縛り上げて仕舞つた。是れを始めとして此方彼方より、ドツと斗りに斬り込んだ。勇士の面々、吉良家に其人ありと知られたる清水一角は、大石主税良金、小野守十内の爲めに斬り倒され、鳥井利右衛門は武林、唯七、近松勘六の爲めに和久半太夫は堀部安兵衛の爲めに、伊庭如水軒も同じく安兵衛の爲めに、吉良の附人、小林平八郎は磯貝十郎左衛門、神崎與五郎、杉野十平次の三人の爲めに、各々美事に斬つて落され、雪と共に消へ果てた、斯くして四十七義士の面

々は、縦横無盡に劍を振ひ槍を取つて、何れ劣らぬ大功名を現はしたるが、八ツ半時即ち方今の午前三時に及んでも、如何なる露か上野介の姿が見へ無い諸士は邸内は素より残る限なく探し求めたが、何うしても判らない、茲に於いてさしも逸りに逸り、猛りに猛りたる烈士の面々も、ガツカリ氣拔けの様に成つて仕舞つた、皆々内蔵之助の前に駆け集まり、皆ハツ斯く家探しに及んでも肝腎なる上野介殿を見出し得ざるは、全く取り逃がせしに極つたり、此の上は武運に盡きたる吾々、豫ての通り腹搔つ割いて相果て申さん」さ覺悟の体、内蔵之助も實は胸を抱いたのであるが、今弱き音を吐いては烈士の人々意氣沮喪し、由々しき大事さ成らうと計られずと思つたから内「イヤ騒がれた各々、決して逃がし申しはいたさぬ、邸内に在るに相違無い、殊に引揚げは即刻でござれば、まだ充分の時あり今一應家捜しあつて然るべし、ソレ急れよッ」指揮を傳へた、一同の人々は是れに勇氣を揮ひ起し、皆ハツ畏こまつた」さ四十余

人、再び手分けしてドツミ斗りに躍り込んだ、然るに今しも槍を取つて忍び足奥の間の廊下へ來たる一人は、是れぞ義士の一人吉田忠左衛門兼亮なり、彼方此方の上野介の所在を探し求つ、一間に踏込んで眺めてあれば、其處には白綸子の夜具に緋行燈、括り枕に枕元には銀の煙管に煙草盆五三の桐が付いているから、是れぞ上野介の寢間らしい、ハツと思ひながら忠左衛門、夜具の袖から手を差し入れて見るさ、まだ少し微温があるから忠「ウム、扱ては是れより何れにか逃げ去つたに違ひ無い、未だ此の微温の残る上は遠くは行くまい、此の近くに身を隠したのであらう」と思つたからピーツピーツと呼子の笛を吹き鳴らすさ、メラ／＼／＼ツと集まつて來た同志の人々、天井を叩き或は疊をあげ、彼方此方と詮議をする内に、不圖思ひ付いて岡野金右衛門床の間に掛けてあつた山水の軸物を取つてハツと引き外すさ、是れぞ吉良上野介が運の盡き、其の壁に人が一人自由に出入りの出來る様な穴が拵らへてある

唯「ウム是れたッ」と突然り飛び込んだ氣早やの武林。唯七、續いて間新六同じく槍を小脇に飛び込んで、バラ／＼と十五六間も来たかと思ふ頃、又も其處に六疊計りの坐敷がある、其次の間に四疊半の茶席、併し其處へは誰れも来た氣色が見へない。唯「サテ／＼惡運強き吉良上野、斯くまで吾々苦心をいたし尋ねても、今以つて行衛判らす取り逃したか無念心外、ア、吾が武運も早や盡きたるか」と思はず知らず唯七が、例の粗忽で、握り固めた拳を振り上げ、力任せに羽目板を叩けば這は如何に、ギ／＼と開いたドンデン返し仕掛け、アツ此處にも坂道がツと這入つて見ると又穴がある、武林に間はモウ自暴氣吹に成つてドン／＼其穴へ這入つて行く、何時の間にか身は庭先きの築山の蔭に出た。スル／＼降り積つた雪が踏み荒されてある、其れへ目を注いだのが間十次郎、三番目に此の穴から飛び出した儘、バラ／＼とツと其足跡を知邊に傳つて參る、雜倉の前で足跡が消へて居る、續いて駈け付けた武林

唯七、雜倉の金網戸を開けて中へ這入らうとしたが何うしても開かない、間十次郎は手槍を取り直して網戸の間から「エーッ」と力に任して突き入れたが果して其中に上野介が這入つて居たのだから、左りの太股をグツと突き通された、アツと聲を立てれば引き出されると思つたから、痛さを堪へてグツと齒を噛みしめ、槍を引く拍子に白綸子の寝衣でソツと拭ふた、十次郎は槍先を手許へ繰り寄せたが血汐が無い、十「ハテナ確かに手答へがあつたのに、血汐が残らんとは何うしたのであらう」と思ひながら、尙熟／＼改め見れば槍の穂先きに白綸子が行き渡らなかつた處があるさ見へ、少しばかり血が残つてある、十「ウム扱てはッ」十次郎は此の事を小聲で武林に傳へる、唯七は隙がさす呼子の笛をピーツと吹き鳴らしたから、大石始め一同の者皆「ソレッ」と云ふなり雪を蹴立て、駈け集まつた。

○芽出度う本懐を達す

中にも大高源吾は大掛矢を以つて駆け付ける、大石の指圖で錠前の邊りを打ち  
毀すさ、武林は第一番に飛び込んで、其處に震へて居る上野介の、襟髪揃入  
でズル／＼とツと引き出して来た、見るさ年の頃六十有余、身に白輪子の寝  
衣を着用して居るから唯「燈火／＼」と豫て用意の手松明を点して能く見る  
さ、前額口に古傷がある、衣服を剝ぐと肩口にも古瘡がある、源「ウム扱てはツ  
と豫て顔を見知つた片岡源五右衛門、駆け寄つて熟視するさ正しく吉良上野  
介義英だ、内「アイヤ武林、大切な御方故手荒き事をいたしては相成らぬぞ」  
と云ひながら内蔵之助、吉良上野介の手を取つて上坐に直し手を仕へ、内「ハツ  
恐れながら拙者は素播州赤穂の城主、淺野内匠頭長矩の臣、大石内蔵之助  
其雄と申する者、同志四十六名と共に今宵當家へ推參仕つり、主人内匠頭

の存意を相續ぎ、恨みを晴さん爲めの艱難辛苦、其志しを憐れみ給ひて、尋  
常の御生害を願ひ奉つる」さ四十七士の人々はズラリ並んで手を仕へ頭を下げ  
る上「コレ心得違ひを申すナ、予は吉良上野では無いぞ、今夜の茶會に招か  
れたる大友近江守である、無禮な事をいたすな内「コソ御卑怯なる御一言、  
如何程御言葉を左右にせらるゝとも、眉間に残る古瘡は、去年三月殿中にて吾  
君が恨みの紀念、最早や免れぬ處、尋常に御切腹あれ、此内蔵之助御介錯を申  
し上げる上「何を申しても予は大友近江守に相違無い、其方共陪臣の身を  
以つて無禮であらうぞ内「イヤ／＼何ぞ仰せられても斯くなる上は最早や免れ  
ぬ處と思召し、御生害あれ、御首級を頂戴いたさん」さ取り出したるは短刀一  
振り、冷光院殿の御位牌内「是れは吾が君田村邸に於いて御切腹あつたる時  
御用ひに相成つたる短刀なれば、是れを取つて御生害を只管ら願ひ奉つる」さ  
云はれて此方上野介、逃げるにも逃げられず、絶体絶命に其短刀を取り上

げたから、扱ては自害かと思ふ間も無く上「ヤツ」さ一聲内藏之助臨んで突掛  
る。ヒラリと体を敷した内藏之助、猿臂を延ばしてアイツと手許へ引寄せ内  
餘り云へば御末練でござらう、是非に及ばず御覺悟あれ」と其短刀をもぎ取  
り内「内匠頭長矩の無念思ひ知れツ」と咽喉元を突き通す上「ウムーッ」さ  
云ふなり其れへ打つ倒れんとする此の時内「ソレ御一同」さ云ふさ四十七人の  
人々が各々一太刀宛斬り付けた、内藏之助は首を揺落して木村岡右衛門に渡す  
岡右衛門は直ちに首級を持つて、一ツ目橋より豫て用意の船で泉岳寺へ行つた  
さ云ふは、萬一陸上を持ち行く途中、上杉の同勢からでも首を取り返されては  
折角の苦心も水の泡、ソコで桂籠さ云ふ花挿を上野介の着用して居た白  
綸子の片袖に包み、是れを槍先きに貫ぬいて持つて行く事に定めた、是れに依  
つて芽出度く木盟を達したのであるから、四十七士の人々は、又もや隊伍正々  
さして時しも東天紅ひを呈する頃ほひ、本所の吉良の邸を立ち出で、朽ちぬ

響れの永代橋を打ち渡つて、途中負傷人、或は疲れた人もあるから、回向院へ  
参つて暫時の休息を申し込んだが、回向院の住職は後難をおそれ、何うも  
貸して呉れない、仕方が無いから一同其儘で高輪の泉岳寺へ引上げる途中、大  
石は速水藤左衛門、神崎與五郎の兩人に命じて芝愛宕下大目附仙石伯耆守  
へ仇討ちの御届けをいたし、一方寺坂吉右衛門に旨を含めて南部坂、又但馬の  
豊岡へ差し遣はした、又其途中仙臺家の御厚意を受けて一同白粥の御馳走を  
受け、遂に泉岳寺へ引揚げた、其處で持参したした首を井戸にて洗ひ、白木の  
三寶に載せ冷光院殿御靈前へ供へる、愈々焼香さ云ふ時に大石の指圖で問  
新六、次に武林、唯七、次に間十次郎が、焼香をする、第四番目が御舎弟大  
學様の御名代として内藏之助が務める、第五番には瑤泉院様御名代として是  
れも内藏之助、其次は自分が焼香をして順次に焼香をする、終つて一同再び  
禮拜、嗚呼斯くして一同の人々は、年來の懇みを果して始めてホツと吐息を洩

らしたが、心中は果して如何の感があつたであらうか、思ひやるだに憐れに勇  
ましき事であつた、スル大公儀よりは十五日の夕方に成つて、泉所寺に静か  
に處置を待つて居る四十七士に命を下し、細川、久松、毛利、水野の各藩へ御  
預けに成つた、細川家へ御預けの人々は、

- 大石内蔵之助、吉田忠左衛門、原惣右衛門、片岡源吾右衛門、堀部安兵衛、富森助右衛門、間喜兵衛、近松勘六、磯貝十郎左衛門、間瀬久太夫、小野寺十内、潮田又之丞、速水藤左衛門、奥田孫太夫、矢田五郎左衛門、武林唯七、大石瀨左衛門

あて十七人

毛利甲斐守に預けられたる分は、

- 吉田澤右衛門、村松喜平、赤垣源藏、倉橋傳助、杉野十平次、間新六、前橋伊助、勝田新左衛門、不破敷右衛門、貝賀彌左衛門

あて十人

松平隠岐守へ御預けの分は

- 大石主税、小野寺幸右衛門、堀部彌兵衛、木村岡右衛門、岡野金右衛門、中村勘助、千葉三郎兵衛、犬高源吾、菅谷半之丞、岡島八十右衛門

あて十人

- 水野大監、物へお預けの分は

- 神崎與五郎、間十次郎、奥田定右衛門、矢頭右衛門七、間瀬孫九郎、村松三太夫、萱野和助、横川勘平、三村次郎左衛門

あて九人

扱て此方は公儀の役人方は、此の義士の所置に困つた、成る程忠心は獎勵すべ  
きだが、法を犯したものは使方が無いと云ふので、毎日の如くに評議をして居  
られる（「赤穂浪人の身の上は何うしたものだらう」）法を犯したには違ひ無

いざ、何うして此の忠義の武士をムザ／＼死刑に行なふと云ふのも餘りの事、と云つて此の儘見免しにしては、仇討禁制の法令が至然取り潰しの形に成る然うした時には是れから先きに又敵討ちがあるであらう、困つたものだ」と云つて居る此の時に柳澤出羽守が出「然らば大石内蔵之助の、今迄で行なつた事に非を打つ處が何かあるであらう、屹度十に一つは落度がある、其れを一々拾ひ上げたならば、九ヶ條や十ヶ條はあらうから、其處で其箇條書きを拵らへて内蔵之助一人を呼び出し、御尋問あつて其内に萬一、申し譯けの立たぬ箇條があれば其れを主目にいたして死刑を申し付けた事なれば、國主大名、外様衆が、徳川の政治に非を打ちはいたすまい、此の義如何であらう」と云ひ出した。皆「ウム成る程、是れは出羽様の仰せの通り、夫れが至極宜敷からう、其れでは大石内蔵之助の欠点を見出すが宜い」と云ふので、又もや種々相談の上是れも落度だ、彼れも手援けてござらうと段々拾ひ出して見ると、茲に十八ヶ

條と云ふものが出来た、其處で此の十八ヶ條の目安を拵らへて、茲に元禄十六年正月八日、大石内蔵之助に對し、大目付仙石伯耆守殿御役宅へ罷り出すべき旨御沙汰があつた、スルと細川侯は殿「是れは何さかして事明白に申し聞きなさせ度いものだ」と考へられた、と云ふのは越中守殿の畧みでは、何さかして赤穂浪人四十七人を無罪にして、自分の家臣にしたいと云ふ御考へ殿「併し當方の家來一人差添へと云ふから、此の差添人は確固りした者を撰み此の者を以つて大石の欠点を云ひ解かして遣らう」と云ふ事に成つて、御家臣の内右吉四郎左衛門、中安平八郎、澤村才八郎、此の三人の内澤村才八郎が任撰せられた、此の人は細川家の大才物と云はれ、文武両道に勝れた人だ、其の内愈々其當日に成るさ、七ツ半時供揃ひに及んで、澤村才八郎は大石内蔵之助と同道にて、西丸下の仙石伯耆守殿御役宅に罷り出で、其れより已の上刻龍の口御評定所へ呼び出された、

龍之口評定所十八ヶ條申開

見渡す斗りに廣々たる御評定所には、先づ正面に御老中稲葉丹後守、土屋相摸守、秋本但馬守、御掛り小笠原佐渡守、殿には御席をズンと前に乗り出して御着坐に相成る、其れより少し下つて若年寄加藤遠江守、本田肥後守、井上河内守、寺社奉行阿部飛騨守、本田彈正少弼、永井伊賀守、大目附仙石伯耆守、安藤筑後守、近藤備中守、町奉行安田越前守、松前伊賀守、御勘定奉行根方因幡守、外川豊前守、御目附鈴木源五衛門、多々羅善八郎、水野吾左衛門、久留重左衛門、松平兵庫、向井左兵衛助、家來近藤伴右衛門、石田善右衛門、高家品川備前守、家來野村源兵衛、品川主馬、差し添へ参考人として呼び出され、威儀を正してズーツと居並んだ、此時澤村才八郎は黒羽二重の小袖に、行儀殿九曜の星の紋付いたる上下、大石

内蔵之助を先きに立て、進んで来る、大石は鬘斗目二ツ巴の紋付いたる麻上下を着用なし、小笠原佐渡守御着席より、御疊三枚斗りを隔たつて平身低頭をして居る、此時小笠原佐渡守殿は聲さわやかに佐元淺野内匠頭家來家老大石内蔵之助、御不審の筋あつて御召出しに相成る、唯今御尋ねの目安を是れにて讀み聞かせる間、謹しんで承わる様に内「ハ、ツ、ア、松平兵庫大石の不審の箇條是れにて讀み聞かせい兵「ハ、ツ、」と松平兵庫守十八ヶ條の目安を讀み聞かせた、其れが終るに小笠原佐渡守佐去年十一月十四日の夜、其方頭取りと相成り、四十余人吉良左兵衛佐宅へ亂入に及ぶ、是れ徒黨にして仇討ちさは稱へぬが何うちや」大石内蔵之助は恐るゝ顔をあげ内「ハ、ツ、恐れながら申し上げます、私し義は内匠頭譜代の家老にて亡君存生より年寄役相勤め、代々召し遣はれ候、頭取の義は勿論此の度びに限り申さず併し徒黨には是れ無く候佐「イヤ四十余人は徒黨であらうが内「イエ皆内匠頭



家來のみにて、外人數は一人も加へません故、徒黨には是れ無く、私義は五萬三千石の家老、君は一天下の大權の理、非曲直を辨し給ふの御身、何卒御賢察の程を願ひ奉つりまする」此時、土屋相摸守殿は相「何うかして内蔵之助に此難問を申し開かせ、願はくば死罪一等を許させて遣り度い」と考へられたから、御側に着坐せられた稻葉美濃守に御向ひ遊ばされ相「ア、美濃殿、只今の内蔵之助申開きは明白の様に存する、内匠頭家臣の主君の残念を補ふと云へば、義黨と稱へて然るべく、徒黨とは徒らの輩と相成る、餘り情け無き申分でごさらう」と聞こへよがしに話して居られる、小笠原佐渡守殿は是れが邪冤に成るから佐「イヤ各々、左様御賞美は近頃其意を得ず、彼れに免れぬ事あり……、ア、内蔵之助、公儀御膝元を憚からず狼藉に及び候段申し譯けがあるか何うちや内「ハッ恐れながら御膝元とは其意を得奉つらず、上野介殿宅は御用心殿重にして却々に討入り難く、御登城御歸りを待つて道路に討

ち奉つれば心の儘に候へども、夫れにては御膝元を騒がし候義も是れあらんかぞ存じ、左兵衛佐御自宅へ推參仕つてござる、其間、隅田川と云ふ大河あつて兩國橋と稱へ候、私共、田舎武士の心得たは下總、武藏境の橋なればこそ、兩國の名あるべく、本所松坂町は下總にして武藏隣國の事なれば、御膝元を騒がすの御咎がめはあるまいかぞ存じ、依つて吉良御邸へ進入に及び候スルと又稻葉様が相「是れも土屋殿宜い様でござるナ、成る程本所は下總にして御膝元にあらず、ア、内蔵之助宜く申した」苦い顔をしながら小笠原殿言葉をついで佐「然らば尋ねる、尋常に參るべき筈なるに夜中に於いて亂入いたすは是れ盜賊の所爲に等し、此の義は大石如何なる心底なるぞ内「ハッ、恐れながら仇は高家の御歴々、且つは上杉家の御味方あり、却々私共浪人の能く討ち奉つる事能はざるは勿論、萬一討ち洩しを成しては亡君の憤りを増すさ心得、大敵には夜討ち先き駆けさ承わり居り候に付き、右夜討をいたしまし

た、去れば盜賊に紛らはしからざる様、討入り引揚げとも御隣家へ御置けをいたし置きたる次第、然るに盜賊は痛み入つたる義にございます 佐「ウム……然らば其方始め一同、火事装束着用、非常第一嚴重の御府内に於いて、穩便ならぬ致し方、ヨモヤ申し譯けはあるまい 内「五十人に近き人数一緒に扮装し候事、穩かならずさ雖も、田舎武士は火を消すは火事装束を存じ、御府内警衛の爲め旁々以つて火事仕度ないたしましてございます」此時 又土屋侯が相「イヤ是れも申譯けが立つた様でござる、火事装束を着て火を付けてあるく者もござるまい、非常嚴重の御府内で、火事装束は何も告める處はあるまい、佐「然らば別の箇條を尋ねる、夜討ちの砌り太刀添へにて相濟むべきに、長道具を持参いたし候は軍事に均しきいたし方、此の儀は如何に……内「ハツ、一同に其品を持参いたさせましたるは、對手は高家の御歴々、殊に上杉家の御加勢も是れあり、大勢を對手に仕つり候覺悟に付、其當時持たせましたは九尺

柄の手槍にございます、豫て師父の教へには、九尺柄を槍と稱へ、二間柄を長柄と稱へ候由、右は亡君内匠頭存生中より、家臣三百十七人に此手槍を相許し候故、右手槍を相用ひさせたる義にて、又古來より武者道具四百八十餘品の内、長道具と申すべき品は未だ一向に承わり申さず、右様の品は決して持参仕つりません、併し心得の爲め長道具と申すは如何なる品に候や、何がひ置き度う存じます」云はれて小笠原佐渡守様 佐「ウム……」と息きつまつた、此の長道具と云ふ物は決して無いので、是れは御祐筆が長柄を長道具と書き誤まつたのでございます、小笠原様は少し赤面をせられて 佐「ウム、然らば夜討ちの節數百人上野介の屋敷を固め、窓一間に抜身の槍三本を以つて防ぎ候由、是れなる人数は何れより出で、何れに引揚げたるや、明らかに申し上げい、是れは内蔵之助にも知れなかつたので、當夜赤穂の浪人を吉良邸へ討ち入ると、何處からとも無く黒装束の武士が數百人駈け集まつて参り、吉良の

邸を取り巻いたに違ひ無い。凱歌を掲げて四十七士が引き揚げたさ同時に、雪を蹴立て、何れへか立ち去つて仕舞つた。是れは藝州から出して呉れた人数か、或は大石の兄支蕃が秘かに岡山池田の人数を繰り出して呉れたか、是れの内どちらかであらうと云ふが、今に於いて充分に判らない。此の時内蔵之助は内「恐れながら只今のお尋ねは其意を得ず、私共四十余人の外に助勢加勢と云ふ者は決して一人もございませぬ、然るに吉良の邸を固めた杯さば跡方も無き事でございませぬ」處が向ふに控へたる吉良の家來近藤牛右衛門、木田仙右衛門の兩人、内「恐れながら申し上げます、私共此の椿事を上杉家へは注進申し上げ様ぞ存じて、門よりは到底出入りを許されまじきを察し、長屋の窓を毀して此處より戸外へ逃れ様とするさ、窓の外より私共の目許へ突き出し、強いて出する時は據るなく命を取らんければ成らんぞ脅されまして、遂に出る事も相叶はず見苦しき身の上ぞ相成つたる次第、全く戸外より拔身の槍を差し出し

たに相違ございませぬ佐「ア、内蔵之助、参考人は那の通り申すが何うザヤ、内「イエ私共は一切他人敷を頼んだ覺へはございませぬが、唯今考へて見ますれば十四日の夜は、二三日前より餘り續きたる大雪にて、其夜好天氣と相成りましたる故、雪解けに相成つて雨垂れを落し、是れが夜に入り寒氣甚たしく相成り、其爲めに雨水が凍つて氷柱の下りましたるを、進退の駆け引きをいたしながら私共も眺めました、然るに吉良の家臣が主人の大事を見捨て、上杉に注進は表面むきで他へ遁れ様とする臆病者、卑怯者の目には自然此の氷柱が拔身の槍と見へたかぞ存じます、古へ平家の武士が水鳥の音が、敵軍の鬨の聲を聞き違へ逃げ出したる前例もあり、宜敷く御賢察を願ひ上げます佐「ウム何もイヤ兩人の者、兩「憚りながら申し上げます、如何に私共卑怯にもいたせ氷柱と槍は決して見違へませぬ、槍は下から突き上げますもの、氷柱は上から下まで居りまする物、見違ふ様答がございませぬ」スルと同じく高家の差添人

品川主馬と云ふ人は、矢張り吉良を憎んで居る者で、何うか大石に申し開きをさせて遣り度いと思つたから主「イヤ兩人の者、お前達ちが吃驚りした目から見たので、棺に見へたのであらう、併し其れは氷柱だく」さ逢頭棺は氷柱だつたさ成つて仕舞つたから、多くの御役人も思はずクス／＼とお笑ひ成すつたさ云ふ、處り又もや小笠原様は大石に向ひ佐「然らば次ぎに尋ねるが、吉良左兵衛佐表門を打ち破り、亂入に及び候事、狼籍至極、言語同斷、頭取を相勤める其方故、表門の大切なるを知らざる事もあるまい、何うザヤ内「ハツ私しも表門を大切と心得、裏堀へ階子を掛けて圓入いたしたのでございませす 佐「イヤ／＼屋敷檢分の時表門の開きあつたる旨見分役より上申に及んだぞ」

○芳哉義士の最後、大團圓

内「ハツ其儀は右夜討ちの節、盜賊共是れを奇貨として入込み候事側り難くぞ存じ、連中より廻りの番の者を付け置きましたる處、吉良殿の御家來表門を押し破り、逃げ出し候に相違是れなく、吾々共が打ち破りました譯では決してございません 佐「去年十一月十四日打入りの節、夜中の事故火を持参いたしましたるは勿論なるが、其れは提灯なるか果た何を用ひしや、又打入りの刻限は何時なりしか内「打入りの刻限は子の半刻、勿論火は一切用ひません、十四日夜の月は白晝の如く、又雪明りにて右兩様に依つて燈火は用ひません、又御殿の内は燭臺に残りました蠟燭を相用ひましたのでございませす 佐「内蔵之助、其方は一々申譯けないたすが、陪臣の身分を顧す、御直參殊に高家の筆頭たる吉良家を對し、思ひの儘に舉動ふと云ふは公儀を恐れざるいたし方、到底も罪科は免れぬぞ内「ハツ、尊命の通り陪臣の身分を以つて、公儀お歴々に對し存分の働らき恐れ入り候へ共、君に仕ふる臣の身さいたし居候ば、高家は扱て置

き天下の諸侯たりと雖も、主人の仇を打ち捨て置くは到底も忍びず、右に付き公儀より何様の厳刑に處せられ候とも、主人の存念を果し身分不相應の勤らき誠まことに悦よろこび入りました次第しだいにごさいます」處ところが又土屋様つちやさまが相あひま「内蔵之助の申分道理ぶんりでござる、公儀こうぎにもいたせ國持くにもちちにもいたせ、主人の敵を打ち捨て置くは決して武士道ぶしだうに無い、内蔵之助うちざうのすけが行おこなひし處ところは君臣くんしんの情誼じやうぎ是れに現あらはれ、實じつに立派りつぱなる申し立てたてある佐さ「イヤ内蔵之助うちざうのすけ、其方そのほうは義ぎを稱たたかへて天下てんかの法ほうを辨わまへぬ、敵討あだうちをなすに軍事ぐんじに等ひとしき飛道具とびだうぐを何故なげ用もちひた内うち「御訊おんきんねにごさいまするが、鐵砲てつぱう杯はは決して持参じさんいたしません、半弓はんきゆう五挺ごていを持参じさんいたしたのはいま十分じふぶん駆引かひきの爲ためにはあらず、吉良殿きちらどのにして若も一し駆かけ去さり、又堀またほり堀ほり杯はを飛び越とさぬとも云いへませぬ故ゆゑ、右用心ゆうしんの爲ため持参じさんいたしたのみにございます 佐さ「ウム其方そのほう萬事ばんじ心こころを用もちひたる様よう申開もうらきをいたして居いるが、左兵衛さへゑ佐さ宅たくより引取ひきとりの節せつ、手槍てやり、繩梯なわはし子こ其他その他半弓はんきゆう、弓杯きゆうはを取り落おし、泉せん石寺いしがきに逃にげ去さつ

たるは、上杉うへすぎより後詰ごづつめの人數にんず來きたらんかぞ存ぞんじ、臆病おくべう未練みれんにいたした事ことであらう、左程さほど生命せいめいの惜おぼしければ、右様みぎようの義ぎはいたさぬが宜敷よろしからう内うち「イヤ是れは誠まことに異いな御間おんまひ、兵書へいしよにも夜戦やせん、夜攻よあめ、夜討やうち、夜盜やとうのやうに分わけてございます、右みぎの通り夜討やうちの砌せきり勝利せうりを得えました証せう據こに、敵てきの敗軍跡ばいぐんあとへ、味方みかたの印しるしある武器ぶきを取り殘のこし引き揚あげたのは、武門ぶもんの古例これいにごさいます、又敵またあの敗軍ばいぐんの後詰ごづつめの兵器へいきを奪うばひ取りまするは、是れ武士さむらいの道みちには分捕ぶんどりに稱なへますが、此この上うへも無なき耻辱ちじよくぞ存ぞんじます、私わたくしは吉良殿きちらどのへ推参すいさんいたし、夜討やうちには勝かちをぬめました故ゆゑ、古法こほうに倣なまひ味方みかたの武器ぶきを勝軍せうぐんの証せう據こに、即すなはち御邸内おんやしなに殘のこして引揚ひきあげました譯合わけあひにごさいます、恐おそれながら狼狽ろうたいへたかぞの仰おほせは何事なにこと太平たいへいの御政治ごせいじには御明君ごめいくんなれど、武門ぶもんの古例これいにはお暗くらひかぞ相見あひみへまする」ボソ一本ほん突込つっ込んだから、佐渡守さどのかみは又赤面またせきめんを成なされる、聞いて居いられた稻葉美濃いなばみの守殿かみどのが美み「ア、佐渡殿さどどの、モヤヤ巳みの刻ときに間まも無し、殘のこりの箇條かぜうもは後ごして是れ

を尋ねて然るべく、今日の評定は是れまで……」と云ふ事に成つたから大石は  
始めてホツと一息吐いて、澤村才八郎と共にお下げに成つたから、才八郎は再  
び大石内蔵之助を同道して細川家の御邸へ歸つて来る、此方は御老中方が又御  
集合に成つて、美六ツケ敷い箇條は過日お訊れに相成つたが、那の通り少しも  
滞りなく申し開きをいたした、此の後の箇條は別に相訊れた處が内蔵之助  
の辯舌で申し開きは知れた事だ」と仰せられる、此の時秋元但馬守但十  
八ヶ條で大石を取り押へるのは是りア到底も行くまい、依つて赤穂浪人の取扱  
かいに付いて其處置は、政治掛りの者、又は御三家杯に入札をさせ、多分に従  
がつて處置を付けたならば、別に大名方に於いても徳川の政治に非を打つ氣遣  
ひは無からう、皆ウム其れは面白い」と外に是れと云ふ策が無いものだから、  
遂に一月廿七日、御大老御老中を始め、御三家其他掛り役人十名斗りて、入札  
をする、先づ第一に土屋相摸守、續いて阿部豊後守、秋元但馬守、若年

よりか藤達江守、寺社奉行永井伊賀守、町奉行松前伊豆守の人々は、皆大  
石内蔵之助以下四十七人の人々は、武士道の龜鑑であるから、何處か然る可き  
大名へ預け、其内折りを見て赦免をした方が宜からうと云ふのであつたが、外  
御三家の内尾州侯は御國に御歸り申故、紀州家、及び水戸家の入札が残つて居  
る、處が紀州様の入札にも浪人を切腹と云ふ事は無かつたけれども、水戸様の  
入札が獨り群を抜いて居る、其入札に曰く、  
法は天下の法なり、四十餘人の者忠臣なりさて天下一統の法は狂ぐべか  
らず、殿中にて喧嘩口論白刃を揮ふ者は家名取潰しの義は東照宮以來  
天下の法なり、是れを狂ぐれば即ち天下の法を破るものなり、内匠頭家  
名斷絶は勿論の事、四十餘人の者天下禁制の法を破り、上野介を  
討取る其罪許すべからず、依つて切腹申し付くべき事、昔し鎌倉頼朝  
の時曾我兄弟父の仇工藤を討ち取り、子なりと雖も狩場の狼籍法を破り

罪許すべからず、遂に頼朝曾我五郎を死刑に行なはる、然るに誰れか後世頼朝を無道と云はん、又曾我兄弟の名は天下に著し、諸役人此の理を考へよ

と僅か一本の入札で、何うしても死罪は免がれんさ云ふ事に成り、愈々元祿十四年二月四日、三田の細川越中守邸へ上使として、荒木重左衛門、副使久我内記、徒士目附七人、御小人目附七人差遣はされ、即ち義士の人々に切腹の義を仰せ渡された、又麻布の毛利甲斐守邸へ上使として鈴木治郎左衛門、副使齋藤治左衛門、徒士目附五人、御小人目附五人、松平隠岐守邸へ鈴木幸右衛門、副使として駒木根茂左衛門、徒士目附五人、御小人目附五人、水野大監、物邸へ久貝重左衛門、副使として赤井平右衛門、徒士目附五人、御小人目附五人を差遣はされ、各々切腹の義を申し渡しまするさ、何れも麻上下に威儀を正して有難く御受けに及び、従容として笑つて死に赴き、茲に忠勇義

烈の四十六士は、天下の檢視檢分の許に、朝日に匂ふ山櫻花、武士道の精華を盡して一片の花片と散つた、其最期に當つて義士の人々の辭世は、

水に映る花や藻屑に浮きかへて、

散りしを恨む庭の梅ケ枝、

極楽の道は一筋君さもに、

阿彌陀を添へて四十八人、

豫ねてより君と母とに知らせんさ、

人より先きに死出のやま道、

先立ちし人ばありけり今日の日ば、

ついに旅路を思ひ出にして、

思ひきや吾が武士の道ならず、

斯る御法の道に逢ふさは、

大石良雄

主税良金

原惣右衛門

富森助右衛門

木村岡右衛門

待てしばし死出の早足遅くとも、

吾れ魁の道しるべせむ、

さめて飲む茶屋はありけり死出の旅、

横川勘平

草枕むすぶ仮寝の夢さめて、

所にかわる春のあけぼの、

思ひなく生き過ぎたりと思ひしに、

今里へ行く老のたのしみ、

村松喜兵衛

間喜兵衛

斯くて忠烈鬼神を泣かしめる四十六士の遺志に依り、亡君の御墓所たる縁深き  
泉岳寺の墓畔に葬むつたが、其美名は千載不朽、今に残る泉岳寺義士の墓碑は  
香煙縷々として其芳名を遺した、尙彼の寺坂吉右衛門は死罪を免がれて、後出  
家をなし、播州華岳寺に同志の人々の石碑を建て、七十七才迄墓守りをして

相果てたさ云ふ、嗚呼敷嶋の大和心の櫻花、散つての後の名こそ惜けれ、

大石内藏之助東下り

終



明治四十五年三月十五日印刷  
明治四十五年三月二十日發行

著作  
所有

(附奥助之藏内石大)  
〔錢五拾貳金價定〕

著者 雪花山人

大坂市東區博勞町四丁目十三番地

發行者 立川熊次郎

大坂市東區博勞町一丁目一番地

印刷者 蒲田德之助

大坂市東區心齋橋通博勞町

發行元

立川文明堂

電話南三千〇九十四番  
振替口座(大坂)一四六一番





文川立庫

定價壹冊各金貳拾五錢

諸國漫遊一休禪師	諸國漫遊水戸黃門	諸國漫遊大久保彦左衛門	伊賀荒木又右衛門	智謀眞田幸村	武士道華岩見重太郎	諸國漫遊最明寺時頼	太閤三會呂利	武士道華宮本武藏	豪傑後藤又兵衛	武士道堀部安兵衛	精進新羅ビンソン漂流記	奇談譯ロビンソン漂流記	太閤記木下藤吉郎	卷の一
柳生十兵衛旅日記	武士道華西郷隆盛	武士道華塚原卜傳	劉瑩石童丸	豪傑山中鹿之助	奇談水戸黃門關西漫遊記	豪傑斑鳩平次	武士道華塙右衛門	武士道華戸田新八郎	赤穂大石内藏助	義士關口彌太郎	豪傑井上大九郎	豪傑木村又藏		

△文明堂發行目錄▽

小宮水心註	川原閑舟編	文明堂編輯	同	同	同	同
註解日本外史	市町村便覽	改正日本法律全書	改正日本六法完	民	商	刑
新版定價壹圓卅五錢	新版定價八拾錢	總タロス定價七拾錢	總タロス定價八拾錢	定價七錢	定價七錢	定價七錢

文明堂編輯 稅

法定價拾七錢

同 市町村

制定價拾七錢

同 民事訴訟

法定價拾七錢

法典講習會著 言文一致 刑法註

釋 定價拾七錢

同 正改刑法問答講義 定價五拾錢

大野雲潭著 老莊講義 新版 定價參拾錢

小宮水心著 思想交換 美文的書翰文 定價六拾錢

同 二十世紀 新論 文 定價六拾錢

同 思想交換 美文的書翰文 定價六拾錢

鈴木撫水著 新編 日用書簡文 定價貳拾五錢

梅田愛水著 二十世紀 實用書簡文 定價參拾錢

露香夢仙著 美文的候 文 定價參拾錢

同 流水總 定價參拾錢

同 葉書小品 落花片 定價參拾錢

清遊山人著 作文良材 遊紀 文 定價參拾錢

香夢迷仙著 花笑柳媚 美人千姿 定價參拾錢

紫雲山人著 新体詩編 おもひで 定價 參拾錢

幸田紫朗著 作文良材 美文之海 定價 參拾錢

川原閑舟著 俳句と川柳 定價 參拾錢

楓葉散史著 新編 祝辭演說大成 定價 四拾五錢

國部紫燭著 講話資料 新お伽百話 定價 參拾五錢

西垣堯則著 新譯 イソツブ物語二百話 定價 六拾錢

同 品性修養 人格鍛練 格言教訓全書 定價 六拾錢

楓葉散史著 青年立志修養編 定價 參拾五錢

大物理學校 數學公式 定價 四拾錢

同 新編 算術講義 並二例題精解 定價 壹圓八十錢

數學專攻會 普通教育 實用新算術 並二例題精解 定價 七拾錢

同 普通教育 實用新算術 定價 參拾五錢

研數學館著 普通教育 珠算獨習全書 定價 參拾五錢

同 珠算新書 定價 貳拾錢

英研究會著 二十世紀 日英手紙文 定價 五拾錢

元木貞雄著 英和新會話 定價 五拾錢

英研究會著 英いゝるは引單語會話 定價貳拾五錢

玉田玉秀齋述 水戸諸國漫遊記新版 定價四拾錢

加藤玉秀述 武士道荒木又右衛門新版 定價四拾錢

廣澤虎吉述 實錄義士銘々傳一編新版 定價四拾錢

報效會著 一宮尊德 定價參拾錢

十返舎一九著 東海道中膝栗毛 定價六拾錢

加藤玉秀述 立川文庫 第一編 一休禪師 定價貳拾五錢

同 立川文庫 第二編 水戸黃門 定價貳拾五錢

立川一文庫 諸國漫遊 一休禪師 定價貳拾五錢

立川二文庫 諸國漫遊 水戸黃門 定價貳拾五錢

立川三文庫 頓智奇談 大久保彦左衛門 定價貳拾五錢

立川四文庫 伊賀水月 荒木又右衛門 定價貳拾五錢

立川五文庫 智謀 眞田幸村 定價貳拾五錢

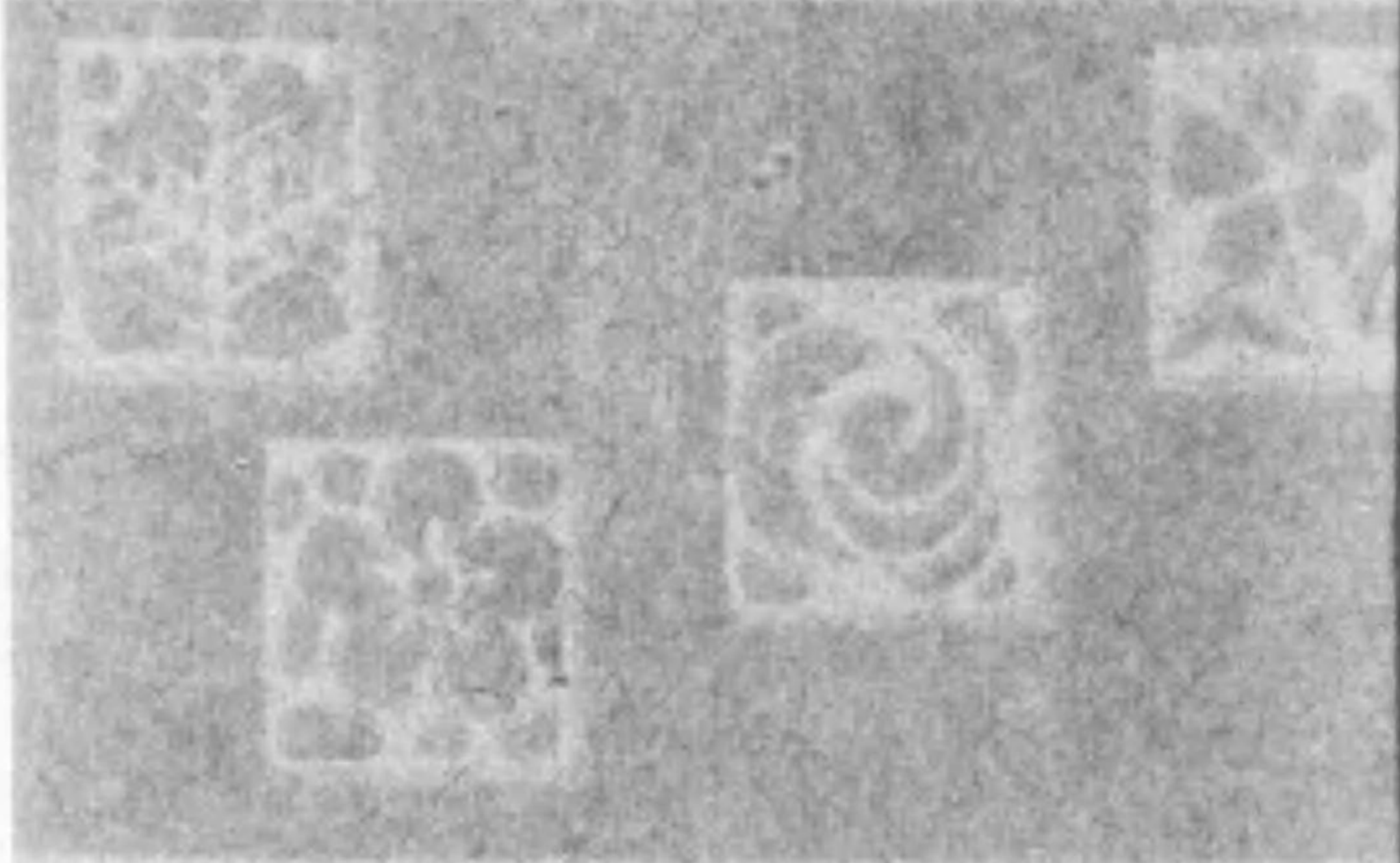
立川六文庫 豪傑 岩見重太郎 定價貳拾五錢

立川七文庫 諸國漫遊 最明寺時頼 定價貳拾五錢

立川八文庫 頓智奇談 太閤と曾呂利 定價貳拾五錢

立川九文庫 豪傑 宮本武藏 定價貳拾五錢

第立 十川 八文 編庫	第立 十川 七文 編庫	第立 十川 六文 編庫	第立 十川 五文 編庫	第立 十川 四文 編庫	第立 十川 三文 編庫	第立 十川 二文 編庫	第立 十川 一文 編庫	第立 十川 一文 編庫
赤穂 義士	奇談 珍聞	劉石 登	豪傑 塚	柳生重兵衛 日記	武士道 精華	天下之 偉人	絕島 奇談	豪傑
大石	水戸黃門關西漫遊記	童丸	原卜傳	堀部安兵衛	太閤秀吉	新譯ロビンソン漂流記	後藤又兵衛	
內藏助								
定價貳拾五錢	定價貳拾五錢	定價貳拾五錢	定價貳拾五錢	定價貳拾五錢	定價貳拾五錢	定價貳拾五錢	定價貳拾五錢	定價貳拾五錢



270  
14





終